

文學士高桑駒吉
文學士坂本健一
合著

新撰東洋史全

東京

合資
會社
富山房發兌



例言

本書は中學校師範學校其他之と同程度なる諸學校の教科用に資せんが爲め、専ら文部省の中學校教科細目に準據し、間々著者の意見を參酌して編述せり。

著者が本書に從來の東洋史の如く時代の區分を設けざりしは、假令中等教育に於ける東洋史教授の旨意が、支那を中心として東亞

細亞に於ける人文の發達を知らしむるにありとはいへ、唯に漢人種の發達變遷のみを記して東洋史の能事終れりとなすは余輩の採らざる所なるのみならず、漢人種以外東洋史上に顯著なる大動作をなせる諸人種の發達變遷は個別にして漢人種のそれと相伴ふこと少なきが故に、單に支那の史實により古今の時代を劃する能はざるを信ずればなり。

支那朝鮮以外の人名地名にして古くより漢字に譯して行はるゝ者は、重もに慣用の文字を用ゐたりと雖も、然らざる者はすべて假字を用ゐたり。

紀年に西紀即ち基督紀元を用ゐたるは西洋史と比較對照の便を得せしめんが爲なり、而して顯著なる年代の下に支那及我時代の兩者若しくは其一を挿入せるは、聯想によりて

時代の記憶を容易ならしめんが爲なり。
 地圖は卷末に加へたる者の外、閲讀の際直
 に當時の形勢を知らしめんが爲め、木板の小
 地圖を本文中に組入れたり。

明治三十四年八月

著者 識

新撰東洋史目次

第一編

- 第一章 太古の支那 唐虞三代 一頁
- 第二章 春秋の世 七
- 第三章 周の制度文物 孔子 一一
- 第四章 戰國 一六
- 第五章 周末の學術 二〇
- 第六章 太古の印度 佛教の興起 二三

第二編

- 第一章 秦の一統 楚漢の争 三〇
- 第二章 漢の初世 高祖の創業 呂氏
の亂 文景の治 三六

第三章 武帝宣帝の業 四夷の服屬 四一

王氏の篡

第四章 後漢の政 西域の叛服 五〇

第五章 匈奴鮮卑の盛衰 五六

第六章 三國 六〇

第七章 晋 五胡十六國 六七

第八章 東方諸國 朝鮮 三韓 夫餘 高句麗 百濟 新羅 の古史 七六

第九章 大月氏及印度 佛教の東流 八一

第十章 宋齊梁魏 八四

第十一章 陳北齊周隋 柔然突厥 八九

第三編

第一章 唐初の治 武韋の禍 九六

第二章 開元の治 安史の亂 一〇〇

第三章 藩鎮宦官の禍 唐末の大亂 一〇五

第四章 東方諸國 高句麗 百濟 新羅 渤海 の盛衰 一一〇

第五章 西北諸國 突厥 回紇 吐蕃等 の盛衰 一一五

第六章 漢唐の儒學 文藝 一二二

第七章 佛教道教 祇教景教の東流 一二九

南海の貿易 一二九

第八章 五代 宋の初世 一三七

第九章 神宗の新法 哲宗の改復 一四四

徽宗の紹述 一四四

第十章 遼金の興廢 高麗の盛衰 一四八

第十一章 宋金の交渉 一五三

第十二章 宋代の儒學文藝

一五七

第十三章 大食國の分裂 印度に於ける回教國

一六〇

西遼の建國

第四編

第一章 蒙古の勃興 元の太祖の西征

一六六

第二章 元の太宗及憲宗の南征 拔都及旭烈兀の西征

一七二

第三章 元の世祖の一統及東侵

一八〇

第四章 海都の興亡 元代の治亂 欽察察合台伊兒汗三國の盛衰

一八五

第五章 明の初世 太祖の創業 靖難の役 成祖の遠畧

一八九

第六章 帖木兒大王の兼併

一九六

第七章 明の中世 土木の變 大禮の議 俺答の寇

二〇一

第八章 交趾の叛服 沿海の寇盜

二〇五

第九章 明の末世 萬曆朝鮮の役 東林の獄 流賊

二一一

第十章 元明の儒學文藝

二一五

第十一章 莫臥兒帝國の興亡

二一九

第十二章 葡萄牙西班牙の東略 天主教の東流

二二三

第五編

第一章 清の開國 世祖の一統

二二九

第二章 清の聖祖高宗の業

二三二

第三章 清人の學術

二四四

第四章 東洋に於ける蘭英諸國の競争

二四五

第五章 英領印度

二四九

第六章 清英の交渉

二五四

第七章 長髮賊の亂 英佛の北清侵伐

二五七

第八章	露人の東略	清露の關係	英露の衝突	二六三
第九章	安南暹羅	清佛の交渉		二七二
第十章	清韓の關係	明治征清の役		二七七
第十一章	東洋に於ける英露及佛獨米	世界に於ける東亞諸國の現勢		二八四

新撰東洋史目次終

新撰東洋史

文學士 坂本健一
文學士 高桑駒吉 共著

第一編

第一章 太古の支那 唐虞三代

支那は東方亞細亞の大平原にして、東南は太平洋に面し、西南にヒマラヤ山あり、西は葱嶺、西北はアルタイ山に限られ、北に黃河、南に揚子江ありて共に西より東に流れて此大平原を横斷せり。今を距ることほゞ五千年前に漢人種西北方より苗人種を逐うて東方に來り、黃河の沿岸に留りて

支那の地勢

太古の支那 唐虞三代

幾多の部落をなせしも、各酋長を戴きて未だ一統の君はなかりき。その酋長の中にて燧人氏は火食の法を傳へ、伏羲氏は佃漁を教へ八卦をつくり、神農氏は稼穡交易の道を開きて最も有名なりしゆゑ、後世より三皇と稱せり。

三皇 黃帝

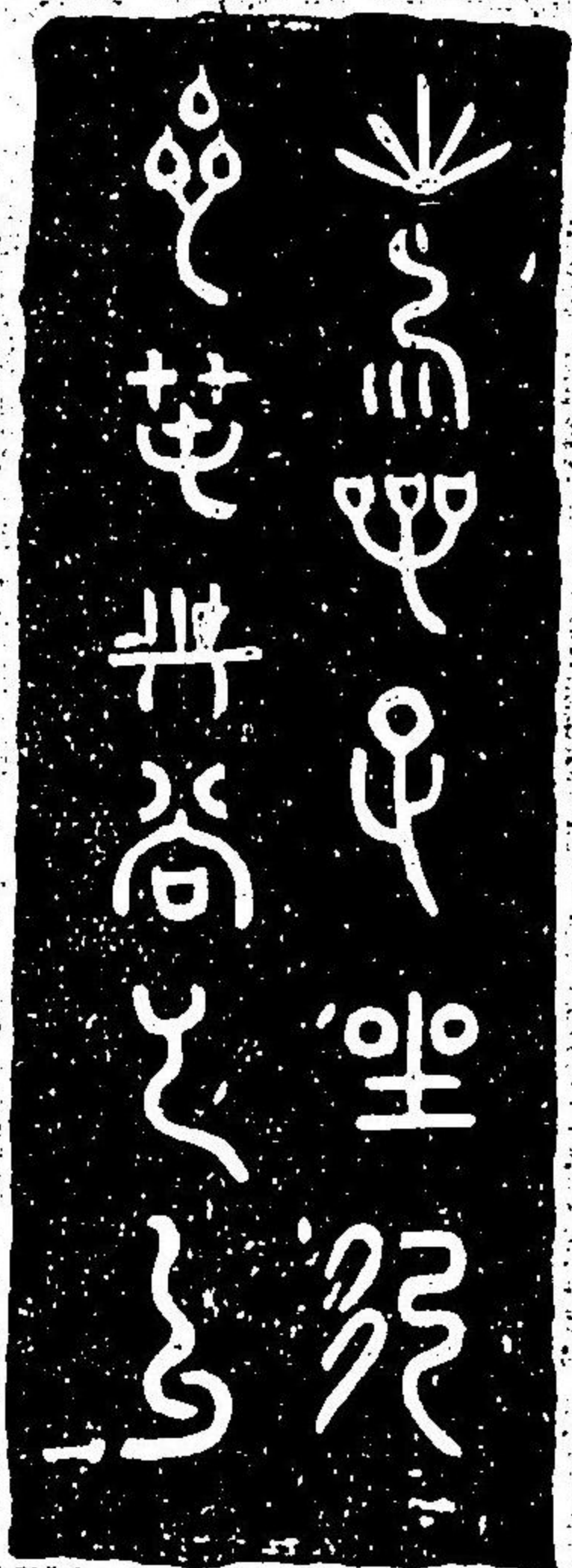
三皇の後、有熊國河南省開封府に黃帝出で、干戈を執つて四方を征伐し、西は空桐甘肅省肅州より東は海に至り、北は釜山直隸省宣化府より南は楊子江に至る大帝國を立てたり。支那の文明は上、官職衣冠の制より下、宮室舟車文字曆數に至るまで、此時代に起りしもの多し。是を支那に於ける統一の始となす。

堯

黃帝につぎて顓頊、帝嚳の二君あり。帝嚳の子堯は平陽山西省平陽府に都せしが、天下洪水ありしを以て鯀に命じ水を治めしめしに功無し。時に堯は舜を微賤より擧げ用ゐて帝

舜

位を譲らんとせしに、鯀は共工、驩兜三苗の族と結託して之に反抗せり。舜よりて堯を相けて此四凶を除きて位に即き、蒲坂山西省蒲州に都し、鯀の子禹を擧げて洪水を治めしめ、中央には司空、司徒以下の官を設け、地方には四岳、十二牧等の



夏禹の職を置き、巡狩朝貢の制をはじめ、天下大に治まれり。堯は唐より

五帝 夏

起り、舜は虞より出でしを以て此時代を唐虞の世と稱して、聖代の鑑となし、また黃帝より舜に至る五人を五帝といふ。禹は水を治めし功を以て舜の禪を受け、國を夏と號して、安邑山西省解州夏縣に都せしが、自嘗て艱苦を嘗めしを以て下情

に通じ、よく民力を休養せしめ、民其徳に服し、禹の死後其子啓を立つ。支那に於ける王家の世襲此に始まれり。啓の孫相の時、有窮山東省濟南府の後羿、及其の臣寒浞、亂を作せしに、少康出て之を平げ、夏道を中興せしも、少康の後十一傳して桀王に至り、暴虐にして民心を失ひ、遂に商の湯王に攻められて夏國滅びぬ。

湯王は舜の司徒契の後にして商陝西省商州の君たり。賢人伊尹を用ゐて、内民心を收め、外諸侯を服し、夏の桀王を南巢河南省亳に放ちて、亳河南省歸德府に都し、國を商と號せり。盤庚の時に至り王室衰へしを回復して都を殷河南省河南府に遷せり、殷の國號此に起る。然るに其後紂王は税を重くし、刑を峻くし、淫虐を縱にして箕子、微子、比干等の諫を聽かず、百姓怨望し、諸侯

商

殷

周

周の武王

成康の治

離叛して周の武王に滅ぼされたり。

周は姬姓にして、其祖先は舜之岳の後稷稷より出てしといふ。後古公亶父に至り、獯鬻を避けて岐山陝西省鳳翔府岐山縣の下に移り、始て國を周と號せり。亶父の孫昌は殷の西伯となり、徳高くして諸侯多く之に歸服し、天下の三分の二を保ちしといふ。昌歿して子發は呂尙太公望を用ゐ、諸侯を率ゐて殷の紂王を破り、天下を得て、鎬京陝西省西安府に都し、父昌を追尊して文王とし、宗室功臣を諸方に分封して五等の爵を立つ、武王是なり。武王没して後周公旦、成王を輔けて天下に臨み、制度禮樂を作りて範を後世に垂れ、召公奭も亦よく王室を輔翼したりしかば、成王の子康王の世を終るまで周は最も隆盛なりき。然るに康王の孫穆王は遠略を好み、天下を周遊し



て諸侯の心を失ひ、次で厲王は暴虐にして國人に逐はれしかば、宰相共和の政を爲すこと十、那四年に及び、其子宣王は獫狁荆蠻及び淮、徐の二夷を征服して上、中興の業を成せしも、終に周初古の盛に恢復する能はず。後幽の王は褒姒を寵して犬戎に弑せられ、其子平王は戎狄の勢を避けて都を東の方、洛邑河南省に遷せり、之を周の東遷といふ。是より後諸侯強横にして蠻夷

周室の東遷

中國を侵し、周は王家の名のみありて統治の實權莫きに至れり。

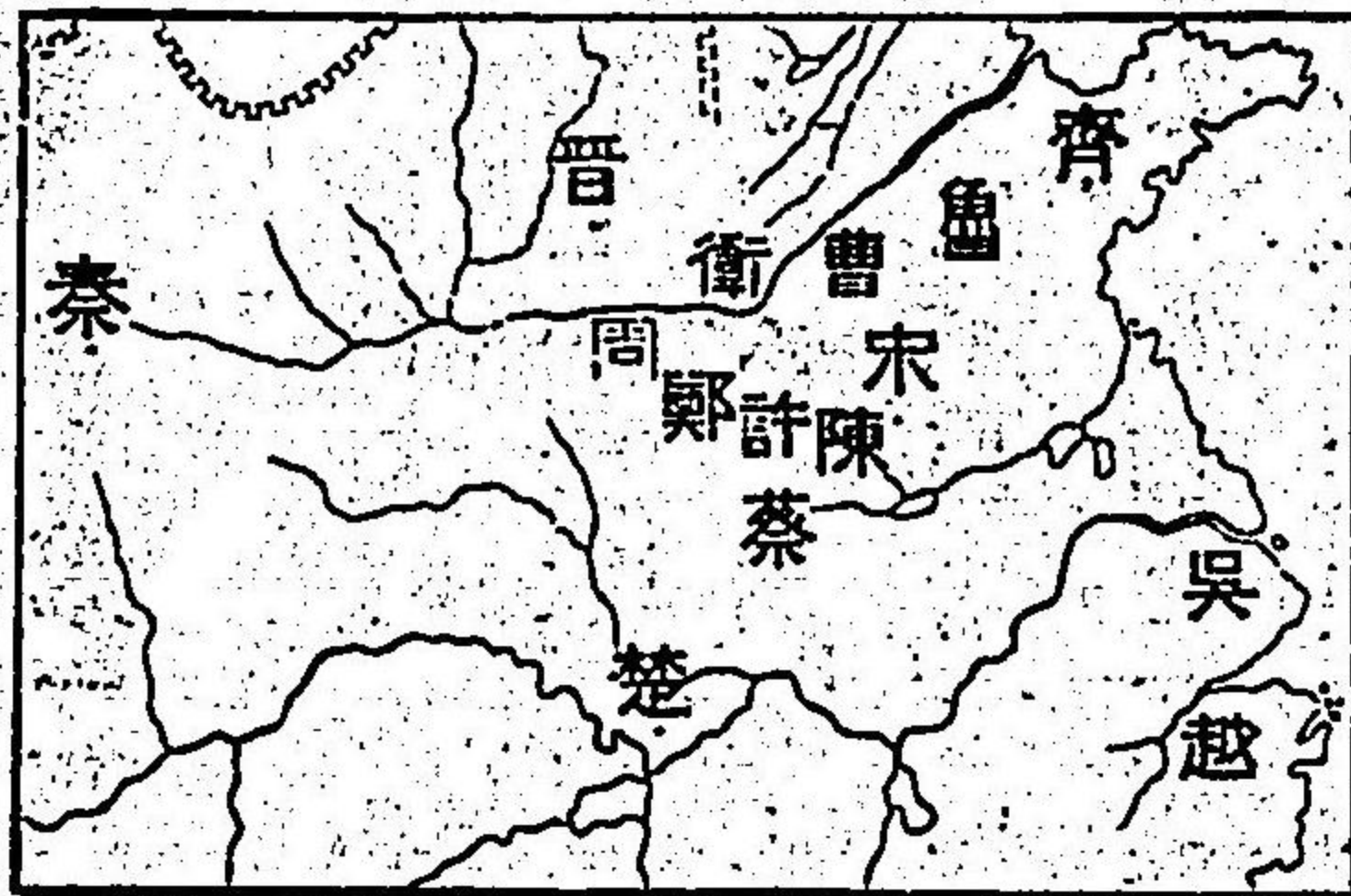
第二章 春秋の世

周は東遷の後勢衰へて天下を統治する能はざるを以て諸侯の大にして有力なる者、内は王室の衰を扶け外は夷狄を攘ふを名として威を天下に振へり。即、諸侯中の長たるを以て覇者と號す。平王の頃諸侯の數百數十ありて、其大なるは周と同姓のものに魯、衛、晉、鄭、曹、蔡、燕の七國、異姓のものに齊、宋、陳、楚、秦の五國ありしと雖も、中に就きて覇者の業をなしたるは齊、宋、晉、秦、楚の五國にして之を五覇といふ。五覇の外に鄭、吳、越もまた一時大勢ありき。魯の孔子此時

五覇

覇者

代の史を修めて春秋と名けしを以て後世之を春秋の世といふなり。春秋の覇業は齊の桓公に始まる。齊は周の元



王室の衰微に乗じ江漢の間をこりて王號を僭し後武王文王つぎ立ちて淮南の諸國を併せて湖北に雄視し北上して

齊の桓公

楚

勳呂尙の封國にして薄姑山東省青州府博興縣に

治し東海の重鎮にして征伐の權を有

す。桓公に至り管仲を用ゐて税法兵

制を改革して富強を圖り諸侯を北杏

諸侯山東省泰安府東阿縣に會して宋の亂を平げ次で

魯の侵地を復し衛邢諸國の戎狄に苦

めらるゝを救ひて邊境を靖んじ覇者

となる。時に顓頊の裔孫楚の熊渠は

中國に迫る。桓公よりて楚を召陵河南省許州府偃師縣に屈したる

も管仲死して齊の勢振はず次で桓公没して覇業衰へたり。

宋の襄公は桓公に代りて一時諸侯を統へしも楚の爲に泓

河南省歸德府拓城縣に破らる。是より先き晉の獻公の子重耳は國難

を避けて十九年間諸國に流寓せしが恰も此際秦の穆公の

助により國に歸りて中國の盟主となり赤狄を攘ひて周室

を安んじ楚を城濮山東省曹州府濮州に破りて其北上の勢を挫けり、

晉の文公これなり。後子孫よく其遺業を守り秦楚と鼎立

して諸侯の間に重んぜらる。この二百年に及べり。

秦は嬴姓にして襄公の時周の平王の爲めに大戎を攘ひ

て諸侯となり周室東遷の後其故地を獲て始めて大なり。

晉の文公の没するや秦に穆公ありて百里奚蹇叔等を用ゐ

宋の襄公

晉の文公

秦の穆公

楚の莊王

鄭を襲ひ滑を滅し晋を破りて河西の地を得、また戎を攘ひて地を拓くこと千里西方諸侯の覇となる。後來秦の起るは此時に基けり。時に楚に莊王ありて庸を滅ぼし宋を伐ち陸渾の戎を攘ひ兵を洛水の邊に觀して周室を蔑侮し晋軍を鄭河南省開封府鄭州に破りて威を中國に振ひしかば諸侯皆命に従ひしが、共王、康王を経て昭王に至りて國勢頗る衰ふ。

吳越の争

吳の先は周の文王の伯父太伯に出で姑蘇江蘇蘇州府に都す、壽夢に至り國勢強大に赴き晋と同盟して頻りに楚を侵略せり。闔閭國を承くるや楚の昭王の亡臣伍員の謀を用ひ兵を發し大に楚を破りて其都を陥れ是に代りて南方の覇權を握れり。後年越新の興りて南より吳を侵し遂に吳越の争起る。越は夏の少康の後にして會稽浙江紹興府に治す。允、

常に至り屢吳と戰て敗れしが其子勾踐、吳王闔閭を破りて父の辱を雪ぎ王號を僭す。闔閭の子夫差、薪に臥し膽を嘗むること三年にして大に越を破り前敗に報ゆ。勾踐身を屈して吳に降り、范蠡、文種文種の謀を用ひ力を養ひ兵を練て恢復を謀る。然るに夫差越に勝ちし勢に乗じ北の方、中國に入り諸侯を黃池河南省開封府封邱縣に會するや、勾踐其虚を襲ひ吳を滅ぼして其地を併せ、淮を渡りて諸侯を徐州山東省兗州府滕縣に會し、貢を周に致して中國の覇柄を秉れり。是より先き數年魯麟を獲て孔子、春秋の筆を斷つ。周室東遷以來是に至るまで十五主、凡二百有餘年なり。

第三章 周の制度文物 孔子

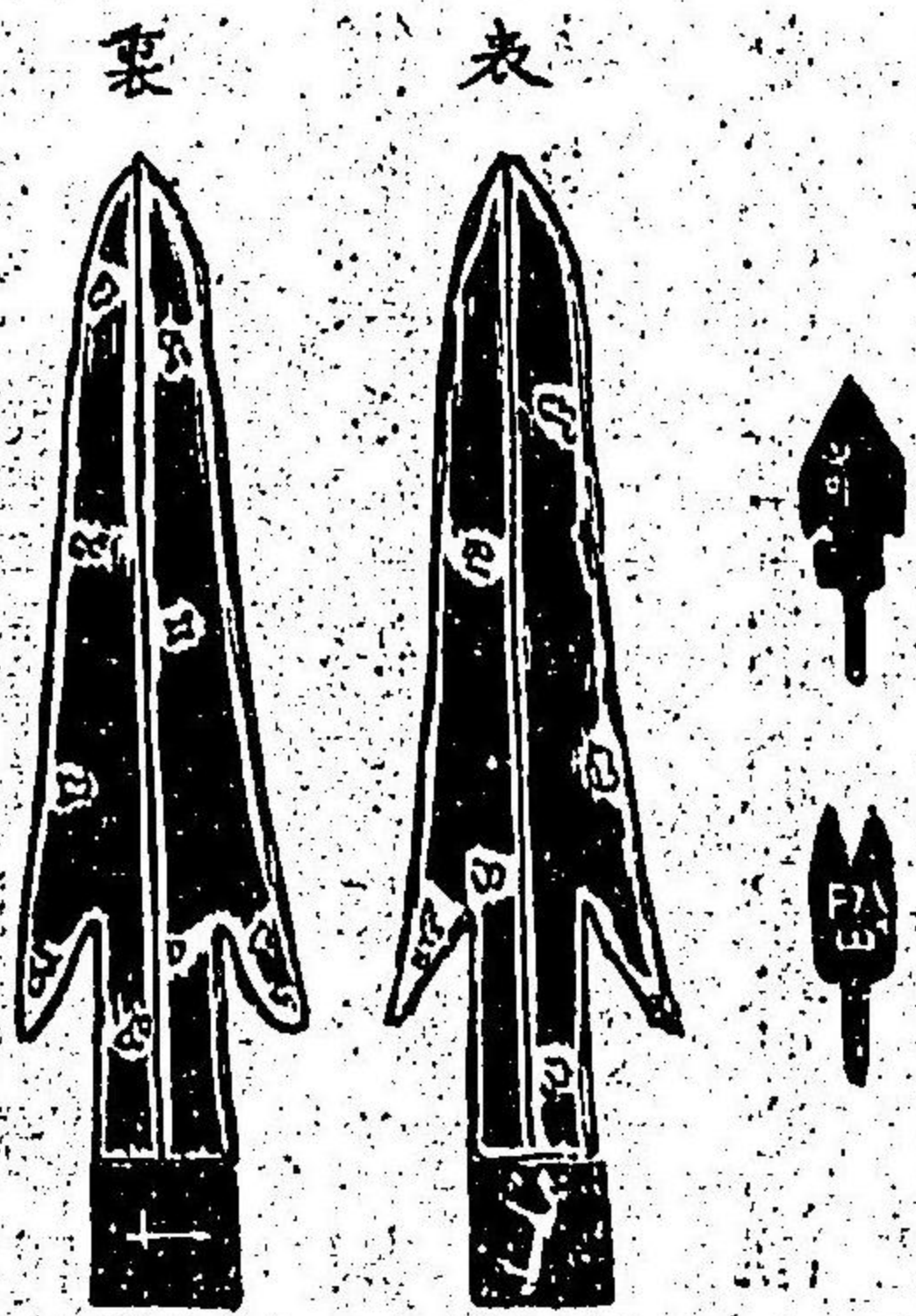
周の封建

周の制度文物 孔子

二二

周の職官

周の禮樂制度は夏殷の制を折衷し、周公の創意を加へて成り後世歷朝の模範となれり。抑、上世の支那は封建制度にて、其制、夏殷の際に稍備はり、周に至りては公、侯、伯、子、男五等の爵を立て、大國は方百里、公、侯を封じ、中國は方七十里、伯



支 那 古 代 兵 器

を封じ、小國は方五十里、子、男を封じ、五十里に満たざるものは附庸とし、王畿は千里、其中に居る。畿外は五國を屬とし、二屬を連とし、三連を卒とし、七卒を州

とし、天下を九州に分ち、伯、正、帥、長を置きて地方を制馭しぬ。周の職官は天子の顧問に太師、太傅、太保の三公、少師、少傅、少

田制

兵制

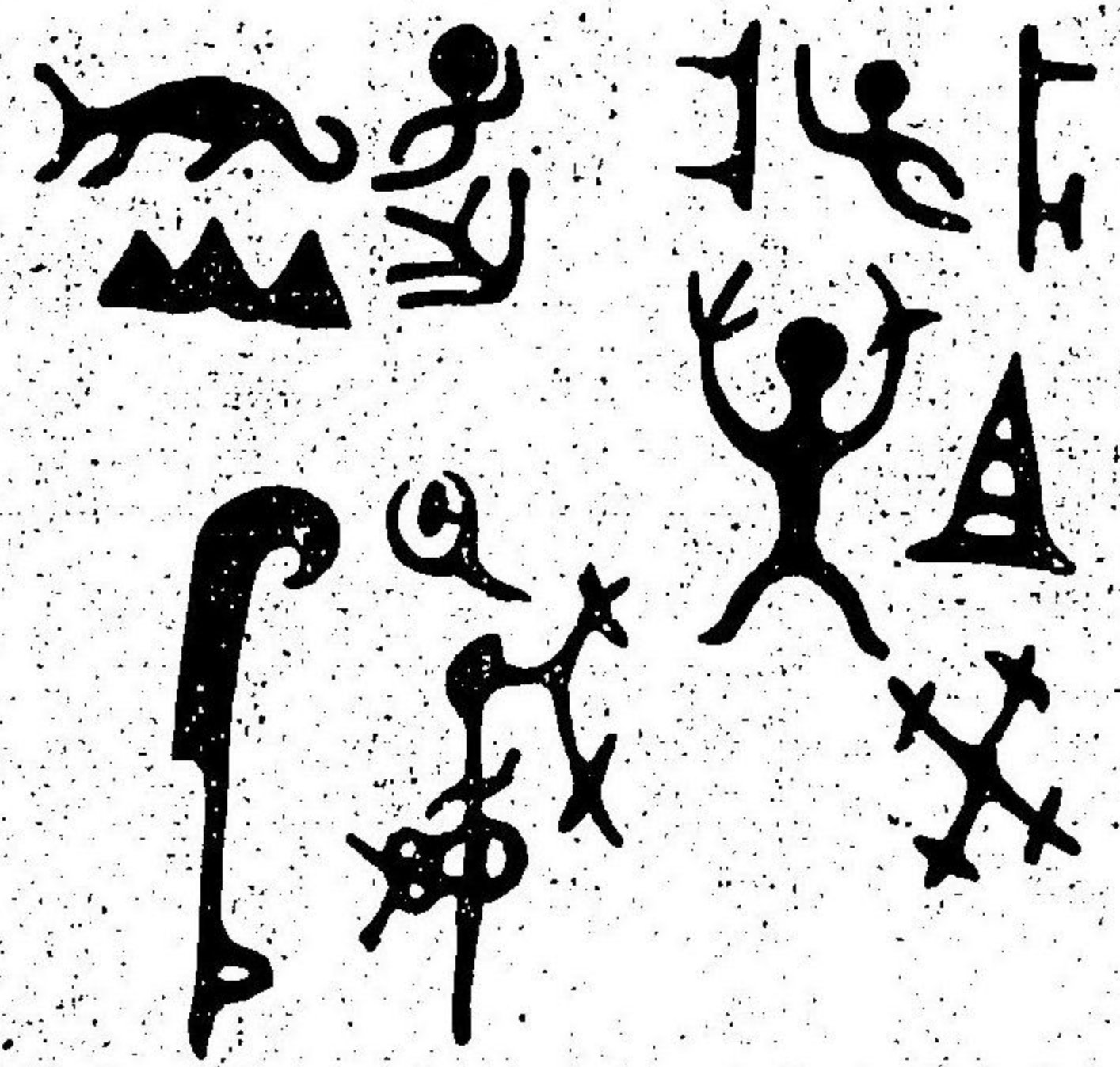
保の三孤あり、行政官には天地春夏秋冬の六官ありて、其屬各六十を置く。天官は冢宰を長とし、萬政を總へ、地官は大司徒を長とし、教化を掌り、春官は大宗伯を長とし、祭祀禮樂を掌り、夏官は大司馬を長とし、兵馬を掌り、秋官は大司寇を長とし、刑辟を司り、冬官は大司空を長とし、百工を掌る。田制は夏の時、毎戸に田五十畝を授け、中、五畝の所得を朝廷に納れしめて貢法といひ、殷の世には一區七十畝の田、九區を一井とし、八家に授け、中、一區の收入を税金とす。井田の法、即助法を用ゐしが、周に至り、百畝を一區とせる井田法と貢法とを通じ用ゐ稱して徹法といふ。故に周の王畿は方千里にて、山川邸宅を除きて、略、六十四萬井田を得、六十四井を一向とし、萬甸あり。甸毎に一車、四馬、百兵

周の制度文物 孔子

二三

刑 學

士を徵發し、五人を伍となし、五伍を兩となし、四兩を卒となし、五卒を旅となし、五旅を師となし、五師を軍となす。天子の軍は六軍、七萬五千人なり。其他刑は上世既に墨、劓、剕、宮、大辟の五種あり、周の初に流、朴、徒、贖あり、後、夷、族、車裂、體解の酷刑を生じたり。學は、大學にて、は有爵者の子弟に禮樂詩書を授け、州に序、黨に庠、閭に塾ありて、人民の子弟を教ゆ。文字は上古は象形文字を用ゐ、伏羲八卦を劃し、蒼頡文字を作り、周の宣王の時に及び、史籀大篆を作りて、文字漸く進歩し、後、秦に至りて、小篆、隸書を生じたりし。



太 古 支 那 文 字

樂

老子

孔子

も、當時未だ筆紙なく、竹木を編みて卷こし、鐵筆を以て字を刻せり。書は三墳、五典、八索、九丘ありしといへども、今存せず。尙書は唐虞三代の績を傳へ、易は諸學の本たり、詩は歌謠を傳へ、周禮、儀禮は禮法、制度を傳へ、皆當時の文運を觀る可し。樂は黃帝の時伶倫十二律を作り、周に至りて治國の要具となれり。然れども、文物典章の盛美は虚禮、飾文に陥り、綱紀は弛びて、言論自由の道開け、治國濟民を説く者多く起れり。就中、楚の李聃は老子五千言を著し、禮制、智巧の末を排し、無爲、道德の説を唱へ、終に世を遯れて終る所を知らず。聃よりも少しく後れて魯に孔丘出づ。孔丘字は仲尼、周の靈玉の二十一年、即、西紀前五百五十一年、紂、靖天、皇魯に生れ、列國を周遊して、儒教を説き、仁道を基礎として、修身治

國の術を唱へしが、當世に納れられざるを以て退きて先王の禮樂を修め、易、書を明にし、詩、謠を整へ、春秋を作りて道を後世に垂れ、年七十三にして没す。其弟子三千人の中六藝



子

孔

後世支那政教の本となり、東洋道義の典範となりたり。

に通ずる者七十餘人あり。漢に至りて孔子の教は大に用ゐられ遂に

第四章 戰國

陪臣の篡立

戰國の七雄

春秋の世、周の王室既に主權無きも、尙幾分か王家の威を保ちしかば、五霸交起ると雖も尙必ず尊王を口にして民心を攬りたるに、王室の衰微年と共に甚しくして恢復の望無く、諸侯の勢力日に強大になりて大諸侯何れも皆侵略兼併を事として、自王號を僭し復尊王を唱ふる者なし。且其君主會盟に忙はしくして内顧の暇なきに乘じ、重臣國事を擅にし、私恩を賣りて民心を收め、使節に托して外援を結び、遂に篡立を圖り、田氏は齊を篡ひ、韓、魏、趙は晋を三分せしも、周玉制すること能はずして却て之を諸侯と爲せり。是に於て田齊は東方に割據して山海の利を占め、三晋は中原に鼎立して地域少なれども土肥え民衆く、楚は其南に在りて國勢を挽回し、燕は東北に據り南に向ひて雄を争ひ、秦は西戎

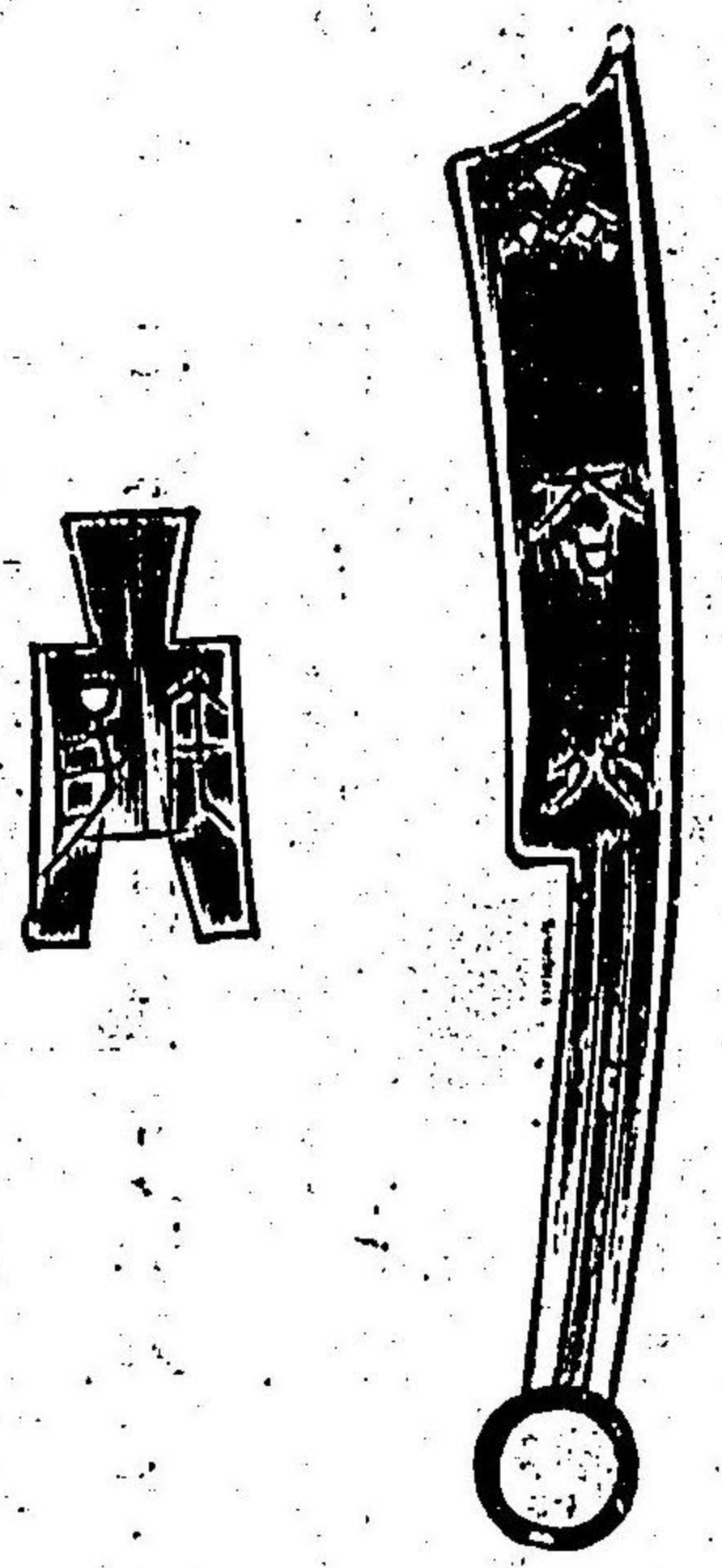
秦の勃興

の地を拓き富力を積みて徐に東の方中國に向ふ。かくて天下の大勢は此七國の手に歸するを以て之を七雄といひ、周室を始とし宋魯鄭衛は纔に餘喘を其間に保つのみ況や、其他の小國は有れども殆ど無きが如し。

秦は穆公の時一たび覇を中原に争ひしも間もなく兵を收めて出でず列國互に攻争して國力を消耗せる間に嶮要の地に據りて人材を用ゐ靜かに内治に力め富強を圖る。こゝ二百數十年孝公商鞅の策を聽きて家に二男あれば賦を倍し耕織を勵む者は力役を免じ爵位を以て軍功を獎め財を増し兵を練るに及びて國力頓に強大となり殆ど天下を制するの勢あり。時に洛陽の辯士に蘇秦といふ者あり秦に赴き惠文王に見えて六國併呑の策を獻じたるも納れら

合従

れず去りて燕にゆきて六國合従の計を説く。當時六國の地縦に南北に列なるを以て六國の攻守同盟策を合従と謂ふなり。燕王之を聽きしかば蘇秦更に三晋齊楚の五王に説きて合従せしめ



周代貨幣

自其長となりて六國の相を兼ね周の顯王の郊迎を受くるに至れり。秦之

連衡

を聞き離間の策を施して合従を破り又楚趙魏韓燕の連合軍を破りしかば其威諸侯の間に振ふ。是に於て張儀秦の爲めに頻りに合従の難を論じ連衡の利を説き六國を降して秦に服事せしむ。衡は横なり六國は東に在り秦は西に

位するを以て連衡といふ。後惠文王没して張儀秦を去り連衡亦敗れたりしも、天下これより遊士説客多く、公子大臣皆競うて之を招致するの風を生じ、齊の孟嘗君、趙の平原君、魏の信陵君、楚の春申君の如き皆數千人の食客を養うて相誇り、且列國の諸侯或は合従をなし或は連衡を試み一定の計なきに乗じて秦は獨り著々こして富強の策を講じ一統の計を回らしたり。

第五章 周末の學術

周は禮樂を重んじ其弊繁文虛禮に馳せたれども、造言律ありて異説を禁じたれば、春秋の際に至るまで新學の興るものなかりき。春秋の末戰國の初に至り天下亂れて階級

學術の勃興

儒家

壞れ道を信じ民を濟ふの士名を求め身を立つるの徒四方より起り、諸子百家各其説を述べ意見を闘はし、諸道の學並び興りて漢族の智力學問は是時代に最も發達せり。孔子は魯に出て儒教を創め仁道を説き、其孫子思は中庸を作りて誠を説き、後孟軻出て孟子を著はし仁義を説き、性善の説を唱ふ。後世孔孟二子を並稱して聖賢となす。孟軻に少しく後れて荀況ありて荀子を作り、禮義を尙び性惡の説を唱ふ。當時曲學阿世の徒多くして孟荀二子の如く卓然獨行の風あるものは稀なり。北方の學徒多く孔子を祖述して儒學の一統を成せしが、南方の學者は大抵老子の説を奉ぜり。

道家

楚の老子無爲恬淡の説を唱へてより後百年を経て、列禦

楊墨二家

寇列子を著はし、列子の後に莊周出で神絶の奇筆を以て莊子を著はし共に老子の學説を祖述せり、之を道家の學といひて後世の道教は之に附會假托して起れり。

此儒道二流の外に楊朱墨翟法兵名縦横諸家の學説あり。楊朱は自愛快樂の説を主張し、墨翟は之に反して兼愛節儉の説を吐きて墨子を著ぼす。二人の説一時を風靡せしかば孟子は力を極めて之を排撃せり。法家の學は名に従ひて實を責め法術の政治に必要なを説くものにて管仲李悝其祖たり。申不害は専術を説き商鞅は主として法を唱へ、韓非出づるに及びて法術の二を合せ説けり。孫武の著せし孫子と吳起の著せし吳子とは兵術戰畧の書にして後世の兵家は皆之を祖述す。名家には公孫龍惠施の徒あり

法術の學

て堅白異同の詭辯を弄す、蓋今の論理家なり。又蘇秦張儀の諸侯に遊説して縦横の策を立つるや、公孫術蘇代蘇厲周最樓緩の輩出て之に倣ひ縦横家の名あり。文章詩賦に至りては楚に屈平あり、讒に遭ひて憂愁悲哀の餘、離騷を作り後世の範たり。

第六章 太古の印度 佛教の興起

印度はヒマラヤ、ヒンドクシニ兩山脈の南にありて大洋中に突出せる大半島にして、信度河其西北境を流る、故に古身毒といふ、後轉音して印度と呼べり。

今より大凡四千餘年前アマ、シール兩河の間よりアリア人種起りて東南に移り、信度河を越えて恒河に達し、先に住

印度

アリア人の南下

せるド、ラビヤ人を驅逐征服して其地を占領せしが當時は幾種の部落に分れ、各其酋長の下に耕耘攻守し、未だ種姓職業の別もなかりき。然るに歲月の經過するまゝに人口増殖し土地廣まり、文化日に進み恒河流域に小邦國起るに及びては、人民の間に四種の階級を生じたり、之を四姓といふ。四姓とは祭祀教法を掌る婆羅門、軍國の事を掌る刹帝利、工業商賣に従事する吠舍、耕牧其他の賤業に服する首陀に於て、初の三姓はアリア人なれども、終の首陀は征服せられし舊土人なり。就中勢力あるものは法權を有せる婆羅門種にして、宗教の盛なるに及びては兵馬の大權を世襲せる刹帝利種の如きも其壓倒するところとなれり。

印度に入りしアリア人種が太古より傳來せる經典を吠陀

四姓の別

吠陀

婆羅門教

陀といふ、吠陀とは智識の義なり。祭祀教法を掌れる婆羅門は深遠なる優波尼沙土によりて此吠陀を研究し、宇宙の真相、人生の目的を解釋せんご試みて、婆羅門教を創む。其教は神と萬有とを一視して、萬有は萬有本體より出て復、其本體に歸へる者なりごし、靈魂不滅、輪廻の説を唱へ懺悔、苦行によりて過去の罪惡を消滅し現世の繫縛を解脱し、速に本體に歸す可しごいふ、一種の萬有神教なり。

婆羅門の專横

然るに婆羅門は醫、數、天文、論理等に通じて四姓中の學者なれば、摩奴の法典を作りて、他の三性の反抗する者あれば峻刑を加へ壓服して專横を極め、婆羅門教の盛なるご共に益、勢力を増進し、遂に他の種姓と軋轢撞突して其結果、慘憺たる一大混戦を生じ、之が爲に刹帝利姓は一時太だ衰へ、後

釋迦牟尼

頗る恢復せしむ其勢力は尙微々たるものなりしに、大聖釋迦牟尼の出世に及びて運命は一變せり。

支那に孔、老二子の出て儒道の説を立つるに當り、印度に大偉人ありて佛教を興す。其人、名を喬答摩、悉達多、財吉といひ、刹帝利姓、釋迦種なるを以て釋迦牟尼と號す。牟尼とは覺の義なり。西紀前五百五十八年周の靈王二十四年 緞靖天皇二十四年 中印度北橋薩羅國迦比羅城城黄に生る、父を首圖駄那、白淨王又といふ。夙に人間が生、老、病、死の四苦を脱離する能はざるを見て現世の無常を厭ひ、帝王の富貴と妻子の恩愛とを捨て、二十九歳にして宮城を逃れ、山谷の間に隠れて六年の間難行苦學し、遂に正覺を得て山を出で始めて新教を説く。其教は吠陀を排して婆羅門に反し、種姓の差別を破りて一切衆生を

平等と認め、能く迷想を拂ひて繫縛を脱離せば、何人も未來は等しく無限の幸を享く可しと主張す。かくて釋迦牟尼は布教濟度に從事すること前後四十餘年にして、拘尸那揭



羅に於て入寂す時に西紀前佛四百七十八年周の敬王四十二年 懿德天皇三十三年なり。其高弟摩訶迦葉よりて佛弟子五百人を玉舍城に會し第一回の結集を爲し、

後耶舍陀も亦佛徒七百人を毘舍離に集めて第二回の結集を催しぬ。是に於て從來婆羅門の爲に屈辱され居たる諸姓の徒は皆この教に歸依して佛教は年と共に擴張せしむ。釋迦滅後二百年間は其勢力尙恒河流域の外に出でざりき。

西人の侵入

太古の印度、佛教の興起

是より先き印度の西方には、西紀前六世紀の中頃波斯に、サイラス王出でメデア、リデア及バビロニア等ヲ征服して一大帝國を建設シ、後ダリ阿斯王も亦祖業を繼ぎて四方を征シ、西紀前五百年東の方印度に侵入シ信度河の流域を畧して去リシは恰も釋迦在世の時に當れり。後二百年を経てマセドニア王アレキサンドル波斯を滅ぼシ、ダリアスの舊圖を繼ぎて兵を印度に用ル、但、又始羅に入りて西印度の諸侯を降シ、北印度のポーラス王を破リ更に進んで中印度に入らんこせしも、炎暑の爲に果さずして西に歸リ西紀前三百二十三年を以てバビロンに没しぬ。然るにアレキサンドルの侵入によりて印度全國の騷擾するに當リ、首陀羅姓旃陀羅笈多出て中印度の摩揭陀國を篡ひて毛利耶王

旃陀羅笈多

阿輸迦王の崇佛

朝を創む。時にアレキサンドルの將セレウカス西方亞細亞に條支國アヲ建て兵を率ゐて印度を征す。笈多邀へ戦ひしが遂に和を媾シ其女を入れて后とし、信度河以東の地を得て中北西の三印度を掩有シ、六十萬の雄兵を蓄へて威を四方に布けり。笈多の孫阿輸迦王阿育王位に登るや、深く佛法に歸依シ、千僧を華子城ナバトに會して第三回の結集を催シ、勅令を發して遍く佛教の主義を國民に論告シ、布教僧を四方に派遣しぬ。阿輸迦王没して後幾ならずして毛利耶朝は亡びしも、相次で起れるサンガ、カーンヴァ兩朝共によく佛教を保護せり。後來佛教の西は大夏バクトリアより東は馬來半島の諸國に及び、南は海を越えて獅子國錫蘭に流布するに至りしは主として阿輸迦王の力によれり。

太古の印度、佛教の興起

第二編

第一章 秦の一統 楚漢の争

六國の争

支那は蘇秦、張儀、列國の間に縱横策を劃してより後殆ど百年間、六國は或は合従し或は連衡して徒に國力を消耗し、互に相和せずして皆強秦の後に視ふを思はず。齊、魏は趙を襲ひ楚は晋を攻め、齊の湣王は宋を滅し燕を破れば燕は樂毅を用ゐて齊の七十餘城を降せしかば、齊は田單を將として其侵地を復せり。此間秦の勢力益強盛に赴き、惠文王は司馬錯を遣して巴蜀を收め、武王は甘茂をして韓を取らしめ、昭襄王に至りて范雐の勧めに従ひ遠交近攻の策を用ゐて諸侯を孤立せしめ、又白起を將として三晋を攻めて趙

周の滅亡

軍四十萬を長平山西省澤州府高平縣に坑にす。時に周室東西に分れしが、西紀前二百五十六年西周の赧王は秦の勢に恐れて地を獻じて降り、後七年にして東周の惠公も亦秦に降り、周遂に滅ぶ。魯も亦此年楚に亡ぼさる。周は武王より是に至るまで惠公を合せて三十八世、八百七十四年なり。秦は昭襄王の後二世を経て嬴政に至り、李斯の計を用ゐる類に反、間を放つて六國の君臣を離間し、然る後將を遣して之を攻め、遂に西紀前二三〇年に至りて先づ韓を滅し、後二年にして趙を滅し、更に三年を経て魏を滅し、又二年にして楚を滅し、翌年燕を滅し、其翌年齊を滅せり。是に於て六國悉く亡び衛君獨存せしが、秦の二世皇帝に廢せられて封建の諸侯迹をこゝめず、天下を舉げて秦の郡縣となれり。

始皇帝

秦の制度

秦の一統 楚漢の争

三三

かくて秦王嬴政は父祖の餘烈によりて六國を平らげ、功三皇、五帝を兼ねて百王の始祖たるべしといひて自、始皇帝と號し咸陽陝西省西安府に都す。帝は周末諸侯の弊亂に懲り、李斯の言を納れて郡縣の制を布き、天下を三十六郡に分ち、守、尉、監を置きて之を治めしめ、賦税を割きて諸子功臣に支給し、朝廷の大政を丞相に、兵政を大尉に掌らしめ、御史大夫をして之を監察せしめ、以て臣下の權を分ち、民間の兵器を收めて禍亂を防ぎ、天下の富豪を聚めて咸陽を富ましめ、中央君主の權を重くして、地方臣民の力を弱めたり。帝は



秦の泰山の碑

書を燔き
儒を坑に
す

又盛に土木を起し、渭水の南に阿房宮を作り、諸郡に離宮を建つること七百、屢、地方を巡行して封禪を行ひ、北の方、蒙恬に兵三十萬を授けて匈奴を陰山の陰に退けて河南の地を收め、長城を増築して臨洮甘肅省鞏昌府張州より遼東に抵り、以て之に備へしめ、南の方、百越を征して新、南海、桂林、象郡の三郡兩廣安南の地を置き、兵五十萬を發して南嶺に屯せしむ。是に於て秦の疆域の大殆ど周に倍せり。

此時に當り天下未だ戰國の餘習を脱せず、學者の新政を是非し、人心を動かす者頗る多し。始皇よりて挾書の禁を發し、詩書を燔き、儒生を坑殺して、人心を壓服せんことを企てり。然も大役頻りに起り、庶民奔命に疲れて上を怨み、加ふるに六國の遺臣亂を思ふ者多し。故に西紀前二百年、始皇帝没

秦の一統 楚漢の争

三三

群雄興起

して二世皇帝の立つや楚人陳勝、吳廣は蕪陽府安徽省宿州に起り、楚の舊臣項羽は叔父項梁と吳江蘇省蘇州に起り、范增の計を用ゐて懷王を立て、沛人劉邦、亦兵を沛江蘇省徐州府に起して之に應ず。二世皇帝章邯を遣りて先づ陳勝、吳廣の兵を破り、進んで項梁を斬りしも、項羽の爲に破られて關東また秦兵なし。此間劉邦、懷王の命を受け西して驍關陝西省西安府藍田縣を破りて霸上に至る。是より先き秦には趙高權を專にし、二世皇帝を弑して公子嬰を立つ、嬰位に即きて高を誅せしに劉邦の兵至りしかば、子嬰素車白馬、面縛して降る。時に西紀前二〇七年なり。始皇より此に至り三世を通じて僅に十五年にして秦亡ぶ。

楚漢の争

項羽は勇武絶倫にして楚の名門たり。秦帝已に劉邦に

降りしかば、項羽其功を嫉み、范增の言を納れて之を鴻門陝西省西安府臨潼縣に殺さんとして果さず。よりに劉邦を巴蜀、漢中の地に封じ、關中の地を擧げて秦の降將に與へ、劉邦が中原に出づるの道を絶たしめ、懷王を義帝となして江南に移し、項羽自、彭城江蘇省徐州府に據りて西楚の霸王と號す。時に田榮、陳餘、項羽が己等を封せざるを憤り、東北に自立して王と稱せしかば、項羽親ら兵を率ゐて之を伐つ。劉邦、其虚に乗じて關中を襲ひ、進んで黄河の南北を定め、洛陽に入りて義帝の爲に喪を發し、天下に檄して項羽の罪を鳴らし、兵五十六萬を率ゐて彭城に入る。項羽精兵三萬を提げ急に還りて劉邦の軍を破りて西上す。劉邦之を滎陽河南省開封府滎陽縣成、阜南河南省開封府の間扼し、別に韓信をして河北を徇へ、背後より

楚の糧道を絶たしむ。項羽已むを得ず劉邦と和して天下を兩分し、鴻溝河（河）以東を楚とし、以西を漢として東に歸りしが、劉邦は張良、陳平等の謀を用ゐ、約を破りて楚軍を追躡して項羽を垓下（安徽省鳳陽府靈璧縣）に圍みしかば、項羽圍を潰して走り、烏江（安徽省和東北に至り）自刎して死せり。是に於て劉邦皇帝の位に即く之を漢の高祖皇帝となす。時に西紀前二〇二年なり。その西の方、長安（陝西省西安府長安縣）に都せしが故に後世に及びて西漢といへり。

第二章 漢の初世

高祖の創業 呂氏の亂 文景の治

高祖の政

漢の高祖は微賤より起りて天下を定めしかば、大臣、諸侯



然も帝は秦の滅亡に鑑み、郡縣を廢して封建の制を復興し、諸功臣を封じたりしかば、功臣漸く強横ならんことを高祖恐れて、竊に之に備へ、韓信、彭越、英布の如きは皆誅除して、悉く其地を收め、以て宗

宗室の分封

室の子弟を分封せり。故に帝の末年、同姓の王たるものすべて九國ありて、各帝室の制度に摸して官を置き、其富強殆ど帝室と相匹敵するに至り、遂に後の七國（七國）の亂因はなれ

漢の初世

是より先き匈奴は秦末の亂に乗じ南下して河南を侵し勢頗る隆盛に赴き遂に高祖の末年に至り大舉して人寇す。



漢初に苦しめられしかば和を講じ次で公主に尙し幣物を贈りて其歡心を求めたり。

呂氏の亂

高祖没して惠帝立つ呂后の出なり。呂后は創業の際高祖の艱苦を共にせしかば政治に參して諸王諸臣の爲に憚られしが是に於て呂后帝の多病にして事を見ざるに乗じ

て大權を握り帝の没するに及びて遂に制を稱し諸呂を用ゐて劉氏を壓倒し呂氏の族殆ど漢の天下を奪はんこせり然れども幾もなくして呂后没し劉氏の諸王陳平周勃等謀り諸呂を誅して其難を絶ち惠帝の弟代王恒を立つ之を文帝となす。

文帝の治

文帝は初め地方に在りしが故に深く民情に通じ帝位に即くに及びて儉仁質素を以て下に臨み肉刑を除き田租を免じ振窮養老の禮を定め國用充實す。故に後世其治を稱して秦漢以後第一と爲せり。然れども初より形勝に據り雄兵を蓄へたる諸侯王は文帝が代王より入つて大統を承けしこ其寛厚仁恕なるを見て益驕りて帝室を重んぜず。濟北淮南の諸王は反を圖り吳楚齊の諸王は皆驕恣なりし

かば、賈誼其憂を看破し、治安策一編を上りて諸王抑損の急を説けり。文帝よりて齊王襄の没後其諸子を分封して齊、濟北、濟南、菑川、膠東、膠西の六國となし其勢を割じが吳、楚二國は尙大夫封を擁せり。文帝没して景帝即位するや、晁錯御史大夫となりて削藩の説を勧め、過罪ある毎に趙、楚、膠西の諸王の地を削りしかば諸王皆朝廷を怨み、吳の地を削るに及びて吳王遂に反し、楚、趙、膠西、膠東、菑川、濟南の六國之に應じ、晁錯を除くを以て名となし、北は匈奴と連り南は東、甌、江、浙の地と結び、竊に齊、濟北等と通じて亂をなす、是を吳楚七國の亂といふ。帝、晁錯を斬りて吳楚に謝せしも反王服せざりしかば周亞父を大尉に拜し三十六將軍を率ゐて之を討たしむ。亞父、洛陽に至りて吳楚の軍を破り諸叛悉く平ら

七國の亂



漢代兵士

く、時に西紀前百五十四年、帝景四年なり。帝是より諸侯王を京師に留め、封國の租税に衣食せしめて自國に就くを許さず、朝廷より各國相を命じて其政を執らしめたり、故に封建の名ありて實は郡縣の治に近し。吳楚の亂已に平きてより四海事無く、國家益殷富にして府庫充溢し、太倉の粟紅腐して食ふ可からざるに至りしといふ。

第三章 武帝宣帝の業 四夷の服屬

王氏の篡

武帝の文治

初め高祖は叔孫通を用ゐる惠帝は挾書の禁を除き、文景二



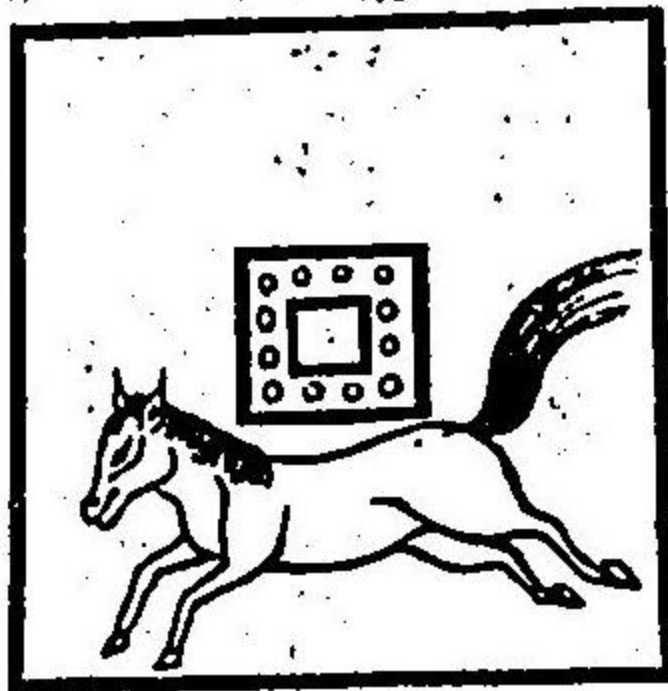
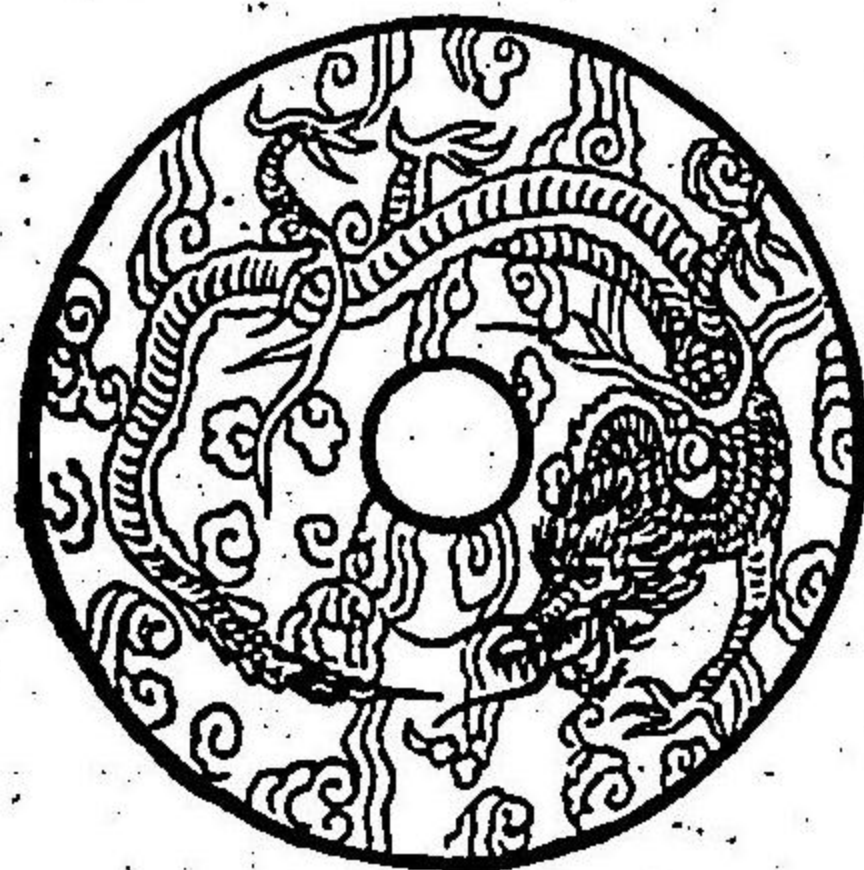
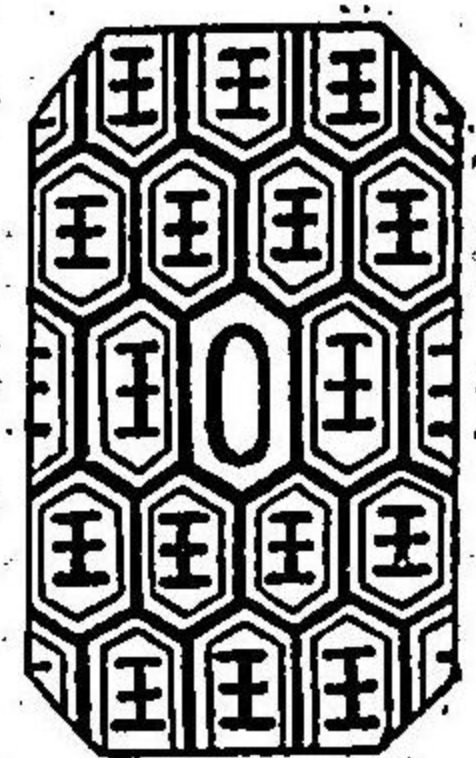
漢武帝

帝の世に學術漸く興りしゆ、主として黄老申韓等の雜學異説なりき。武帝位に即き始めて年號を立て武帝建元元年開化天皇十八年西紀前百四十年詔して賢良の士を求め、諸子の雜學を却けて

儒學を用ゐ、大學を設け五經易詩書春秋の博士を置き、多く文人詞客を招集せり。是に於て淮南王安は學者を四方に求め、

武帝の失政

河間王德は先秦の遺書を探り、公孫弘董仲舒司馬遷司馬相如、孔安國、東方朔、朱買臣等の學者文人輩出して漢室の文運其極度に達せり。



武帝の三幣

然るに帝は又方術を好み方士に爵を授けて神仙を求めしめ、大に苑囿池沼を設け、樓臺宮觀を起し、屢巡狩封禪を行ひしかば、國用多くして前代の蓄積を消盡せり。

帝よりて孔僅、桑弘羊等を擢用し新法を作りて賣官、購罪を許し、鹽鐵酒酤を榷し、緡錢、舟車に稅し、白鹿皮幣を發して錢

輪臺の詔

貨に代へ、均輸平準法を以て商賈の利を奪ひて財政の困難を救はんごせり。然れども民法を犯す者多く従つて酷吏を任じ法を以て之を繩せしかば、東方には群盜起り長安に巫蠱の亂あり、天下騷然ごして漢室危く將に秦の覆轍を踏まんごす。幸にして帝往事を悔ひ輪臺の詔を下して苛政を除きしを以て海内幸に事なきを得たり。然りご雖も帝は名將を用ひて外征を企て蠻夷諸國に通じたるを以て、其版圖實に漢の初に倍せり。

宣帝の内治

西紀前八十三年武帝没して昭帝嗣ぎ幼なるを以て霍光政柄を執りしが、後昭帝没して嗣無し。霍光遂に武帝の曾孫病已を迎立す、宣帝是なり。宣帝久しく民間に在りて下情に通ずるを以て專意を地方の政治に用ゐ、賢相名吏相踵りて出で、上下互に勵精扶掖して内治の盛前後無比なり。且、帝は武帝の後圖を承けて邊防を修め、匈奴を破りて西域を服したり。故に漢室の隆盛は武帝、宣帝の世に極まりて是より後は漸く衰運に赴けり。

東方の服屬

古朝鮮の地は今の盛京省の南部にして、東は大同江より、西は遼河に至る。帝堯の時國祖檀君國を立つるご傳ふれごも史實の考ふ可き無し。殷の亡ぶるや箕子其地に奔りて王となり、其後裔箕準の世に及び燕人衛滿の爲に國を篡はれて馬韓に通る。衛氏箕氏に代りて王ごなり、勢四隣に振ひしが、衛右梁に至り父祖の遺烈を負ふて漢に服せず、反つて漢の邊吏を殺せしかば、武帝楊僕を遣して之を平げ、眞蕃、樂浪、玄菟、臨屯の四郡を置き、三韓馬韓、辰韓、辨韓の境を接す。我

九州の諸酋因て韓地を経て漢に私貢し其印綬を受けし者あり。

南方の降服

漢楚分争の間秦の南海郡の尉趙陀桂林象郡を併せて南越王と稱せしが後降りて漢冊を受く。南越の北に閩越福建地の閩越の北に東甌浙江あり。武帝の時に至り閩越強大に赴き東歐を破りて遂に南越を侵す。是に於て武帝南越を救ひて閩越を定め東甌の故地に東越王を封せしが後南越亂れて漢使を殺し次で東越王も亦叛きしかば武帝悉く討ちて之を平らげたり。

西南諸國の歸伏

秦亡びてより支那の西南部は化外の舊に復せしが武帝の時唐蒙は夜郎國貴州に通じ張騫は夜郎を経て身毒印度に通せんとして果さざりしも始めて滇國雲南に達す。

匈奴

是に於て武帝南越を降せる餘威を驅りて遂に邛四川笮四川雅州府冉駹四川茂州府の諸蕃を降せり。

匈奴は冒頓の後老上出て月氏の地を奪ひ其版圖東朝鮮より西圖伯特アブに至りて益強大なる。武帝よりて衛青霍去病李廣利等をして之を征せしめ狼居胥山を越えて瀚海に及び河南ハルハの地を取りて五原朔方シウの二郡を立て兵を隴西に出して匈奴と天山南路との間を絶ち河西を定めて武威張掖酒泉敦煌の四郡を置き屯田の兵を配す。是より匈奴また漠南に出る能はず。宣帝も亦烏孫伊犁を助け五將軍を出して大に匈奴を破れり。時に匈奴は北下零シウに侵され東烏桓に迫られ今又漢の爲めに破られしかば諸屬國離叛し且内に五單于の争起りて其勢日に衰へ遂に元帝の時に

至りて呼韓邪單于は漢に降り、其助力を假りて故地を復し

入朝して恩を謝し婚を乞うて

漢の甥となれり。是より後匈

奴、復漢に寇せず。

西域は條支國王國シリア既に衰

へ、媯水河アムの畔に大夏バクト

起り、バルナア亦獨立して安息

國を立て、次で大夏を破りて國

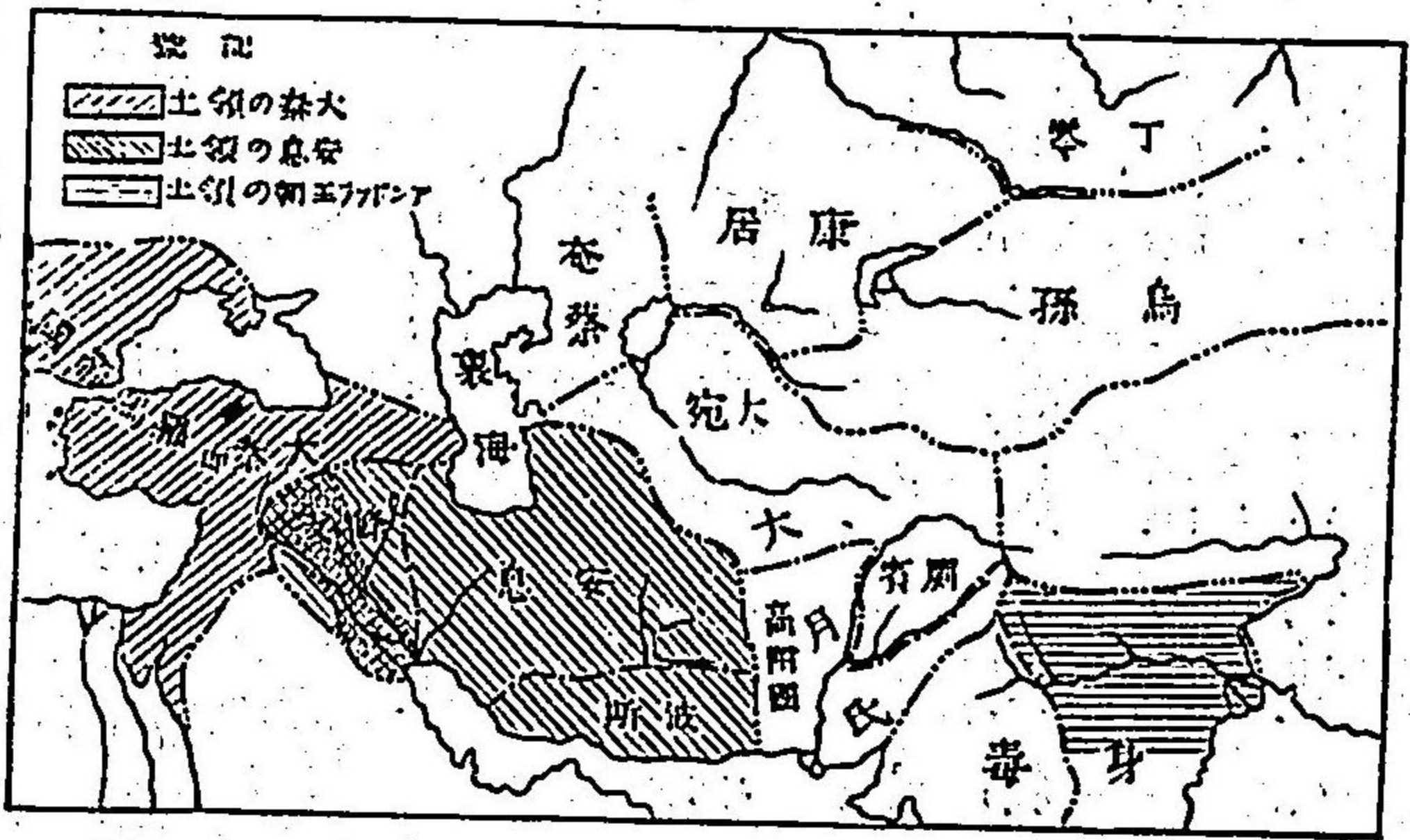
威頓に揚る。

秦漢の際、月氏は、河西の地を

掩有せしが、匈奴の冒頓に逐は

れて西に奔り、更に烏孫に逼ら

西域諸國



漢代西域諸國

れて媯水の畔に移り、大夏の地を奪うて大月氏國を立つ。

大月氏の北に大宛フエル地方あり。大月氏の東南に罽賓カシユあ

り。大宛の北は康居キルギ荒原にして、東は烏孫に連り以て匈

奴所屬の小國に接す。武帝の匈奴を征するや、張騫を月氏

に遣して挾撃を謀りしも大月氏は既に其土に安じ復讐の

念無かりしかば、張騫功を成さずして歸りぬ。然れども匈

奴遠く北に遁れて西域來往の道開け、東西交通の緒を得た

るは武帝の功に歸せざる可からず。

武帝内宴に耽りしより宦官事に預り、元帝多病にして宦

官威福を弄びしが、成帝立ちて外戚王氏、宦官に代りて權を

專にし子弟皆顯要に當れり。其族王莽、奇才ありて大望を

懷き、恭謙士に下り大に名聲を博して成帝の大司馬となり、

王氏の篡

二十五年を以て鄯直隸省趙州に即位し次で洛陽に都す、是を後漢の光武帝となす。適、赤眉長安を陥れて劉玄を殺せしかば、帝將を遣し赤眉を破りて之を降せり。然るに當時尙ほ成都四川省に公孫述あり、成紀甘肅省に隗囂あり、河西オルドスに竇融あり、河南ドオルに盧芳あり、皆自立して漢に服せざりしかば帝諸將を遣し討ちて悉く之を平らげ天下を一統せり。



後漢光武帝

後漢の初
世三帝の
治

光武帝已に天下を一統し、悉く王莽の諸政を改め、專意を内治に用ゐ、經術を修め禮樂を尙び、亦前漢諂諛の風を矯めて名節を勵ませり。明帝其遺緒を紹ぎ學を尙び政を力め、

外戚宦官
の争權

民其處を得て戸口滋殖す。明帝没して章帝嗣ぎ寛厚を以て天下に臨む。光武帝以後此に至り、三世六十餘年天下泰平を致せり。然るに和帝十歳にして位に即き、幼なるを以て竇太后政を聽き、竇氏の一族、外戚の威を負うて政權を擅にし逆謀を企つるに至り、宦官鄭衆帝を扶けて竇氏の黨を黜け、功を以て大長秋となり、遂に宦官弄權の端を啓き、安帝少帝並に幼にして帝位に即きしかば、外戚と宦官と益相凌轢して遂に漢室滅亡の禍を惹起せり。次で順帝の皇后の兄梁冀外戚を以て威福を專にし、質帝を毒殺して桓帝を立てしが、後帝梁冀の專横を惡み宦官單超等と謀りて悉く梁氏を誅戮せり。是より宦官外戚に代りて威を漢廷に專にす。是に於て名節氣慨の士皆宦官の跋扈を憤慨して大學

黨錮の變

の諸生と結托し、盛に國政を誹議し、朝官を褒貶し以て反抗を企つ。宦官之を黨人と稱し、帝に誣告して悉く之を禁錮す。東漢黨錮の變是なり。桓帝崩じ靈帝立つに及び、大將軍竇武、名士陳蕃等と宦官を誅せんとして謀漏る。宦官大逆を以て之を誣ひ、陳蕃以下百餘人を殺し、己等と合はざる者は皆廢徙禁錮して益勢威を振へり。

班超の西征

後漢の初め西域諸國內屬せんとして請ひしも、光武帝許さざりしが、後明帝匈奴を破りて前漢の武帝の舊圖に倣ひ、班超を西域に遣はす。班超先づ南山に沿うて鄯善國前漢の樓蘭國に至り、北匈奴の使を斬りて國王を威服し、勢に乗じて于闐國和疏勒國喀什を降す。漢乃、西域都護を置きて諸國を監せしむ。明帝没して西域諸國復反し、都護府を陥れしかば、漢は西域

大秦

を捨てんと欲せしに、班超上書して自、征討せんとして請ひ、進んで莎車葉爾を略し、龜茲庫を降し、焉耆喀喇を襲ひ、烏孫を招き、大月氏を破りて西域五十餘國の都護となり、部將甘英をして安息を経て大秦に通ぜしめ、自、西域に在ること三十一年、威葱嶺の東西に振へり。大秦は羅馬東領なり。甘英、波斯灣頭に至りしも、渡ること能はずして歸れり。西紀百二年和帝永元十四年、班超没して任尙代り、邊和を失して西域諸國遂に皆漢に叛きぬ。然も是よりして支那は緡綵の産地として歐洲に知られ、後大秦の安息を破るや、恰も桓帝の世に當り、其王安敦アントニヌスの使者印度洋に遊び、安南を経て漢に通じ、爾後支那の商船も亦錫蘭附近に至り、彼此の來往交貿漸く盛くなりき。

第六章 匈奴鮮卑の盛衰

匈奴の勃興

匈奴は古獯鬻フンと稱し、後獯猶フンといひ、秦漢以後匈奴フンといふ。水草を逐ひて蒙古地方に轉住せる人民にて、性勇健騎射を善くし、周の季世列國の亂に乗じて中國に入る。趙燕之を攘ひて長城を築き、秦に至りて其河南の地を收め、悉く之を塞外に逐ふ。漢楚天下を争ふ時、匈奴の單于冒頓は、東胡を討ち、月氏を走らし、河南を併せ、燕代を侵して、陝西に及び、其左賢王は東の方上谷直隸省に居り、右賢王は西の方上郡陝西安府直隸省に居り、單于是代直隸省宣化府雲中內蒙古化城西に居りて、二王を統率す。漢の高祖北征して、白登城山西大同府に圍まれ、單于の妻に賂ひて辛じて免かれ、歲幣を厚くし、公主を尙して、其歡心

匈奴の衰微

を買へり。此に由りて、匈奴は漢朝を輕侮し、屢邊境を侵す。冒頓の子老上名は稽粥單于是、月氏の地を奪ひて、天山南北兩路の地を服し、匈奴益強大を極めたり。老上の子軍臣單于の世、漢に武帝出で、頻りに匈奴を征じ、休屠甘肅省涼州府昆邪甘肅省二王を降し、烏孫と婚を通じ、西域諸國を威服して、天山南路の地を奪ひしかば、匈奴の威漸く衰ふ。軍臣の後七傳して、壺衍鞬單于に至り、烏孫の漢に通ずるを怒り、之を攻めて、多く人馬を失へり。是に於て、匈奴の別種、丁零は北より、東胡の一部、烏桓は東より、烏孫は西より起りて、此衰弊に乗じて、匈奴に迫り、加ふるに、匈奴の西方諸國を統領せし日逐王は、其地を以て漢に降り、東部の呼韓邪單于是、其兄郅支單于と争ひ、敗れて漢に降りて、匈奴益衰ふ。次

て鄧支單于は西の方アルタイ地方に奔りて康居に依り、漢元帝建 烏孫、大宛を侵して勢復盛なりしが、昭三年 西紀前三十六年、漢の西域都護甘延壽の爲めに襲殺せられ、匈奴はより遂に微なり。

匈奴の分

然るに漢末王氏の篡奪ありて支那再び亂るゝや、匈奴其機に乗じて復起り、東は烏桓、鮮卑、西は西域諸國と結托して連りに山西、陝西地方を劫かす。會日逐王比、蒲奴單于と合はず、南匈奴に據りて漢に内附し、北匈奴と相攻伐せるより匈奴遂に南北に分る。明帝の初年北匈奴屢邊塞に侵寇せしかば、帝、祭彤、竇固等に命じ、南匈奴の衆を合せ大舉して北征し、伊吾盧密哈を取り、班超は西域を服従して其右臂を斷ち、次で丁零、鮮卑、南匈奴及西域諸國、四周より起りて北匈奴

匈奴の西

の衰亂に乗ず。後和帝の外戚竇憲も亦大軍を率ゐ、燕然山外蒙古に至りて大に匈奴を撃破せしかば、單于其餘衆と共に遠く西方に遁竄して其地遂に空し。是に於て鮮卑、匈奴に代りて其後に興れり。

烏桓

秦漢の際東胡の勢能く匈奴と對抗せしが、冒頓單于に撃破せられて、東方に奔り分れて、烏桓、鮮卑の二部となる。後

鮮卑

烏桓の部衆漸く強大に赴き屢漢塞に寇せしが、昭帝の時霍光の破る所となりて漢に降り、次で屢匈奴の東邊を侵せしが、後漢の末曹操の爲めに滅されき。鮮卑は後漢の初、南北匈奴の争へるに乗じ連りに匈奴の地を侵略して漸く強大となり、桓帝の時に及び其大人檀石槐は内蒙古の彈汗山に據りて、東は扶餘を卻け、西は烏孫を撃ち、北は丁零を防ぎ、悉

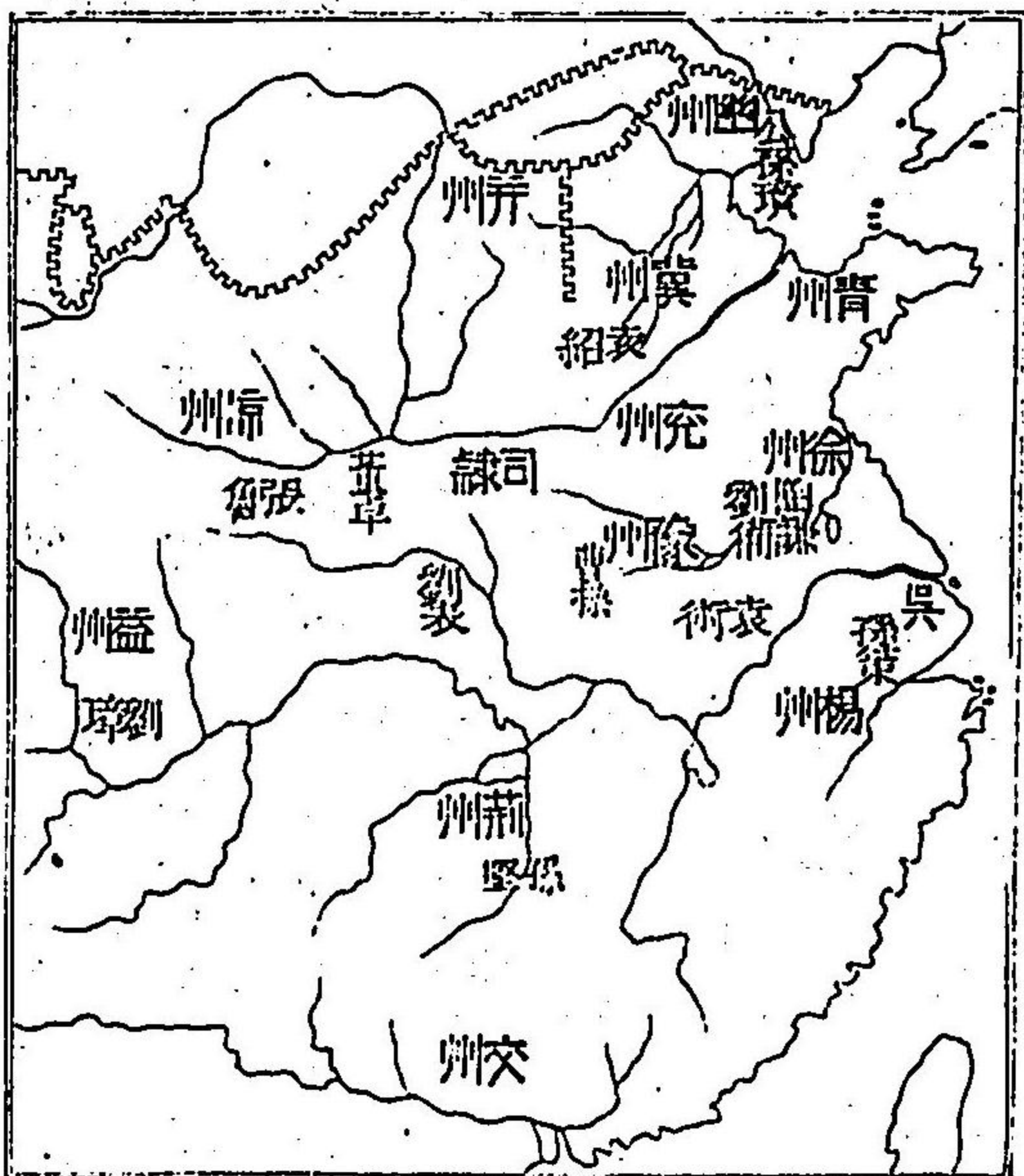
く匈奴の故地を掩有して其版圖東西四千里、南北七千里に互りしが、檀石槐死するに及びて分裂しぬ。然るに後四十年にして其部酋に慕護跋出で、司馬懿（司馬懿）の公孫淵を滅すに當り之を助けたる功によりて魏の封を受け、遼西に居りて慕容氏（慕容氏）と稱し、其孫慕容暉に至り諸部を併吞して勢頓に強大となれり。

第七章 三國

後漢の末宦官跋扈して帝室の威令行はれず、天下漸く亂れんとするの時に當り、鉅鹿府（直隸省順德府鉅鹿縣）の張角、黃巾の妖賊數十萬を以て起り勢天下を動かし、皇甫嵩討ちて之を平げしも其餘衆四方に散じて州郡を擾る。朝廷よりて重臣を

漢末群雄の割據

州牧に任じて之を鎮壓せんと謀りしかば、外權漸く重くなれり。靈帝崩じて子辯立つや袁紹悉く宦官を誅滅せしに、董卓河東（山西省西南部）の兵を率ゐて京に入り、帝辯を廢して獻帝



漢末群雄割據

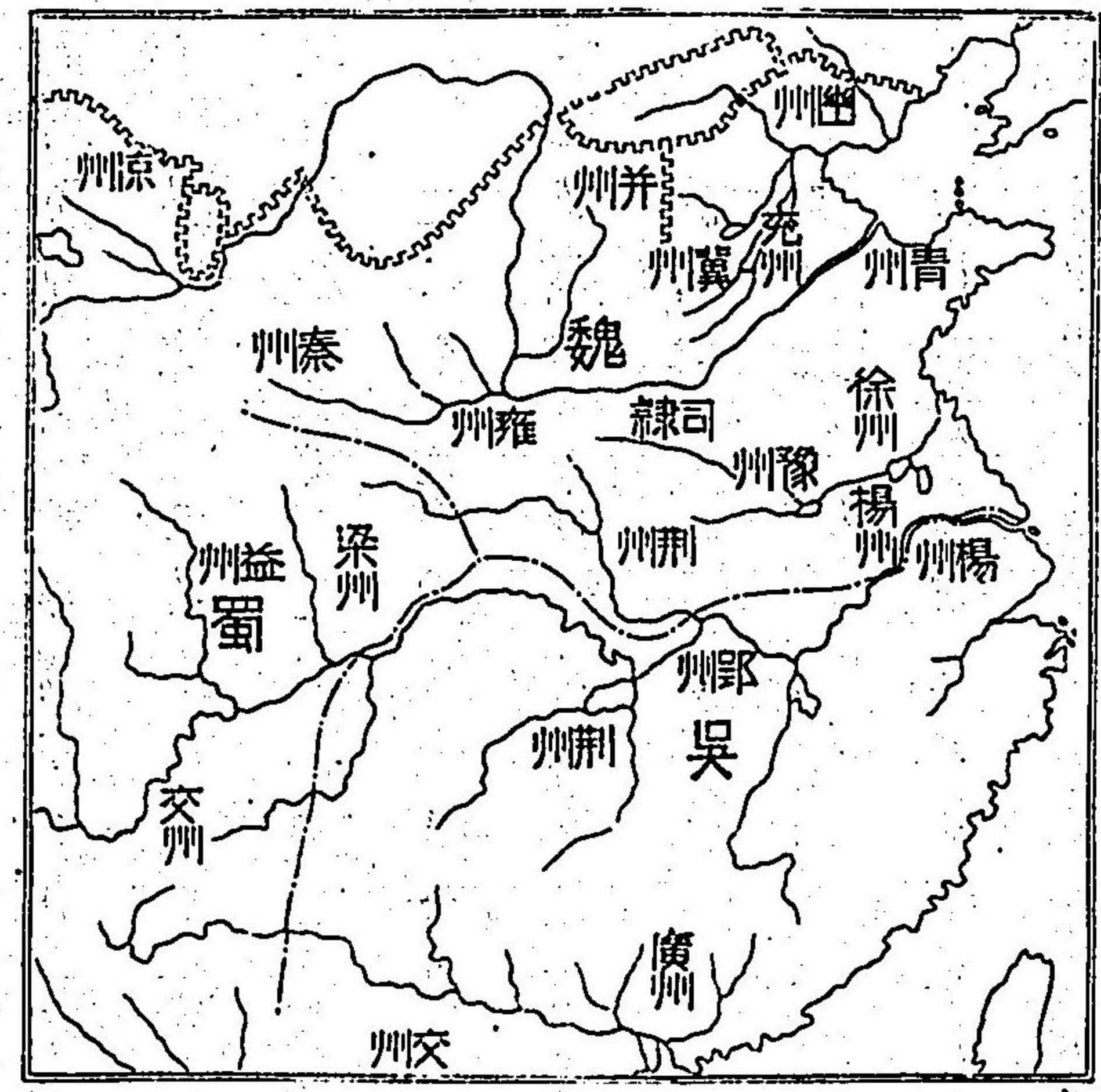
併を力の曹操は山東に據り、袁紹は山西を有し、其從弟袁術

を立つ。袁紹乃關東に奔り諸將と連合して董卓を伐ちしかば董卓帝を奉じて長安に遷りしが、王允及呂布の殺す所となれり。是に於て洛陽、主なきを以て關東の諸將、兼

は河南を略し、湖北に劉表あり、湖南に孫堅あり、公孫瓚は直隸一帶の地を有し、公孫度は遼東に雄視し、劉璋は巴蜀に據りて天下分裂せり。後曹操、獻帝を許封府許州に迎へ、之を挾んで四方に臨み、南の方、袁術を滅して河南、江淮の地を收め、勢頓に振ひ、袁紹は地を河北に擴め、公孫瓚を斬りて直隸、山西の地を併せしが、遂に曹操に滅ぼされ、公孫度の子康も亦曹操に歸服しぬ。曹操乃、南の方襄陽府襄陽縣の劉表を討つ。時に漢の景帝の裔孫劉備襄陽に在りしが、名士諸葛亮を得て江東に奔りて孫堅の子孫權に合す。孫權よりて謀臣周瑜の謀を用ひ、劉備と與に曹操の大軍を邀へ、西紀二百年大に之を赤壁湖北省武昌府嘉魚縣に破りて、遂に江南を掩有し、次で魯肅の謀を聽きて、湖南の地を劉備に貸し、劉備をして

赤壁の戰

三國の鼎立



三國

進んで巴蜀を取らしめ、曹操を夾撃せんと謀る。劉備乃、江を溯りて劉璋を降し、巴蜀を定めしかば、孫權、湖南の地を求めしも、敢て返さず、遂に之を争ひしが、湘水を界として、之を二分し、次で義弟關羽を以て江陵湖北省荆州府を守らしめ、自、北進して漢中を奪へり。是に於て曹操は江北を領し、孫權は江南を有し、劉備其西に在りて、天下を三分しぬ。西紀二百二十年曹操没し

子曹丕嗣ぎ漢の献帝に迫りて位を譲らしめ國號を魏といひ洛陽に都す文帝是なり。劉備これを聞き巴蜀に據りて遙に漢統を繼ぐ之を蜀漢の昭烈帝となす。後漢は光武帝より此に至るまで十三世百九十六年にして亡ぶ。後九年にして孫權も亦帝位に即き國を吳と號し建業江蘇省に都す。故に之を三國といふ。

關羽の敗死

是より先き蜀の關羽江陵に據りて其威大に振ひ襄陽に出て方に許を襲はんこせしかば曹操大に恐れ孫權をして其後を襲ひて之を殺さしめたり。劉備已に帝位に即き關羽の怨を報せんとして親大兵を率ゐて吳を侵し吳將陸遜の爲に破られ遂に憂を以て没せしかば太子劉禪嗣ぎ諸葛亮政を輔け吳と親交を修めて共に魏に嚮ふ。魏の文帝親

諸葛亮の北伐

大軍を率ゐて南吳を征するここ二回共に江を渡らずして師を班へしぬ。蜀は諸葛亮内外の事に鞠躬盡瘁して専ら魏を伐つを力め先づ南蠻を征服して後顧の患を絶ち然る後北伐の師を起し進んで祁山甘肅省鞏昌府西和縣に出で其將馬謖



節度に違ひ蜀軍街亭甘肅省秦州府秦安縣に大敗し次で再び北征して陳倉陝西省鳳翔府寶雞縣を圍みしも糧兵盡きて還り専力を勸農講武に用ゐるここ三年遂に吳と約し

て魏を侵す。時に魏の文帝已に没し明帝位に在り自出て吳師を退け司馬懿をして蜀軍を禦がしむ。然るに諸葛亮

司馬氏の
専權

は司馬懿（懿）五丈原に相持し西紀二百三十四年遂に病を獲て陣中に没し姜維等軍を收めて歸り蜀の勢是より衰ふ。始め魏の諸帝多くは刻薄にして骨肉を疎害せしかば帝室は孤立の姿となり明帝没して齊王芳立つや司馬懿は曹爽を殺し自丞相となりて國政を左右し次で懿の子司馬師專恣にして帝を廢し明帝の姪髦を迎立せり。此間母丘儉文欽諸葛誕等前後兵を舉げて司馬氏に反抗したれども皆敗死し司馬師の弟司馬昭遂に相國となり晉公に封ぜられて屢廢立を行ひ國家の實權司馬氏に歸せり。時に蜀は諸葛亮の死後姜維兵權を握り才武を恃みて屢狄道（甘肅州祁山）より出て北の方魏を征じ國力は爲に銷盡し後帝劉禪は嬖臣を寵用して内政亂れしかば魏の司馬昭其弊に乗じ鍾

蜀の滅亡

魏呉亡ぶ

會鄧艾を遣りて蜀を伐たむ。鍾會は斜谷駱谷子午谷より入り劔閣（四川省保寧府劍州）に至りて姜維に扼せられども鄧艾は狄道より陰平（甘肅省階州文縣）を経て成都に入り帝禪を降せり。昭烈帝より二世四十二年にして蜀亡ぶ時に西紀二百六十二年なり。是に於て司馬昭の威望益高く九錫を加へて晉王となり蜀亡ぶるの後二年其子司馬炎魏の帝位を篡ふ晉の武帝是なり。後十五年にして吳も亦晉に滅さる。三國分立以來凡六十年にして晉復支那を統一せり。

第七章 晉 五胡十六國

晉は魏室の敗亡に懲り多く宗室を封じて藩屏とせしを以て諸王の威望重く加ふるに武帝は即位の初は江南に尙

晋室傾倒
の原因

八王の亂

吳國のありしが故に大に意を治道に用ゐたりしも、杜預、王濬、江を渡りて吳を滅ぼせしより、漸く政に倦みて内宴に耽り、武備を撤せしかば、遂に晋室傾倒の基を開けり。

武帝没し、惠帝位に即きて不慧なり、時に汝南王亮、國政を總べて威福を弄びしかば、賈皇后、楚王瑋と謀りて亮を除き、次で瑋を殺し、亦太子及太后を殺して、自、政權を握れり。趙王倫よりて兵を擧げて、賈皇后を黜け、遂に帝を廢して自立す。是に於て、齊王冏、河間王顥、成都王穎、與に倫を誅し、惠帝の位を復せしが、冏獨り京師にありて專横をりしかば、長沙王又兵を擧げて冏を殺せり。然るに、顥、穎と共に力を合せて、又を破りて、政權を握り、次で東海王越、惠帝を奉じて二王を黜くるに及び、内亂始めて平く、之を八王の亂といひ、前後

清談の流行

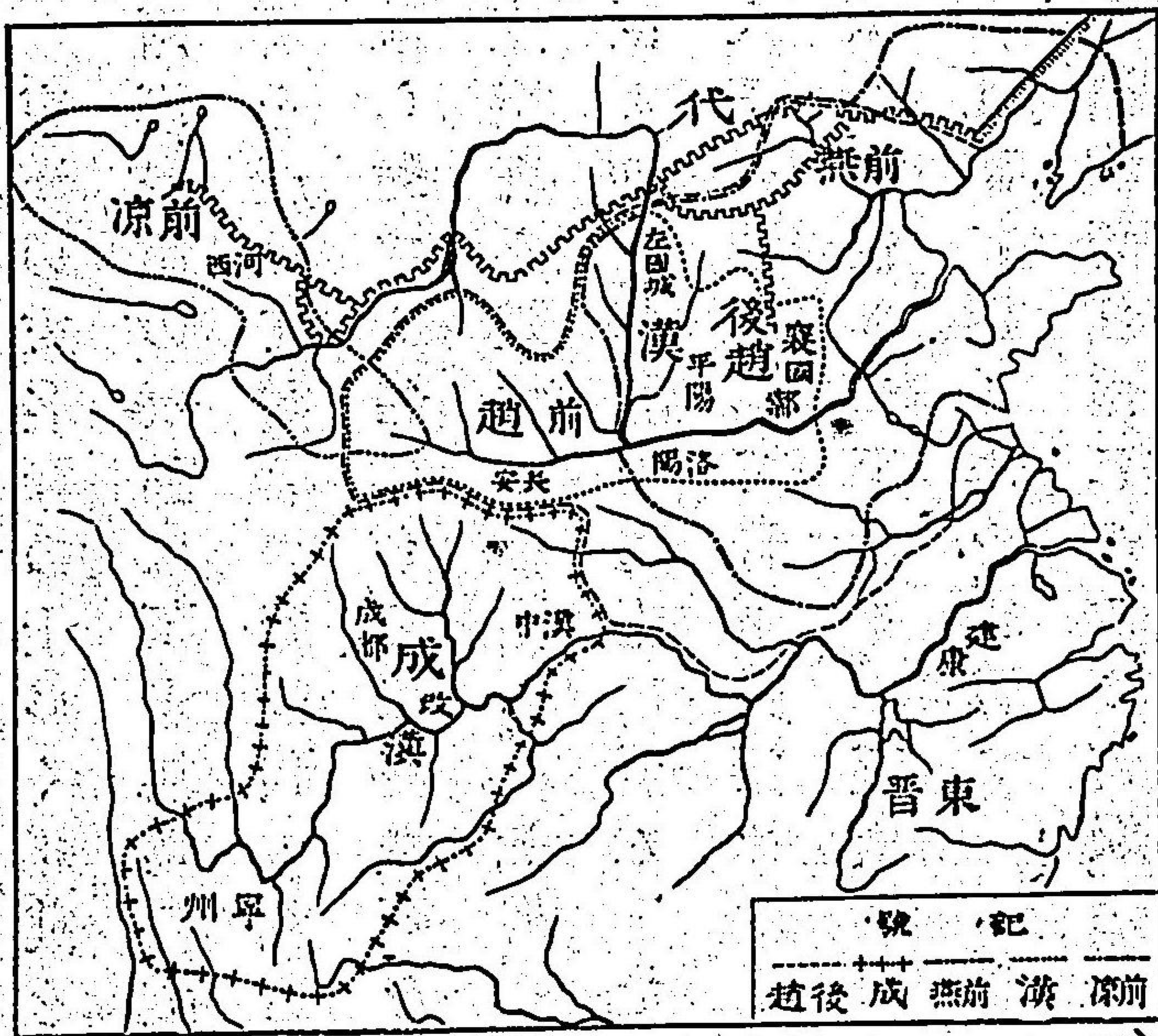
五胡

十六年の間に骨肉互に殘害して、晋室の藩屏遂に空し。

東漢の末、名節の士多く離亂を厭ひて山野に退くと共に、兩漢崇儒の反動は、黃老無爲の道を想はしめ、佛教東流の餘響を受けて、魏、晋の際、清談の流行を來たせり。清談とは俗論に對する名にして、法度禮節を棄て、世事俗務を排し、專、虛立空理を談ずるを謂ふ。此俗、一世を風靡して、上、朝廷の大、臣より下、草莽の處士に至るまで、名教を卑しめ、放達を尙ひ、八王の亂生じて、晋室動搖せるも、殆ど一人の國家、民人を憂ふる者無きに至れり。夷狄其間に乘じて、蜂起し、司馬氏遂に江南に遷る之を、東晋といふ、時に西紀三百十六年なり。

晋室の江南に遷るや、匈奴、羯、鮮卑、氐、羌の五胡、中國に割據し、國を建つるもの、前後十六、東晋の世を経て、南北の二朝と

なれり。初め西晋の武帝の時匈奴多く歸化して山西に移



淝水の戦以前の方の形勢

り、鮮卑は遼西に居りしが、晋の亂るゝに及んで匈奴の劉淵、左國城山西省汾州永寧縣に起り、次で平陽山西省平陽府に遷りて漢帝を稱せり。其子劉聰に至り劉曜、石勒を遣りて晋を攻め、洛陽を陥れて懷帝を執ふ。次で劉曜、長安

を取り愍帝を降して西晋を滅し、劉聰の没後自立して趙王

劉漢

前後兩趙

燕

と號せり。是に於て石勒も亦襄國直隸省順德府邢臺縣に據り趙王と號して河北、山東を併せ、洛陽を界として劉曜と劉漢の地を分つ、史家劉曜を前趙、石勒を後趙といふ、石勒は匈奴の別部羯人なり。氏は初め岷山より巴蜀の間に散在し、羌は青海に居りしが、後漢の時馬援に降りて關中、河東に移され、餘衆多く塞内に居る。是に至りて巴西の氏、李雄、成都に入り四川、貴州を併せて成帝と號し、其弟壽に及びて國號を漢と改む。劉淵、李雄の起るや、鮮卑の慕容皝も諸部を併せ遼東、遼西を掩有して大單于と稱せしが、其子皝嗣ぎて燕王と號し、南、後趙を侵し、東、高句麗を破りて勢日に熾なり。是より先き後趙の石勒、劉曜を洛陽に擒にして悉く劉漢の舊地を併せ、南、東晋を撃ち地を江淮に開きて帝を稱し、稍太平を致

秦 涼

せしが石勒没して石弘、石虎相次ぎ、石虎の没後冉閔遂に國を篡ひて魏帝と號せり。是に於て氏酋符洪は關中に據りて秦王と號し、漢人張重華は河西に據りて涼王と號し、江北復亂る。燕王皝の子儁之を機として河北に入り、魏帝冉閔を滅ぼして山東を併せ、河南を略し、都を鄴に奠めて帝と號し、勢江北を吞む。

東晉

初め西晉の愍帝劉曜に降るや、司馬懿の曾孫鄒郡王睿は建康業建にありて帝位に即き、王導、王敦を用ゐて政兵を分掌せしむ。東晉の元帝是なり。其後明帝、成帝、康帝の三世は内亂相繼ぎて未だ驥足を北方に伸ぶる能はざりしが、穆帝に至り桓溫、軍事を督するに及んで先づ西の方、巴蜀に入りて漢を滅ぼし、勢に乗じて秦王符健を長安に攻めしも、拔く能

涇水の戦

江北の分

はず、次で燕を討ち枋頭河南省輝府滏州に敗れて還れり。是より先き涼王張重華は姑臧甘肅省涼州武威縣に據り、其版圖東隴西より西、龜茲、鄯善に抵り、勢頗大なりしも、弟天錫に至りて國政大に亂る。時に秦王符健の姪符堅、英資あり、王猛を信任して燕を滅ぼし、次で涼の衰亂に乗じて之を滅ぼし、氏酋呂光を遣りて西域を徇へしめ、又鮮卑拓跋部の地を奪ひ、天下の七八を掩有して遂に南晉に向ふ。西紀三百八十三年東晉孝武大元八年、仁德天皇七十一年、符堅、卒六十餘萬、騎二十七萬を以て晉を侵すや、江南爲に震駭す。時に晉は桓溫已に没して謝安、政を執り、其姪謝玄を擧げて秦軍に當らしめしに、謝玄兵八萬を以て大に之を涇水安徽省鳳陽府壽州東に破る。是に於て秦軍一時に潰散し、符堅僅に身を以て免る、之を涇水の戦といふ。秦一たび

劉宋

せり。是に於て劉裕の威名益加はり、遂に晋の禪を受く、之を宋の武帝となす。晋は東西通じて百五十六年にして亡ぶ、時に西紀四百二十年允恭天なり。西晋の末より五胡内地に跋扈し、兩趙前後三秦前後四燕前後五涼前後漢成及夏の十六國を建て互に相攻伐するを百餘年、是に至り、北に魏、南に宋、出て江の南北に雄視せり。

第八章 東方諸國高句麗 鮮三韓 夫餘 新羅の古史

三韓

古朝鮮の漢の武帝に滅ぼさる、頃半島南部の地には諸韓族蕃殖して幾多の部落をなし、遂に馬韓、辨韓、辰韓の三大部となれり。就中馬韓最大にして今の忠清、全羅兩道の地より京畿道の南部に及び、辨韓は慶尙道の西南部、辰韓は其

東北部を領せり。是より先き古朝鮮、王箕準の國を衛氏に篡はる、や馬韓に入りて王となり、次を他の二韓を併せて子孫相繼ぐこと二百餘年に及びしが、漢末に至り百濟王溫祚に滅ぼされぬ。溫祚は扶餘族にして貂種なり。

貂種はもと滿州松花江の流域に蕃殖せる民族にして、南下して咸鏡道に入れる者は沃沮となり、江原道に入れる者は濊、貂となり、滿州の南に留りしものは扶餘となり。扶餘の地は挹婁肅の西、鮮卑の東に在りて、今の盛京省の北に當る。前漢の末に扶餘の人朱蒙國難を避けて古朝鮮の故土に入り、都を沸流水鴨綠江上に定め沸流國主を服し、荇人長白山及北沃沮を滅して國を立つ、高句麗の始祖朱蒙、是なり。朱蒙の國を建つるや其少子溫祚國を避け、南扶餘を統

高句麗の建國

率して馬韓の慰禮城忠清道稷山縣に據りて箕氏に代る、之を百濟の祖王溫祚とす。高句麗は前漢の末、王氏の亂に乗じて邊境を侵し、後漢の光武の爲に擊卻せられしも、是より屢遼東に寇せり。後漢の末、公孫度之を擊破りしに、三國の時復入寇せしかば、魏の幽州の刺史毋丘儉擊て之を破り、其都丸都城平安道寧遠郡南劔山を屠る。高句麗の東川王乃遁れて南沃沮に奔りしが、後歸りて樂浪、帶方の地を略し、黃城平壤の東に國都を置き、西晋の末に至りて南の方平安、黃海兩道の地を略取し、西の方遼東を圖る。前燕の慕容氏之を討ちて故國原王を破り、丸都城を陥れしかば、高句麗乃臣と稱し、都を國內城盛京省興京懷仁縣に遷せり。時に百濟は殆ど馬韓の地を統一し、溫祚七世の孫近肖古王は高句麗の故國原王を擊破り、黃海道

一帯の領土を略取して都を北の方、北漢山城京に遷す。二國は素同祖に出ても、是より遂に累世の仇敵となれり。是より先き辰韓の朴赫居世は金城慶尙道慶州に都し、四世を経て昔氏に至り、國號を鷄林チキリンと云ひ、更に金氏に至り、新羅と改め始めて王と稱し、高句麗、百濟と三國鼎立の形勢をなせり。後漢の初め、辨韓の地に駕洛、大伽耶、小伽耶、安羅伽耶、星山伽耶、古寧伽耶の六部落ありしが、新羅、百濟の間に介在せるを以て二國の盛なるや、之に當るを得ず、西紀前三十三年日本に投じて保護を求む、實に我朝崇神天皇の御宇、六十五年紀に當れり。後神功皇后、新羅を征して其王を降せしに、百濟自安んぜず、亦朝貢して我保護を求めしかば、我乃辨韓の故地に任那府を置て、駕洛諸邦、新羅、百濟を保護し、國威

朝鮮半島の南半に遍ねし。

倭く未卯
年来瘦海
破百殘
斤羅く
為臣民

高 勾 麗 廣 開 土 王 碑

種族と結托して北顧の憂を絶ち、頻りに南下の策を回せり。

高勾麗は燕の慕容氏の支那内地に移りてより悉く遼東の地を略し、次で百濟の侵地を復して國勢興隆す。故國原王の孫廣開土王好太に至り雄材大畧あり、我が新羅を伐つは當り、新羅を援けて頻りに我が戰へり。後新羅は復、我に隸屬せしも、高勾麗は勢を負うて服せず、南北兩朝に臣事し、鞋鞞

大月氏の勃興

第九章 大月氏及印度 佛教の東流

初め大月氏の匈奴と烏孫とに逐はれて天山南路の地を失ひ、西に奔りて塞種を逐ひ大夏を撃破して媯水河アムの畔に大月氏國を建つるや、大夏の餘衆南に走りヒンドクシ山を踰えて可カ不里地方に高附國を建て、塞種も亦罽賓カに遁れ、稍勢を西北印度に振へり。然るに大月氏に丘就却王出づるに及び、西は安息國を破り、南は高附國を併せ、其子闐膏珍王遂に罽賓の塞種を討滅して北西印度を併せ、其版圖は可不里より中央亞細亞を経て葱嶺以東に及べり。中印度摩羯陀國の阿輸迦王大に佛教を獎勵し、其長子摩醯因陀羅トラスは之を南方に傳へたり。しが後摩羯陀國は西紀前

佛教の二大派

大月氏及印度 佛教の東流

二十三年に至り、南印度より起りてマンドラ朝の爲に併せられ、婆羅門教再勢力を恢復して佛教漸く振はざりしかば、佛教徒の北に奔りて大月氏に投ずる者頗多く、就中馬鳴龍、樾等の諸名僧相繼ぎて之に赴き、遂に北印度罽賓の地は佛教の中心となれり。後漢の初め迦膩色迦王其地に君臨するや深く之に歸依し、僧侶五百人を會して第四回の結集を爲したり。是即北派佛教にして大乘教なり、而して此結集に與らざりし南方佛教徒は別に獅子國錫を中心として所謂南方佛教を傳へたり。

是より先き支那は前漢の武帝以來西域諸國との交通頻繁なりしを以て佛教稍傳はりしも、其流通盛ならざりしが、後漢の明帝の世は恰も大月氏の迦膩色迦王の治世に當り、

北派佛教
支那に入

佛教極東
に流傳す

北方佛教は隆盛をきはめ天山南路の諸國に傳播せしかば、西紀六十四年明帝の永平七年蔡愔等を西方に遣はし佛法を求めしむ。蔡愔大月氏に至り佛經佛像を得、攝摩騰竺法蘭の二僧を伴ひて歸り白馬寺を洛陽に立てたり、實に釋迦滅後五百四十年なり。攝摩騰等乃漢語を修め佛經を翻譯せしに道家の徒褚善信等之を争ひ後遂に道佛二教の軋轢を生ぜり。而して漢威の西域に遍く交通の便開くるに及びて、月氏よりは支婁迦讖、安息よりは安世高、印度よりは竺佛朔、康居よりは康孟詳等相前後して支那に入りて譯經に従事し、諸帝も亦之に歸依するもの多く、後漢の季世より佛教漸次弘通し、三國時代には魏に最も行はれ、次で晋に及びて佛教益隆盛に赴けり。東晋の時秦主苻健は僧順道を海東に遣

りて高句麗に佛教を傳へ東晉簡文帝 咸安二年後十二年にして晋は摩羅難陀をして之を百濟に弘通せしむ。而して高句麗は之を新羅に傳へ、百濟は之を我國に傳へたが、實に欽明天皇の十三年梁光元帝承聖元年 皇紀千三百十二年にして西紀五百五十二年に當れり。

第十章 宋齊梁魏

宋の東晋に代る頃西秦は南凉を滅ぼし、夏主赫連勃勃もまた西秦を滅ぼして、隴西を併せ、北凉は西凉を降して河西の地を統一し、鮮卑の吐谷渾は青海、河湟の地を略し、三國關西に鼎立して互に相攻伐せり。魏は道武帝の後明元帝を経て、太武帝宋の文帝と時を同じうして位を踐み、勇健にして善

魏の江北
統一

南北朝
南宋北魏

く兵を用ひ、北燕を滅ぼし、夏、北凉及吐谷渾の三國を降して悉く江北の地を定め、江南の宋と對峙す、之を南北兩朝といふ。明元帝嘗て河南の地を略せしかば、宋の文帝之を啣み、遂に玉玄謨をして大舉して魏に入寇せしめ、碻磈山東省東昌府茌平縣を取りて、滑臺直隸省衛輝府滑縣を圍む。太武帝方に北伐より還り、自、河を渡りて大に宋軍を破り、玄謨を走らし、其過ぐる所四野赤地となり、淮北皆魏の有に歸せり。宋は此一敗より復振はず、三傳して明帝に至りしが、其間多く宗室を殺戮して王室孤立し、權臣蕭道成の爲に國を篡はれて亡ぶ、時に西紀四百七十九年なり。之に反して後魏の文武帝は太武帝の經略の後を承け、専ら民を休息して富國の策を講じ、獻文帝を経て孝文帝に至り、中國の文化を慕うて都を洛陽に遷

魏の極盛

し、姓を元と改め胡服、胡語を禁じ、禮樂を興し、制度を定め、百
 般の文物備はりて極盛に達せり。然るに孝文帝没し、宣武
 帝嗣立し、宗室を疎んじ、嬖倖を用ゐて政稍亂れ、其子孝明帝
 の世、平城藩衛の將士、資給の薄きを怨みて、叛きしに、爾朱榮
 亂を平らげ功を負ひて專横を極め、孝莊帝の殺す所となり、
 其一族遂に亂を作せしかば、朔方の鎮將高歡討ちて其亂を
 平げ、孝武帝を擁立して大丞相となり、府を晉陽山西省太原府に開
 き、遂に帝を逐ふ。孝武帝奔りて關西の大都督宇文泰に據
 り、長安に都す、是を西魏となす。高歡乃、別に孝靜帝を鄴に、
 立て、宇文氏と潼關に相拒ぐ、東魏となり。是に於て後魏
 分れて東西となる、時に西紀五百三十五年なり。然れども
 其實は高、宇文二氏の割據にして、魏室は其名を存するに過
 ぎず。

東西魏

南齊

梁の武帝

是より先き宋の蕭道成は、帝位を篡ひて齊の高帝となり、
 五傳して東昏侯寶卷に至り、國政亂れて四方叛きしに、其疎
 族蕭懿、叛亂を鎮定して聲望隆く、寶卷の爲に忌み殺されし
 かば、蕭懿の弟蕭衍は、寶卷の弟寶融を奉じ、兵を擧げて建康
 に入り、西紀五百一年遂に齊の禪を受けて帝位に即けり、之
 を梁の武帝となす。時に東魏の河南の軍事都督侯景は、高
 歡の子高澄と隙あり、河南の地を以て梁に降り、河南王とな
 りて東魏を伐ちしが、大に敗れて南に奔りて壽春に據る。
 梁の武帝江南に帝たる、己に四十八年、深く佛法に歸依して
 慈善を奉行し、刑辟弛みて武備廢せしを以て東魏を伐ちて
 克たざりしかば、和を成せり。侯景之を怨み、兵を擧げて健

康を陥れ強て武帝の大丞相となり、武帝憂念して没するの
 後簡帝を弑し蕭棟を廢し自立して帝と稱す。其時梁室亂
 れ武帝の子蕭繹は江陵に據り、其弟蕭倫は江夏湖北省武昌府に武
 帝の孫蕭譽は襄陽に據りて互に相争ひ、蕭綸は東魏に降り
 蕭譽は西魏に頼れり。是に於て西魏は巴蜀を略取し湖北
 を圖り、東魏は江淮の地を取り、梁の封土日に蹙まる。其時に
 蕭繹は王僧辨を遣り、陳霸先と與に侯景を誅せしめて位に、
 即き元帝と稱せしむ。西魏の宇文泰之を伐ちて江陵を陥れ、
 蕭譽を立て梁王とせり。是より先き東魏の高澄の弟高洋
 は孝靜帝の禪を受けて北齊の文宣帝となりしが、此に至り
 兵を發して蕭淵明を納れて梁主となし、王僧辨之を奉ぜし
 に陳霸先は元帝の子蕭方智を擁立して王僧辨を破り、次で

北齊

陳の武帝

西紀五百五十七年に至り陳霸先遂に帝位を篡ふ、是を陳の
 武帝となす。而して西魏の宇文泰は此年を以て没し子覺
 魏の禪を受けて周の孝閔帝となれり。

第十一章 陳北齊周隋 柔然突厥

陳、北齊、周

陳は梁の後を承けて江南を有し、北齊は東魏の禪を受け、
 て江北に據り、而して周は西魏に代りて、漢湘二水以西を保
 ちて天下を三分せりと雖も、北齊は文宣帝の後三傳して帝
 緯位を嗣ぎ昏愚にして國政亂れ屢々陳に侵さる。一時に周
 に武帝出で剛毅賢明克く國を治め、西紀五百七十七年自將
 として北齊を伐ちて之を滅ぼし江北を併せしが、武帝の孫
 靜帝に至り幼なるを以て太后の父楊堅政を輔け次で其禪

陳北齊周隋 柔然突厥

隋

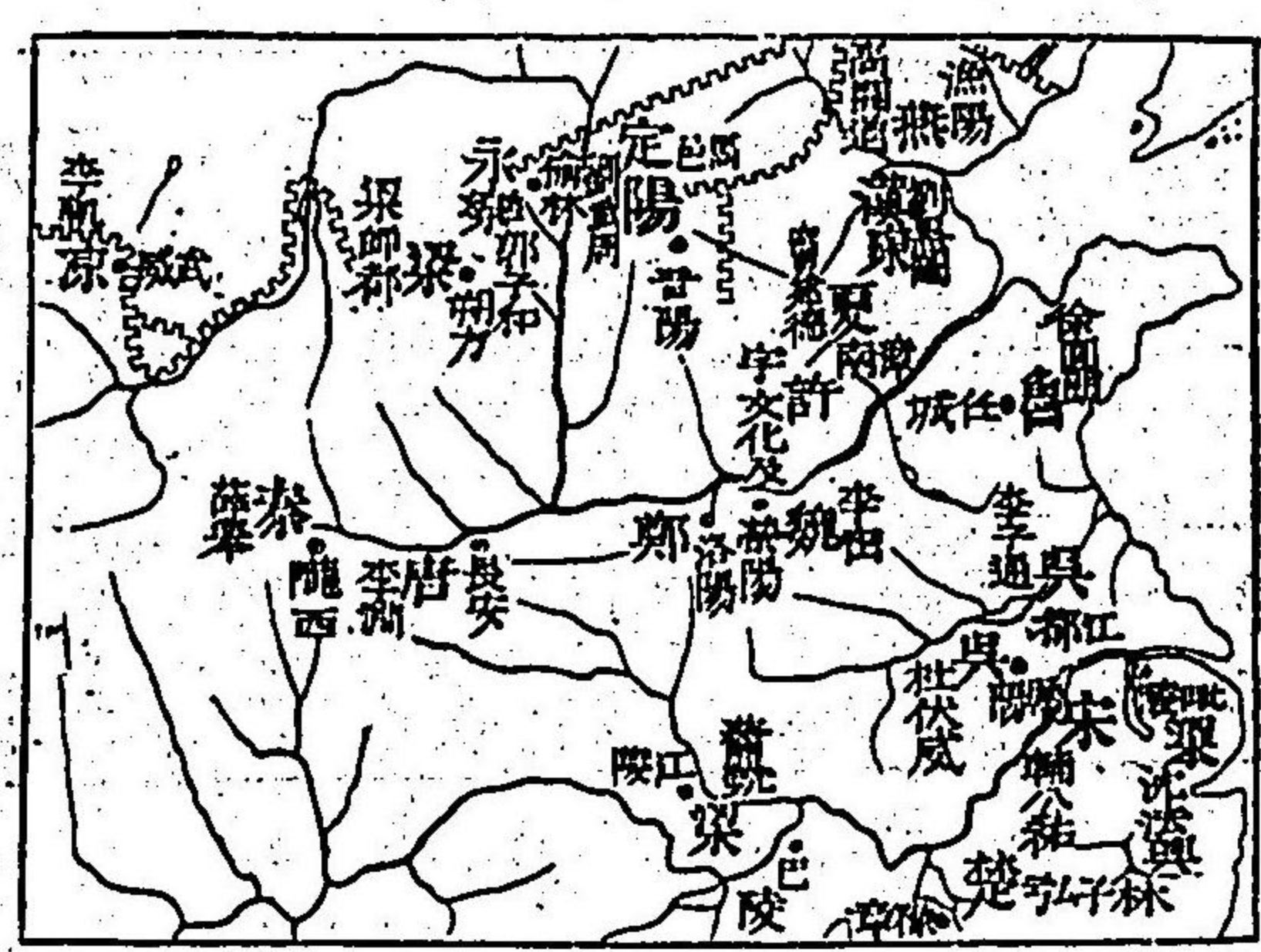
陳北齊周隋 柔然突厥

九〇

を受く隋の文帝是なり。是に於て文帝後梁の蕭詧を討ちて湖北の地を取り、次で陳の後主叔寶が淫虐奢侈にして民心離畔せるに乗じ、子晋王廣を遣り一舉して陳を滅さしめ、西紀五百八十九年崇峻天皇二年南北を合して天下を統一せり、晋室衰へて劉淵左國城に起り、五胡割據を始めしより此に至りて實に二百八十六年なり。文帝既に天下を統一して專意を内治に用ゐ、刑律、制度を更定し、散樂、雜技を禁じ、勤儉を以て下を率ゐ、賦税を減じて民を休めしかば、戸口滋殖して天下泰平なりき。然るに長子勇は帝の意に忤ひて廢せられ、次子廣、太子となりしが遂に帝を弑して自立す、煬帝是なり。煬帝性豪華を愛し、長安を西京とし、洛陽を東都とし、二百萬丁を役して宮殿、苑囿を造營し、百萬口を發して刊溝、蘇

隋の煬帝

河運、永濟溝、江、南河、運、浙、江、等を開通し、太行山を穿ちて、馳道を通じ、長城を築きて、榆林、陝西省より紫河の西北に達し、諸方を遊行して、下民の困弊を顧みず、亦頻に遠略を試み、裴矩を河西に遣りて西域の賈人を誘はしめ、吐



隋 末 群 雄
 谷渾の餘衆を撃ちて西の方、青海の地を開き、東南は流求を征し、林邑を平げ、高句麗を招きしに高句麗應ぜざりしかば、帝怒りて之を征せんと欲し、師百萬を發して遼

東に出でし、軍覆り兵憊れて其效を收むる能はざるもの、兩度に及び、財盡き士怨み、百姓困窮して豪傑各地に競ひ起

陳北齊周隋 柔然突厥

九二



柔然の興

柔然また蠕蠕といふも匈奴の別種にして東晋の初め、

柔然及突厥版圖

に據りて楚帝と稱し、竇建德は河北を
取りて國を夏と號し、長安の李密は楊
玄感に従ひて黎陽に起り、玄感敗るる
に及び更に翟讓等と滎陽を下して自
ら魏公と號し、劉武周は突厥に推され
て定陽可汗と號し、梁師都是梁帝と號
して突厥に通じ、蕭銑は巴陵に起りて
梁王と號す。李世民此間に出て、父李
淵を奉じて兵を晋陽山西省太原府に起し、遂
に群雄を平定して唐室を興せり。

車鹿會といへる者、部衆に推されて國を建て、柔然と號し、世
拓跋氏に隸屬して漠の南北に散居せしが、後六世を経て社
崙に至り、後秦に通じて魏を侵し、道武帝の逐ふ所となりて
漠北に遁れ、高車漢の丁零を撃ちて其東邊を略取し、次で匈奴の
餘裔を額根河畔に破り、東は朝鮮より西は焉耆に抵り、南は
大磧より北は砂漠を渡るまでの大領土を掩有して自ら可
汗と號し、屢後魏を侵して前敗に報るぬ。太武帝江北を統
一して塞外の諸國を招降するや、柔然を伐ちて、社崙の從弟
大檀を破り、北ぐるを追うて燕然山に至り、其部衆殆ど百萬
を降せり。是より柔然頓に衰へしが、大檀五世の孫醜奴可
汗の世に及び、塞外の諸部落を平定して國勢復盛なり。醜
奴の弟頭兵可汗の時、魏は東西に分れて相争ひ、各幣を厚く

突厥の興起

して柔然の歡心を求めしかば、頭兵可汗驕傲にして遂に西紀五百五十五年突厥の爲に滅ぼされたり。

突厥は北匈奴の支族にして金山アルタの南に居り世々柔然に臣屬せしが、其部長土門、高車を破りて其衆五萬餘を下してより勢盛となり、婚を柔然の頭兵可汗に求めしに卻けられしかば自立して伊列可汗と號し柔然を伐ちて頭兵を殺し、其子木杆可汗に至り遂に柔然を滅ぼし、嚙嗟を破り吐谷渾を降し、東は契丹を撃ち、北は結骨を滅ぼし、威令遠く遼東より西海に振へり。是に於て木杆は自、東都斤山外蒙古抗附近に



隋代西北の形勢

東西突厥

治して東方諸國を統領し、從弟達頭可汗をして西、千泉中央亞細河附近亞細亞に居りて西方諸國を支配せしめ、突厥遂に東西に分る。是より西突厥は東羅馬と連和して連、に波斯を苦しめ大に其領土を擴め、東突厥は連りに支那の西北邊境を侵せしかば、周、齊の諸帝之を憂へ東突厥と婚を通じて其歡心を結へり。隋の初め木杆の從子沙鉢略可汗、隴西に入寇して文帝に破られ、其子都藍立ちて從弟染干と隙あり、染干遂に隋に奔り其援を得て歸りて故土を平定す、啓民可汗是なり。隋末啓民の子、始畢可汗復邊に寇し、其勢隆盛なりしかば群雄多く争て臣と稱して其後援を仰げり。

第三編

第一章 唐初の治 武韋の禍

唐の一統

隋の時突厥連りに邊に寇するを以て煬帝李淵を太原の留守となして之を防がしめしに李淵の次子李世民天下の亂るを見て援を突厥に借り父を奉じて兵を擧げ長安を取り代王郁を立て恭帝となし李淵を丞相となせしが李淵遂に恭帝の禪を受けて國を唐と號せり之を唐の高祖とす。時に煬帝江都に在りて宴飲に耽りしが西紀六百十八年宇文文化及の弑する所となれり隋は二世三十年にして亡ぶ。是に於て李密宇文文化及を破り次で王世充は李密を滅ぼし洛陽に據りて鄭帝と稱せしが李世民先づ劉武周を撃

太宗貞觀の治



唐太宗

成弟元吉共に世民の功名を嫉み之を殺さんと謀りしかば世民二人を殺し高祖の禪を受けて帝となる太宗是なり。

破し次で王世充を降し竇建徳を擒にして黃河流域の地を定め更に將を遣りて梁楚を平らげ朔方を定めて天下を一統せり。かく唐の起りしは皆世民の功なるを以て其兄建

太宗は實に唐業創成の人にて初より高祖を扶けて内政の釐革を圖りしが帝となるに及びては杜如晦房玄齡等をあげて政治を總へしめ魏徵王珪等を顧問となし大に心を政治に用ゐるて官制を改定し

官吏登庸法を制し田税の法、兵、刑の制を革め、校舎を盛んにして文學を奨励し、府兵を置きて武備を嚴にし、刑辟と賦税とを輕減して士民を撫恤し、海内無事にして德化四陲に及び、貞觀の治は秦漢以來第一と稱せらる。太宗没して太子嗣く之を高宗となす。其初年は長孫無忌、褚遂良、李世勣等文武の名臣、太宗の遺詔を受けて輔翼扶佐し天下頗る太平なりき。然れども二帝の功業は内治よりは寧外征に在りて、唐初四十年間に東、中、南三方の亞細亞大陸は殆ど唐の羈絆に屈し、漢族は實に空前絶後の盛運を窮めたりしが、内は却て武、韋兩氏の亂、閭閻の間より起れり。

武氏の亂

初め太宗の後宮に才人武氏あり、高宗其美を聞き密に納れて昭儀となせしが、後武氏、王后を退けて皇后となり、高宗

則天武后

の多疾なるに乗じて政を決し、遂に大權を左右し其勢、朝野を傾けたり。高宗没して中宗立つや武氏自、政を秉り、次で帝を廢して其弟睿宗を立て自、朝に臨みて制を稱せしかば、越王貞、李敬業等前後兵を擧げて武氏を伐ちしも皆敗死せり。武氏天下の己に服せざるを見て大に宗室貴戚を誅殺して國號を周と改め、遂に睿宗を廢して自、神聖皇帝と號して唐に代る、則天武后是なり。然れども武后性明敏にしてよく人材を用ゐしかば、初は將相皆其人を得て國政大に揚りしも、晩年に至りて嬖倖を任用して政紊る。宰相張柬之等武后の病めるに方て兵を發して嬖倖を斬り、后に迫りて中宗の位を復せしむ時に西紀七百五年なり。次で后没し唐室復興る。初め中宗の廢せられて外に在るや、皇后韋氏

韋氏の亂

之に従ひ常に艱苦を同うせし故、中宗深く之を恩とし、位に復するに及んで其爲すに任せしかば、韋氏遂に朝政に參與し、又竊に武三思に通じ、遂に中宗を弑し、溫王重茂を立て、自政を攝し、同族を多く顯要の位地に置く。是に於て睿宗の子臨淄王隆基、兵を率ゐて宮に入り、韋后を斬り、諸韋及其黨を誅除し、溫王を廢して睿宗を立つ。後三年にして隆基睿宗の讓をうけて帝と爲る、之を玄宗とす。

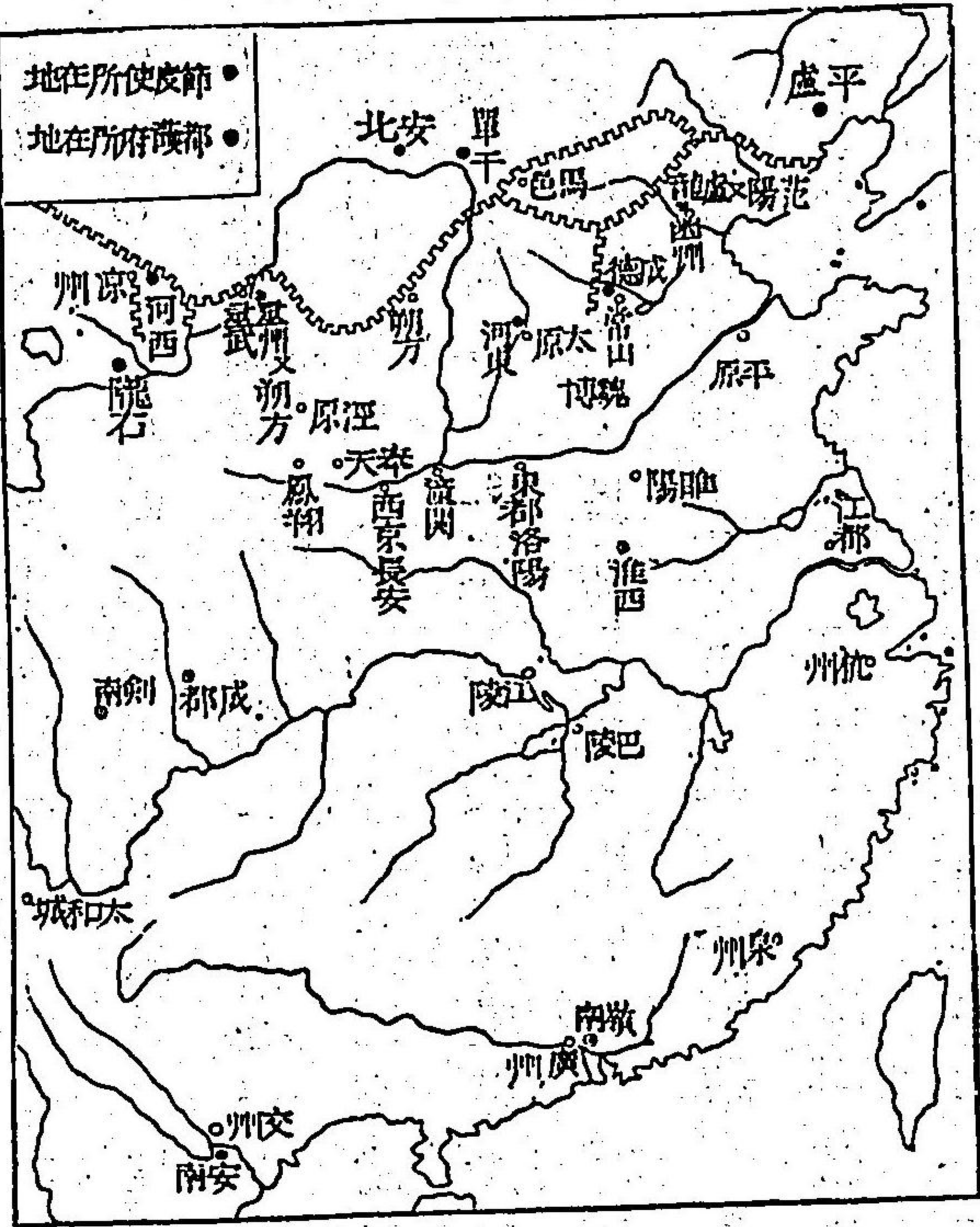
第二章 開元の治 安史の亂

玄宗開元の治

玄宗帝は即位の初め、精を勵まし治を圖り驕奢を禁じ賦斂を薄くし、姚崇、宋璟を擧げて相とせり。姚崇は明敏にして吏才あり、權倖を抑へ諫諍を力め、宋璟は善く人を用ゐる刑

賞に私偏なきを以て共に賢相と稱せらる。二相の後、張嘉貞、張說、李元竑、杜暹、韓休、張九齡等の良相輩出し、國家益殷富にして文學技藝並び興り、所謂開元三十年間の治を致せり。初め、太宗の時府兵の制を設けて都督府を要地に配置せしも、後其制破れて空名に屬し、睿宗の時に初めて節度大使を置けり。而して高宗の末年以來武韋二氏の禍ありて國威漸く微なるに乗じ、外夷屢邊境を擾せしかば、玄宗は四陲の要地に十節度使を置き、兵馬の大權を委ねて四方を經略せしむ。十節度使とは、黑龍江附近を鎮撫する平盧内蒙古東部の節度使、奚、契丹等を制する范陽北京の節度使、回紇を禦ぐ河東、太原府及び朔方甘肅省靈州府の兩節度使、吐蕃に備ふる河西甘肅省涼州、隴右全寧省西の兩節度使、吐蕃と苗蠻とを防ぐ劍南四川成都府

の節度使、南海諸國を鎮する嶺南、廣州府の節度使、西域諸國



十節度使及都護府

を抑制する安
 西哈喇の節度
 使及専ら突厥
 に當る北庭山天
 北路廼の節度
 化府廼の節度
 使是なり。か
 くて唐の勢威
 再び塞外に張
 りしも、内には

遂に蕃鎮重權の禍源を成せり。

玄宗帝久しく位に在りて漸く驕慢の念を生じ、奢侈宴樂

安祿山の反

を好み國用乏しくなりて收斂を事とし、初め宇文融を任用
 し次を楊慎矜、韋堅、王鉷の徒を信任せり。時に宰相李林甫
 は性柔佞狡猾にして宦官、宮嬪と結托し、帝意を迎合して聰
 明を壅蔽す。帝も亦内行治まらず、王皇后を廢して武惠妃
 を寵幸し、更に壽王の妃楊太眞を容れて貴妃となす。楊氏
 の族是より盛榮を極めて驕侈を恣にし、楊國忠遂に李林甫
 に代りて相となりしが、幾ならずして安祿山の亂起れり。

安祿山は營州の雜胡なり、狡黠にして勇略あり、巧に玄宗
 の寵妃楊氏の黨に結びて深く帝の信任を得、平盧、范陽、河東
 の三節度使を兼ね、土地、財賦、甲兵の權を握りて、陰に異志を
 蓄へしも、唯、李林甫を憚りて發せざりしが、楊國忠の相とな
 るに及び、西紀七百五十五年、玄宗天寶十四年、遂に反し、其部下及奚

契丹の兵十五萬を率ゐて南に下り、河北を風靡して洛陽を
 陥れ、自、大燕皇帝と號す。時に府兵の制廢れ能く賊軍に當
 る者なきを以て、安祿山、官兵を潼關に破り進で長安に向ふ。
 玄宗よりて蜀に奔り遙に位を太子に傳へ、太子は靈武甘肅
 州靈州に即位す、之を肅宗とす。是より先き、平原山東省、
 顏真卿あり、常山直隸省正定府に顏杲卿あり、睢陽河南省歸德府に張巡
 ありて國難に殉じ、山東、江淮の地を濟ふを得たりしが、既に
 して、郭子儀、李光弼等の勤王軍、回紇、西域の援兵來會して官
 軍の勢漸く振へり。而して安祿山は少子を愛して長子慶
 緒の爲に弑せられ、安慶緒も亦其將史思明に弑せられ、史明
 も亦少子の愛に溺れて長子史朝義に弑せられ、賊勢頓に衰
 へしがば、官軍其衰弊に乗じて先づ長安を復し帝及上皇を

史思明

迎へ、次で諸將を遣して賊を討てり。後肅宗没して代宗立
 ち、回紇の援兵を得て雍王造を遣はし諸道の兵を合せて史
 朝義を撃破し洛陽を復す。是に於て賊將李懷仙、史朝義を
 斬りて官軍に降り、八年の内亂此に平ぐ、之を天寶安史の亂
 とす。然も塞外諸國是より唐を輕んじ藩鎮地方に跋扈
 して唐室遂に衰運に傾けり。

第三章 藩鎮宦官の禍 唐末の大亂

初め玄宗、邊要の地に十節度使を置きしが、安史の亂後、内
 地も亦安からざるを以て之を増設して徧く天下に置きし
 より、節度使等各、數州を統へ甲兵、財賦の權を握りて恰も諸
 侯王の如く之を子孫に世襲し、或は士卒自、留後を定むと雖

藩鎮の跋扈

も朝廷之を制する能はずして藩鎮益驕恣なりき。抑、河北の地は安史の賊黨根據の地なるに、代宗は亂を定むるに急にして、賊の降將李懷仙、田承嗣、李寶臣を各、盧龍京魏博大名盧龍の朱滔、淮西河南省汝寧府の李希烈等諸鎮を連ねて叛きしかば、德宗各地の兵を發して之を討たしめんとせしに、涇原の兵、長安を過ぎ其待遇薄きを怒り、朱泚を奉じて亂をなし、德宗、陝西省乾州府天乾州府に出奔せしが、後李晟、渾瑊等の援によりて僅に長安を復するを得たり。憲宗に至り英武にして賢相杜黃裳の議に聽き姑息の策を改め、武元衡、裴度等を遣りて淮西、

宦官の專横

河北の諸鎮を降し始めて藩鎮の横恣を制するを得たり。唐初は宦官の勢微なりしに、玄宗の世に宴遊の盛なるより其數増加して漸く勢を得、肅宗、代宗の二帝、蒙塵の時に機務に與り、德宗に至りて宦官は禁軍を統べて勢彌強、人主の廢立を恣にするのみならず遂に憲宗、敬宗の二帝を弑するに至れり。文宗其專横を患ひ鄭注、李訓等と甘露の變を企て宦官を誅せんこせしも、謀漏れ事成らずして却て宦官の暴威を高め、武宗、宣宗、懿宗、僖宗、昭宗等皆其の擁立する所となれり。是より先き穆宗の時李德裕、李宗閔と隙ありて之を構貶せしより朋黨の争起り、文宗以後李宗閔は牛僧孺と結びて李德裕に當り、互に政權を争ひ、陷擠を事こせしかば、宦官其間に出入して權を專にせり。宣宗の時に至り李

李牛の黨争

德裕、李宗閔、牛僧儒等相前後して貶死し、黨争始めて罷みし、宦官の專横は外、藩鎮の跋扈と共に根底已に深くして、宣宗の英武を以てするも之を抑制する能はざりき。宣宗の没後、唐室の威大に衰へ、懿宗の時、裘甫、龐勛等相次で亂を起せしが、幸にして王式は裘甫の亂を平げ、康承訓は西突厥の別部沙陀の力を借りて、龐勛を平ぐるを得たり。是に於て沙陀の酋長朱邪赤心、功を以て姓名を李國昌と賜はり、振武の節度使となれり。僖宗即位の翌年、王仙芝、兵を山東に起して官軍の爲に敗死せしも、其部將黃巢は餘衆を率ゐて河南、江西、福建の諸州を剽掠し、次で洛陽を陥れ、長安を取りて齊帝と稱せしかば、僖宗出て蜀に奔れり。時に振武の李國昌の子李克用、勇略あり、召に應じ部下を率ゐて黃巢を破り

李克用

朱全忠

其亂を平ぐ。然るに黃巢の將朱溫降りて名を全忠と賜ひ、節度使となりて汴河南省開封府を鎮し、事を以て李克用と隙あり、是より二人遂に相敵視す。僖宗没して昭宗嗣ぎ、宦官を誅せんご欲し、朱全忠が汴に據りて勢あるを見て之を召す。朱全忠乃、長安に入りて宦官を誅し、功を以て梁王となり、帝を挾んで都を洛陽に遷せり。是に於て豪傑、四方に崛起し、皆唐室の復興を名こして相吞噬す。時に朱全忠は昭宗の英氣ありて、恢復の大志あるを憚りしが、今や群雄の唐室を復興するを名こして起るを見て、異變の中より生ぜんことを恐れ、遂に帝を弑し、其子哀帝を擁立し、次で其位を篡へり、之を後梁の太祖となす。唐は高祖より是に至るまで二十世、二百九十年にして亡ぶ、時に西紀九百〇七年醍醐天皇延喜七年なり。

唐亡ぶ

第四章 東方諸國新高羅渤海の盛衰

三國の形勢

南北朝の始め朝鮮半島の三國は高句麗最も強大にして長壽王連に南下して百濟を侵せしかば百濟の蓋鹵王之を防ぎて敗死せしより百濟は都を泗泚忠清道扶餘縣に遷して高句麗の銳鋒を避けぬ。是より先き新羅も亦高句麗を恐れ百濟と同盟して其南下を防ぎしが法興王に至りて新に高句麗と通じ眞興王に至りては却つて百濟を侵し勢に乗じて遂に任那の日本府を陥れて其地を奪ひ次で眞平武烈兩王に至り國力益張る。是に於て百濟は我邦の保護のみを以て安ぜず更に高句麗に後援を求めしに高句麗も亦今や新羅の隆盛を嫉める時なれば直に百濟と連和して之を滅さ

隋の煬帝の東征

んこそせり。時に高句麗は好を陳に通ぜしが會隋興りて陳を滅せしかば高句麗の嬰陽王は隋の更に己を伐たんことを恐れ靺鞨族を率ゐて遼西の地を侵す。隋の文帝怒りて兵三十萬を發し高句麗を征したるも功なくして還りしが煬帝立ちて復大軍を發して遼東に出で平壤を圍みしも城堅くして抜けず師を班して敵の尾撃を受け復大敗す時に西紀六百十一年なり。高句麗是より益強横にして百濟と力を合せ連に新羅を攻めしかば新羅は隋の滅後屢使を發して援を唐に乞ひ唐は璽書を高句麗に與へて新羅と和せしむ。時に高句麗の泉蓋蘇文其王を弑し王の從子高藏を立て威福を弄び亦新羅の朝貢を妨げしかば唐の太宗乃海陸の大軍を起し親遼東に出で白巖城盛京省遼陽州を陥れしが安

市城盛京省蓋平縣を圍むこと六月にして抜けず、加ふるに天寒く糧盡き人馬凍飢し、遂に效を奏せずして師を班す、時に西紀六百四十五年なり。

百濟の滅亡

然るに百濟は高句麗と同盟して連に新羅を侵し、新羅の救を乞ふこと愈急なりしかば、唐の高宗乃蘇定方に兵を授け、山東より海に浮び新羅の武烈王と會して百濟を征せしめ、其都城を陥れて義慈王を降せり。百濟の將福信等我邦に質たる王弟豐璋を迎へて我援兵を乞ひ、且高句麗と結んで恢復を圖る。齊明天皇親舟師を率ゐて筑紫に幸し、阿曇比羅夫等をして百濟を救はしめしが、西紀六百六十三年唐の高宗龍朔三年、天智天皇二年我軍白江江口江錦に敗れ、百濟王豐璋は高句麗に奔りて百濟全く亡ぶ。時に高句麗の泉蓋蘇文は已に没し、三

高句麗の滅亡

新羅の興隆

子、權を争うて國亂れ王制する能はず。唐の高宗よりて李世勣に命じて之を討ち、西紀六百六十八年を以て平壤を陥れ、其王高臧を降し高句麗を滅ぼして安東都護府を置けり。百濟、高句麗の滅亡するや、新羅には武烈王の子文武王位に在り、頻に百濟の故地を蠶食して唐の戍兵を逐ひ、又高句麗の餘衆を使喚して亂を起さしめ、之に乗じて唐の領土を畧し、遂に平壤を陥れしかば、安東都護府は遼東に移れり。然れども唐は中宗以後内訌屢起り力を東方に用ゐること能はざりしを以て、新羅は遂に殆ど朝鮮全土を併有し、加ふるに其君聖德、景德二王は心を民治に注ぎ、亦よく唐に仕へて怠らず、遂に太平を致せり。

渤海の興起

周の肅慎は漢、魏の時に挹婁といひ、南北朝に勿吉と稱し、

渤海の極盛

渤海の滅亡

隋に至りて靺鞨といへり。其粟末水江^{松花}邊に居りしものを粟末部といひて高句麗に屬せしが高句麗の亡ぶるや其部人大祚榮、靺鞨及高句麗の遺民を聚めて高句麗の故地を略定し、次で唐の睿宗の爲に渤海郡王に封ぜられ、是より國號を渤海と改む、時に西紀七百十三年なり。其子武藝、地を平安、咸鏡の二道、吉林、盛京の方面に開き我日本にも通交す。仁秀に至りて國勢益張り、其版圖北は松花江に跨り南は新羅に接し、東は日本海に抵り西は遼河を踰えて契丹に達し、其子曩震の時五京十二府を建て海東の一強國なりしが、其後漸く振はず、遂に五代の時に及び契丹の太祖阿保機に滅さる、實に西紀九百二十六年^{醍醐天皇}延長四年なり。

第五章

西北諸國

突厥回紇吐蕃等

の盛衰

波斯大食の興廢

東突厥

西突厥

唐初東突厥の勢強盛にして頗唐室を輕んじ、始畢可汗の弟頡利可汗の時始畢の子突利可汗と共に屢邊に入寇せしかば、太宗之を患ひて離間策を施し兩可汗互に相争ふに至りしより、東突厥の諸部分裂して兵勢漸く振はず。特に頡利は中國奢侈の風を模し、又多年の戦争により羈縻の諸部に徵發を強ひしかば、之を怨みて鐵勒諸部先づ叛く。唐の太宗之に乗じ李世勣、李靖に命じ鐵勒の薛延陀部と東突厥を夾み撃ちて頡利を擒にす。是に於て東突厥全く分崩し其故地は悉く鐵勒諸部の手に歸せり。此時西突厥は達頭

可汗の孫射匱可汗、玉門關甘肅省安西州燉煌縣以西の諸國を従へ、其弟統葉護可汗繼ぎ波斯を破りて羈縻州となし、國勢最も熾なりしが、幾ならず其諸父阿史那莫賀咄に弑せらるゝに及んで大に亂る。後沙鉢羅可汗悉く其地を平定し、勢再び強盛にして屢唐に入寇せしかば、高宗、蘇定方等を遣はして沙鉢羅を擒にす。是より西突厥、唐に歸服せしが、後其餘衆復吐蕃に應じて起り屢天山南路の地を擾りしかば、高宗、斐行儉に命じ急に兵を發して之を襲ひ悉く其地を平定せり、時に西紀六百七十九年なり。

鐵勒は即高車にして漢の下零の後なり、漠北に散居して、部族甚多く、就中薛延陀、回紇の二部尤強し。回紇は獨樂水外蒙古土拉河上に居り、薛延陀は其南に居る、回紇は後の所謂回鶻

薛延陀

回紇

なり。唐初薛延陀の部長夷男真珠毘加可汗、回紇の部長菩薩共に東突厥を滅ぼして雄を漠北に稱せしが、太宗の末年に至り夷男死して薛延陀亂るゝに及び、時の回紇の部長吐迷度之を破り悉く鐵勒の諸部を併せて唐に歸服す。後其部長斐羅は唐の玄宗の冊封を受けて懷仁可汗と號し、其版圖東は黑龍江沿岸より西アルタイ山麓に至りて悉く東突厥の故地を掩有しぬ。安史の亂後唐室の漸く衰ふるに及びては、婚を通じ金帛を收めて其後援をなし一時頗る強盛を極めしも、後吐蕃の侵畧を蒙りて漸く衰へ、次で黠戛斯ガズガズの破る所となり、餘衆天山南路に走り若しくは河西に遁れて其國殆ど敗亡せり。黠戛斯は古の堅昆にして唐初の結骨なり、もと回紇の西北に當り仙娥河外蒙古色楞格河の沿岸に居りしが、

黠戛斯

西紀八百三十年の頃其部長阿熱自可汗と號し、回紇の衰弊に乗じ連、之を破りて其地を奪ひ、次で唐の冊封を受けて誠明可汗となれり。然れども其後頗る振はず遂に強國をなすに至らざりき。

吐蕃

吐蕃は圖伯特種なり、も吐谷渾に臣たりしが、唐の太宗の世其君棄宗弄贊篤く佛教を信じて佛典を印度に求め、意を政、刑、治術に用ゐるゝ共に地を外に拓き、南の方阿撒母泥婆羅を征し、東の方吐谷渾、黨項を侵す。時に太宗既に吐谷渾、黨項を降して青海一帯の地、唐の藩屏たりしかば、吐蕃と兵を交へて之に勝ち其降和を納れて公主を弄贊に與へぬ。吐蕃是より唐の文物制度を模し、唐は吐蕃によりて中印度に通ずるを得たり。かくて吐蕃の勢益強大にして悉く天

大食の勃興

山南路地方を併呑し、後唐に安史の亂あるに乗じて河西、隴西の地を奪ひ、次で代宗の時其兵遂に長安に侵入して郭子儀の爲に擊卻されしも、爾後唐に内難ある毎に屢、高昌、回紇等と連結して陝西、四川の地に入寇せしが、後其部下沙陀種族及南詔ともに叛きて唐に通ぜしより吐蕃の國勢漸く振はず、次で南詔の興隆と共に益、衰微せり。
是より先き西紀五百七十年陳の宣帝 大建二年亞刺比亞の默加に摩訶末出で、自、豫言者と號し猶太、基督二教を參酌して新宗教を唱へ、經典を左にし利劍を右にし干戈を執て教を四方に布く。其繼嗣者哈利發オームアルに及び西の方、東羅馬を侵すと共に東の方波斯を伐ちしかば、波斯王伊嗣俟防戦して利あらず退きて僅に呼羅珊を保てり。是に於て哈利發

オスマン西紀六百五十一年唐の高宗永徽二年始めて好を唐に通ず。



摩訶末

波斯朝の滅亡

所謂大食國是なり。西紀六百六十一年唐の高宗龍朔元年伊嗣俟の子卑路斯遂に國を以て唐に降りしかばサ、ン朝此に亡び、

回教の傳播

唐は波斯都護府を設け卑路斯を以て其都督に任じたれども、其地は摩訶末教徒の占領する所となれり。大食已に西方亞細亞を統一し、更に東に進みてアム河以北の地を畧し、次で唐の内亂に乗じ葱嶺を踰えて于闐を陥れ、將に支那に侵入せんとして軍を班せしが、南に向ひては屢印度を侵してパンジマブの地を略せり。是に於て中央亞細亞及天山南路に於ける佛教漸次衰微して摩訶末の新教之に代はれり、支那に所謂回教是なり。

中古の印度

是より先き印度は南北朝の中頃北印度烏菴に毗訖羅摩迭多大王出で、西北中の三印度を併せて盛に文學を獎勵し、次で隋唐の際尸羅阿迭多王戒日二世出で、羯若鞠闍城女に據り全印度に號令して國運隆盛に赴けり。尸羅阿迭多二世

婆羅門教の興隆

も亦大に文學、佛敎を興隆し、唐の太宗の時支那に通じて爾後兩國の間に使者の來往絶はざりき。然るに王の没後印度復分裂せるに乗じ、ラシアプト種族西印度より起りて再び之を統一するに及び、婆羅門教徒漸く其勢力を恢復し、更に溫都教を起して佛敎を排撃せし、かば佛敎遂に痕を印度に斂め溫都教代りて印度の國教となれり。

第六章 漢唐の儒學 文藝

春秋戰國の世、社會の秩序崩壞して言論の束縛解け、諸子、百家の雜説起り互に論駁して底止する所を知らざりしに、秦の時に及び學者の横議を患ひ、書を燔き儒を坑にして黎首を愚にす。漢起りて惠帝は挾書の禁を解きしも、黃老、申

前漢の儒學

韓の雜説盛にして儒道未だ起らず。文帝、景帝に至り儒學の絶えたるを起すの意ありて、先代の老儒を徵して博士と爲し頗る儒者を優待し、楚の元王は多く老儒を養ひ、河間の獻王、魯の恭王は先世の經典を民間に探りて經學の材を後世に遺せり。武帝の世、衛綰、田蚡相次で相となり、共に黃老、申、韓の雜説を排して儒術を尊び、公孫弘、董仲舒は春秋を以て出身し、帝亦大學を興し五經博士を置きしより天下靡然として儒學に向ひ、學者各一家の説を立て五經の討議、諸傳の論駁盛にして、其弊は同門に黨して他派を排し、後の朋黨の端緒を啓きたれども、儒學の根底を確立したるは實に此時にありて、劉向父子の如きは興りて力ありといふべし。

王氏の篡立の時は士大夫の山野に遁るゝ者多かりしが、

後漢の儒學

漢室中興してより前代の儒者復出仕し、大學再興り、光武帝の都を洛陽に遷すや書籍二千餘輛を長安より運びたりといふ。而して學者、古典の意義を講究し、註釋を作るもの多し。就中鄭玄は孟子以後の大儒と稱せられ、其三禮、詩、書、易の註釋最も精細を極めたり。章帝の世、諸儒を會して經書の異同を論じて白虎通を定め、桓帝の世に大學の學生三萬人に超へたりしが、其儒籍に上るものは萬人に過ぎずして、經義研究し盡くして、儒風衰へ、詩賦、文章漸く發達せり。殊に後漢は學閥、朋黨の争盛にして遂に黨人の禍起れり。

三國の時、魏の王肅は簡約、華美の學風を起して鄭玄の敦厚、深遠の學説と對立し、何晏出て老莊の意義を以て經書を解釋して清談の基を啓く。兩晋の際に及びては儒學大に

三國六朝の經學

隋唐の儒學

衰へて詩賦、文章大に流行せしが、胡人は久しく中國の文明に浴して却つて實用の學を好み、劉淵、慕容皝は經史を尙び、符堅は大學を起し、姚興は常に經籍を講じぬ。南北朝に至りて、北方の經學は古義によりて鄭玄の説を奉じ、南方は王肅の説を祖述せしも、一般に文華盛にして實學衰へたり。然るに隋の文帝、天下を統一して古典、珍籍を蒐め、州郡に學校を設けて南北兩派の學を併せ取りしかば、劉焯、劉絃の徒は博覽、多識を以て名を成し、龍門の王通は河洛の間に徒を集めて自一家言を爲す。次で唐の太宗は大に學事を獎勵し、長安に國子學、大學、弘文館、崇文館等を設け、府、州、縣に各學校を建て秀才、進士等の諸科を以て登庸の法を定め、儒學の盛なる漢、魏、晋を凌駕せり。然れども古來の經義區々紛々

適從する所なきを以て、孔穎達、顏師古等命を奉じて五經正義を撰定せしより、經學は所謂訓詁、註疏の弊に陥り、學者皆正義の定説を墨守して殆ど新説を出す者無く、安史の亂以後は學術愈廢頽し、獨り韓愈の經學者を以て稱せらるゝありしも、高遠なる思想は遂に老佛の徒に歸したり。

支那古代の文章は語短く意長く簡古雄勁なりしが、周末より秦に及びて漸く華麗に流れ、漢に至りて長足の進歩を爲し、司馬相如、司馬遷、楊雄、劉向の四大家を出し、特に賈誼の文に至りては理論精確、筆力雄渾、實に漢代第一たり。然も政學共に尙古の風なれば、文章も多く古文に模したりしが、此等の古文に對して淮南王安、梁の孝王の如き詞賦、文章を好める諸王の下に、玉褒、鄒陽、枚乘等の佳麗、華美の文行はれ、

漢の文章

六朝の文體

後漢には班固、蔡邕の徒ありしも、文章は益纖弱、縹麗に流れたり。三國には魏に曹植、王粲、劉楨以下、建安の七子出て輕美、纖巧の文を作りて天下を風靡し、蜀の諸葛亮の謹嚴、眞率の文の如きは甚だ希なり。六朝に及びては所謂四六駢儷體盛に起る。即、晋に陸機、潘岳、張華、陶淵明あり、就中淵明の歸去來賦は南北の絶唱と稱せらる。南北朝は晋に比して稍遜色あるも尙宋に謝靈運、范曄、鮑照あり、南齊に謝朓、任昉、孔稚等あり、梁に蕭明太子出て文選を撰び、沈約は四聲の音韻を別ち又四六體を創め、庾信の文章は南北に冠たり。然も是より北朝は文辭の盛莫く、江南は遂に詞賦の地となれり。

唐の文章

唐初の文章はなほ六朝の餘風を承けて王勃、楊炯、盧照隣、

駱賓王は駢儷文の四大家なりしが、陳子昂出づるに及び文章の衰頹を恢復せんとして果さず。韓愈出て精嚴雄渾の文を作り八代の衰を興し周漢の醇に復し、柳宗元も亦沈痛雄健の文を以て韓愈と並稱せられ、李翱、皇甫湜、孫樵、杜牧、皮日休、陸龜蒙等と共に古文を以て鳴り、支那文章に一新時期を畫したりき。然も唐に於て最も精妙を極めたるものは詩なり。

三代の詩は眞率簡朴の風ありしも、周室衰へて天下亂るるや慷慨の風を帯び來り、漢に至り五言、七言の詩及び樂器に載せて謠歌する、樂府體起れり。三國には魏の初め宗室皆詩文に長じ、建安の七子の如きは巧麗綺靡の詩を善くし、晋に至ては謝靈運、陶淵明の如き名家出づ。梁の沈約の四

唐の詩

聲の別を論じ音韻の學を擧めてより詩道大に開け、隋を経て唐に至り詩賦其盛を極めたり。唐初、沈佺期、宋之問は律を作り、次で陳子昂は古詩を作り直に詩經、離騷に模せんことを求めたりしが、李白の豪放飄逸なる、杜子美の沈痛雄健なる詩出てより唐詩千古に超絶せり。其他、王維、孟浩然、韋應物、岑參、高適、柳子厚、白居易等の名家皆一方に雄視して盛中二唐の詩壇に雄飛し、晚唐には杜牧、李商隱、温廷均、韓偓等ありしも唐の衰ふるや詩も亦從て衰へたり。

第七章 佛教道教 祇教景教の東流

南海の貿易

漢代に東流せし佛教は魏、晋以後、黄老の學の流行に伴ひ、

魏晋南北朝の佛教

佛教道教 祇教景教の東流 南海の貿易

其旨義の稍相似たるを以て漸次勢力を得、印度及中央亞細亞の佛教徒の天山南路又は南海諸國を経て來るもの頗多

宇文トツリクスンサ
इश्वर इत्थं जगददयत यत् स्वमद्वितीय
तनयं प्रादरात् यतो यः कश्चित् तस्मिन्
विश्रंसिष्यति सोऽविनाश्यः सन् अतस्तायुः

宇文リバ
ကညာဝံသဒ္ဓဟူ၍ ဘဗ္ဗေ အဝိဇာသေဝော
အနိဝိတိဝံသသိဝံ အေဝါ သကေကဋ္ဌာဝ
ဝူဝူ အဗ္ဗာ ဝောကဗ္ဗေကဝေယံ။

宇文藏西
रगोरमर्क्या योसात्रैरु सुसा यथिया
यो सुक्या यो र्मसा र्मसा र्मसा र्मसा
यामर्हयसा र्मसा र्मसा र्मसा र्मसा

の符堅、後秦の姚興、宋の文帝、梁の武帝、後魏の宣武帝等歴代の帝王多く之に歸依して有力なる保護を與へたるのみを

く、佛圖澄、鳩摩羅什、菩提達磨等何れも皆身を宣教、譯經に委ねて佛教の傳播を圖り、趙の石勒、秦

らず、僧侶の印度に法を求むる者尠からず。就中、東晋の末には法顯、印度に入り、錫蘭に赴き、後魏の末年には宋雲、惠生、梵經を北印度に求めき。

かくて佛教の隆盛は分派を生じ、宋朝には毗曇、律、成實、三論、涅槃の諸宗起り、梁朝には地論、淨土、禪入り、陳隋には華嚴、天台、攝論の三宗出で、天台の智顛、禪の慧可、三論の吉藏、華嚴の杜順、涅槃の慧遠、等碩學、高德の名僧、智識相踵で出づ。唐朝に於ては法藏、華嚴宗を擴張し、玄奘新に法相宗を開き、善無畏、金剛智、不空は眞言秘密の法を傳へ、律、三論、淨土、禪、天台と通じて所謂佛教の八宗を爲す。就中玄奘が十七年の艱苦を嘗め、葱嶺を超えて印度に入り、百餘國を歴て遍く名師、聖跡を探り、西紀六百四十九年、唐の太宗貞觀二十三年、六百餘部の經典

唐の佛教

を齋して國に歸り新譯佛經を成せしは實に敎界の偉績なり。後義淨も亦經典を印度に求め卅餘國に遊び、二十五年を経て西紀六百九十五年唐の中宗十二年四百部の經を得て歸れり。是より佛像、塔堂の建設益多く、僧尼の數愈々滋く、文宗の世には寺四萬、僧尼七十餘萬人に達し、佛敎の隆盛此に極まりしが、武宗立つに及び厚く道教を信じ、大に佛徒を虐遇し、寺院を毀ち僧尼を逐ふ。此より先き、南北朝の時後魏の、太武帝、北周の武帝ともに佛徒を虐遇し、是より後五代の時周の世宗大に佛敎を抑壓せしかば、武宗の厄に通じて佛敎三武一宗の難といへり。

道教

莊列二子は老子を祖述し且神仙を説くこと多きを以て、後漢の末に張陵、黃老の道に托して神仙の術を説き始めて

道書を作り、其孫張魯は蜀に據り符水禁厭を以て此道を擴む。晋の時葛洪出て道書に類するもの著はし、次で南齊に顧歡、梁に陶弘景ありて皆道教を唱へ、後魏の道武帝は、仙人博士を置き、明元帝は道士冠謙之を尊信して天師道場を設け、太武帝は謙之に聽きて悉く沙門を誅戮し、是より道、佛の二敎、頡頏衝突を始め、周の武帝が道士を信用するや二敎亦抗爭せしが、唐天下を得るに及びて老子の姓李にして帝室の姓と同じきを以て、道士等附會して老子を國祖となし廟を造り尊號を上り、道德經を天下に頒ち、崇玄館に道學を講じ、道士は往々高位顯官を得、武宗の時に及び道教遂に佛敎を壓倒し去れり。

祇教

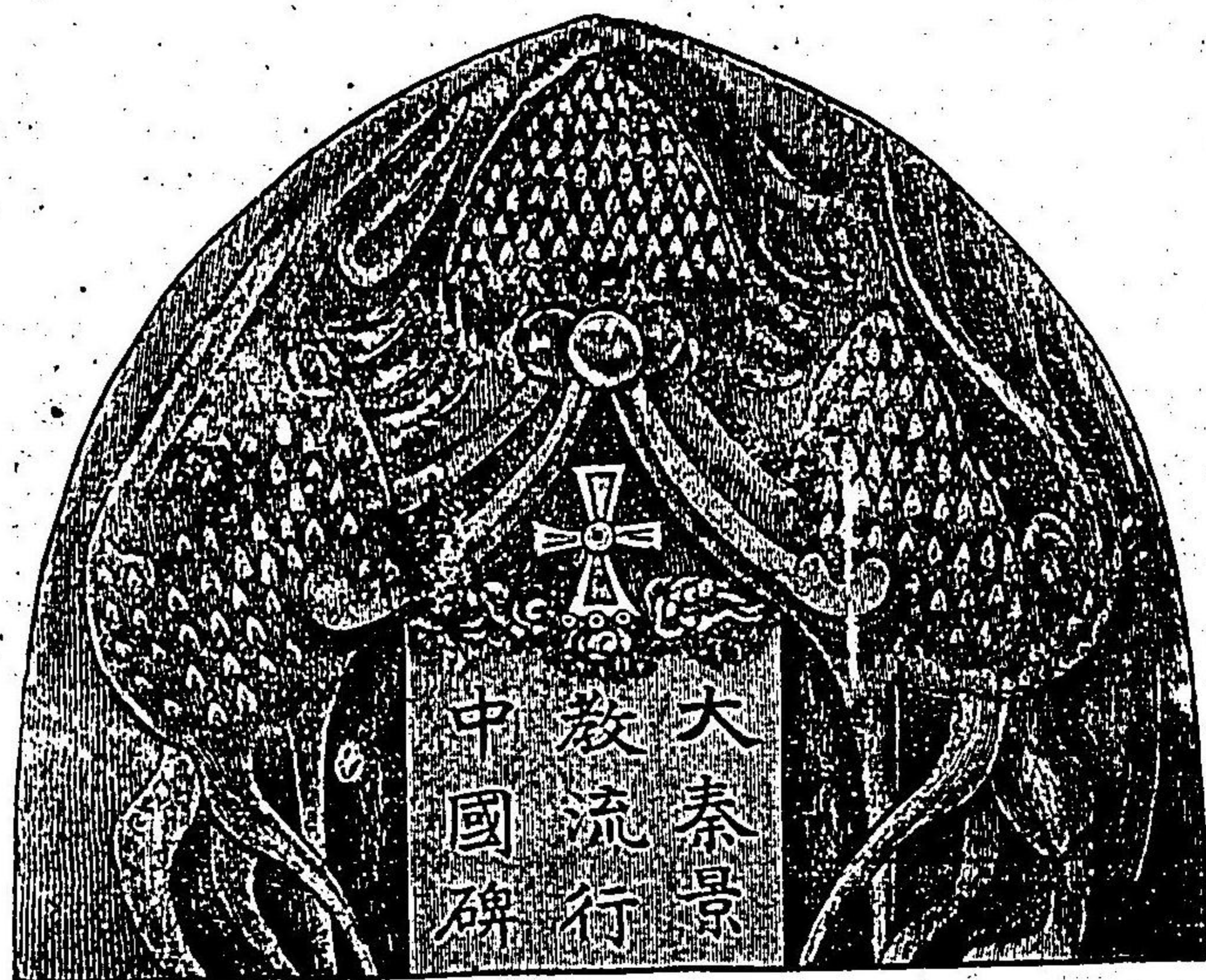
太古バクトリアにゾロアストル出て一宗教を創め、清淨

至善の本たる陽神ソールと汚穢至惡の源たる陰神アリスを立て、火を以て陽神を表し之を崇拜せしむ、拜火教是なり、又天日を拜するが故に支那に之を祆教ゾロアスターといふ。其教はもと波斯に行はれしが、大食、波斯を滅ぼして祆教徒を虐待刻遇せしかば、其徒東に奔りしより其教は遂に葱嶺を超えて支那に入る。唐の太宗爲めに祆寺を長安に建て、祆正以下の教職を置き、て其布教を許せり。後玄宗の世一たび之を排斥せしむ、なほ唐一代は盛に行はれしが後廢れて復行はれず。

支那南北朝の初期に當り、東羅馬の基督教徒、ネストル新義を唱へて西方亞細亞に謫せられ、波斯王の尊信を得て其教を布く。西紀六百三十六年唐の太宗貞觀十年波斯人阿羅本アロバ其經典を齎して長安に至りしかば、唐の太宗、房玄齡をして之を、

景教

迎へしめ、其教義の光輝發揚の義をこりて景教キリシタンと名け、波斯



景教の碑

寺を造り後大秦寺と改め、經を譯し僧を度して之を信ぜり。高宗も亦諸州に景寺を置き、後郭子儀の如きも之に歸依して地を捨て寺を創むるに至り景教頗る流行し、徳宗の時長安の大秦寺の僧景浄、大秦景教流行中國碑を建つ。然る

に武宗位に即き道教を尊信して他の諸宗教を禁遏するに

南海の貿易

及び景教も亦厄に遭ふ。後宣宗の世其禁を解かれしも漸く衰微して遂に廢絶に歸せり。

後漢の桓帝の世太秦始めて支那に通じ、三國、晋の際日南交趾は東西貿易の地となりしが、晋室衰へて中國亂れ、賄賂重税行はれて往來杜絶し、交易一時衰微せり。然るに佛教の東漸と共に支那南海の海運發達し、瓜哇、蘇門答刺より錫蘭に至る航路は支那人の手に歸せしかば、隋唐の際に及び、て南海貿易の廢絶を恢復し、其商船は更に進で西印度海岸に沿うて波斯灣に入り、遙に西して紅海に達せしが、此時大食、波斯に代りて東方の航路を擴張し、支那南海に通商して、廣東、福建、杭、江諸州の沿海に至る阿刺比亞人萬を以て數ふ可く、悉く亞細亞南海の航海權を專有せり。唐乃提舉市舶

を南海の諸港に置き、海關税を徵して富源を作り、南海の貿易頗る盛大を極めたり。然も其後、唐室は衰運に向ひ内亂相踵ぎて起り、太食も國勢漸く振はざるに及び東西の交通も次第に稀に貿易も從つて廢頽するに至れり。

第八章 五代 宋の初世

梁

後唐

西紀九百七年朱全忠唐室を篡うて大梁河南省開封府に帝を稱せしも、其地は僅に黃河沿岸の一片土に過ぎずして天下は吳、楚、吳越、閩、南漢、南平、蜀、岐、燕、晋等の諸國に分裂せり。就中晋王李克用は舊怨を抱きて屢、梁を侵し、其子李存勗は燕を滅ぼし勢に乗じて西紀九百二十三年遂に大梁を陥れ、全忠の子末帝を降し帝位に洛陽に上りて後唐の莊宗となり、次

て岐を降し蜀を併せて殆ど江北を掩有し、吳楚、吳越の朝貢を受くるに至り、漸く驕恣にして宴樂に耽りしかば、將士怨望して王族李嗣源を奉じ叛きて大梁に據る。莊宗之を征せんとして途に反者の手に斃れ、李嗣源、洛湯に入りて帝位に即く、明宗是なり。時に孟知祥、此内亂に乗じ四川を畧し成都に據りて後蜀と稱しぬ。明宗の後閔帝に至り、李從珂、帝を逐ひて自立し、次で石敬瑭の威名を忌み之を晋陽に圍みしが、石敬瑭は契丹の援を得て唐兵を破り、西紀九百三十六年洛陽を陥れて太梁に即位す、後晋の高祖是なり。是より先き、通古斯族の一派契丹人は内蒙古東部一帯の地を占領して隋唐に歸服せしが、唐の衰ふるに乗じて獨立し、次で西紀九百七年耶律阿保機の諸部を統領するに及ん

契丹即遼の興起

で國勢益々興隆し、遂に西紀九百十六年に至り阿保機自、皇帝と稱す、之を契丹の太祖とす。是に於て太祖は四隣の征服に従ひ、北は室韋、女眞の諸部を侵し、西は回紇、吐谷渾、黨項を降し、東は渤海國を滅し、吐蕃、新羅の朝貢を受けて勢頓に強大となれり。太祖没して太宗立ち、石敬瑭を援けて唐を滅せしが、尙南下して支那を侵畧するの機を待てり。晋の起るは主として契丹の力に依るを以て、高祖は東北十六州を割きて之に酬い、毎歲金帛三十萬を贈りて臣と稱せしに、出帝立つに及んで禮を失ひしかば、契丹の太宗怒りて西紀九百四十七年大舉南下して大梁を陥れ、出帝を擒にし、黄河の南北を定めて國を遼と號す。然れども中國の人民、遼人の剽掠を憤りて服せざりしかば、太宗遂に守兵を留

漢 周

めて北に歸りしが途に没し、世宗立ちて臨潢内蒙古に歸れり。是に於て晋の舊將劉知遠、遼の守兵を攘ひ帝位に即く、之を漢後の高祖となす。高祖の子隱帝多く宿將を忌み殺せしかば鄴都の鎮將郭威衆に推されて叛し、遂に大梁に入りて帝位に即く、之を後周の太祖となす。時に西紀九百五十一年なり。是より先き隱帝の叔父劉崇、大原を守りしが、是に至りて河東に北漢國を立て、遼、南唐、後蜀と連和して周に當る。時に周の太祖の子世宗立ちて英資大略あり、北漢の兵を逆撃して之を破り、次で後蜀を略し、南唐を伐ち、亦北の方遼を征し、勢に乗じて天下を統一せんとせしが、偶病んで没し、子恭帝幼なるを以て將士等遂に趙匡胤を擁立して周の禪を受けしむ、之を宋の太祖となす。時に西紀九百六十年上村

天皇天 德四年 なり。唐の滅亡以來群雄割據して帝王を稱する者多きも、就中梁、唐、晋、漢、周の五朝は中原に隆替繼承せしを以て之を五代と稱す。

宋の太祖

宋の太祖は宰相趙普の策を用ひ、宿將功臣に諭して節度使を罷めしめ、文臣を以て之に補ひ、州郡に通判を置きて武臣民政の權を抑へ、各地に轉運使を設けて地方の財政を掌らしめ、以て唐末以來藩鎮跋扈の勢を削り、諸道の精兵を選びて禁軍となし、中央、地方の兵數を相當らしめぬ。かくて太祖は民治、兵馬、財政の三權を收めて内治の革新を爲し、然る後外に向ひ不廷を討じ、南唐、荆南、後蜀、南漢、吳越の諸國を討滅して悉く南方の地を定む。然も北方には猶北漢及遼ありしが、太祖没して太宗立ち、其志を紹ぎ遂に北漢を滅ぼ

宋遼の交



宋の太祖

して天下を統一し、勢に乗じて遼の南邊を侵せり、實に西紀九百七十九年なり。時に遼は太宗の後二帝を経て景宗、位にありしが、大に宋軍を高梁河北京の西に破り、進んで瓦橋關直隸省保定府を圍む。是より後兩國の平和破れて河北の地、南北交戦の區となること二十五年、遼兵常に強くして宋之を患ふ。遼は景宗の子聖宗の時耶律休哥、專、宋に當り宋將曹彬を岐溝關直隸省順天府涿州に破り、亦高麗女眞を威服し、次で聖宗、大舉南下して宋を侵す。是に於て宋の丞相寇準、眞宗を奉じて澶州直隸省大名府に至り撃て之を却けしが、遂に和を媾じて宋、遼兄弟と稱す。

宋夏の關係

歳幣數十萬を遼に贈ること約して各兵を收む、時に西紀千四年なり。此間西夏新に國を建て、頗る宋の西邊を窺ふ。西夏は黨項の後にして、圖伯特族なり。唐末黃巢の亂に黨項の部酋拓跋思恭入援し、功を以て夏國公に封せられて姓を李と賜ひ、其子孫世、夏州鄂爾多斯の南部に據り、近傍の諸州を統ぶ。李繼棒に至り宋の太宗の時始めて入朝せしが、其弟李繼遷、遼に降りて夏王に封せられ、屢、宋を侵し、其子李德明は姑く宋と遼とに臣事せり。李德明の子李元昊雄才大畧あり、回紇を伐ちて河西を取り、興慶甘肅省寧夏府に都して大夏皇帝と號し、遂に其鋒を東して宋の邊境に逼る。宋は眞宗の子仁宗位にあり、諸將を遣りて之を防がしめ、互に勝敗あり、是より陝西の地永く兵馬の區となれり。時に遼の聖宗已に没して

興宗嗣ぎ、宋、夏の攻争に乗じ南下の勢を示して宋の歳幣銀帛を得、次で宋、夏の間を調停して夏は宋より歳幣及封冊を受け、臣禮を執るを約して和成る、實に西紀千四十三年なり。

第九章 神宗の新法 哲宗の改復

徽宗の紹述

宋は仁宗没して嗣なく太宗の曾孫英宗、大統を継ぎ、其子神宗位に即くに及び、年少氣鋭、國威を外に張らんと欲せしも、太宗以來外國に屈辱せられて贈與の歳幣多く財政頗る困弊を極めしかば、王安石を擧げて富國強兵の策を講せしむ。安石よりて青苗、募役、市易、保甲、保馬等の諸新法を制す。保甲は十家一保の民兵制度、保馬は官馬貸與の法、募役は服役

神宗の治世

王安石の新法

の義務に代ゆるに税を以てし無職の民を募りて役に充つる法、市易は市場に賣れざる物品を官にて購求交易し資金を商買に貸して利を納むる法、青苗は春、官錢を農民に貸與し秋に至りて二割或は三割の息を附して還納せしむる法なり。其目的、國庫充實にありしを以て人民は之を喜ばず、歐陽修、司馬光以下の朝臣は祖宗の遺制に違ふを難じ、程顥、程頤等の學者は先王の政を壞るを議し、皆ともに新法を排斥せしが、王安石は剛愎固執にして悉く此等の保守派を退け、韓絳、呂惠卿等と共に新法を斷行せり。

神宗没し子哲宗嗣ぎて年尙幼なりしかば、高太后朝に臨んで政を攝す。太后は新法の弊害を察し、司馬光を任用し、呂公著と力を合せて悉く新法を罷めしめ、呂惠卿、蔡確等を

元祐の更代

△紹聖の紹述

黜け文彦博、程頤、蘇軾等の舊法黨を任用す、之を元祐の更代といひ、新舊法黨の争に於ける第一變にして、時人太后を稱して女中の堯舜といへり。然るに幾もなくして司馬光、高太后と相次で没するや、朝廷復黨争起り、朝臣は洛川、蜀の三黨に分裂して相凌軋せしかば、章惇、呂惠卿、蔡京、蔡卞等の新法黨其機に乗じて再び黨勢を恢復し、漸次新法を復舊し、次で悉く元祐の諸臣を貶して司馬光、呂公著等の諡號を追奪し、政局こゝに再變せり、所謂紹聖の紹述是なり。

哲宗没して徽宗位を承くるや、向太后朝に臨み、韓琦の子韓忠彦及曾布等を用ゐて、章惇、蔡京等の新法黨を罷め、司馬光等の官を追復し、元祐紹聖の二政を折衷し、太后至正を以て國政に當らんと誓ひ、年號を建中靖國と改む、之を政局の

建中靖國

△徽宗の紹述

第三變となす。然れども曾布はもろと章惇の下に出でしを以て、久しからずして韓忠彦と隙を生じ、徽宗の意を迎へて紹述に傾き、漸次元祐舊法の黨を排除して蔡京を勧めしに、幾ならずして韓忠彦、曾布は共に罷められ、蔡京は新法黨の首領として相位に上り、紹述に托して天子を箝制し、王安石を追尊して孔子に配享し、司馬光以下元祐の諸臣を姦黨と呼び、端禮門外に黨人の碑を立て、舊法黨の子弟の入京を禁止せり、之を政局の第四變となす。爾後蔡京永く相位を占め、紹述の名に假托して益、財利の政を行ひ、擅に官制を革め、子弟を引き、朝に列し、權勢一世に振ひ、帝に勸むるに奢侈を以てし、頻りに土木を興し、奇珍を致し、人民の疾苦を顧みず。是を以て宋の國運日に非にして、遂に金兵の南進に遭ひ、南

渡の已むを得ざるに至れり。

第十章 遼金の興廢 高麗の盛衰

唐初新羅は朝鮮半島を統一して國運甚昌なりしが後漸く衰へ眞聖女王に至りて佞人を寵して政紊れ盜賊蜂起す。就中甄萱は完山全州府に據りて後百濟を建て王建は松嶽京畿道に據りて高麗を建て契丹に逐はれし勃海の遺民を納れ新羅後百濟と新に三國鼎立の形勢をなす。就中後百濟最強大にして遂に新羅を攻めて其國都を陥れしかば新羅の敬順王出て高麗に降る。高麗の王建之を納れ後百濟と戦ひて其主を降し西紀九百三十七年を以て遂に朝鮮半島を一統せり之を高麗の太祖となす。恰も此時後晋の高

高麗の一統

遼高麗の關係

祖後唐に代りて位に即きしかば高麗の太祖使を遣はして之に通じ爾後五代の正朔を奉じて宋朝に及べり。太祖の孫成宗の世遼の聖宗高麗の宋に通ずるを怒りて來り伐ちしかば成宗援を宋に請ひしも宋の應ぜざるに及んで遂に宋と絶ちて遼の封冊を受けたり。成宗没して穆宗立ち康兆之を弑して顯宗を立てしに遼の聖宗問罪の師を發し自兵を提げて來り康兆を誅して國都開京京畿道を陥れ顯宗をして親入朝せしめんさせしに従はず更に六州の地を索めしに顯宗復之を拒みしかば遼兵連に入寇し顯宗も亦屢之を破りたれども遂に對抗し難きを見て西紀千十九年貢を納れて臣と稱せり。

遼は宋の太宗を屈し歲幣を納れしめて國勢益興隆し聖

遼の衰運

遼金の興廢

宗の子興宗亦善く先世の遺業を守り、道宗に至り再と宋と境界を議定し新に百餘里の地を收めて國威益振ひたりしも、耶律乙辛を親任してより賢良朝を去りて羈屬漸く畔き加ふるに黨項は命を奉ぜず西夏は邊に寇して國運遂に傾き、次で道宗の孫天祚其後を承け淫虐にして國政益亂る。此時に當り女眞の阿骨打、黑龍江上より起りて連、遼兵を破りて勢猖獗を極む。阿骨打の先は黑龍江上の黑水靺鞨にして始め渤海國に屬隸せしが、遼の太祖渤海を滅ぼすに及んで、其混同江江松花南に在る者は遼に屬して熟女眞といひ、江北の者は唯其羈縻を受け版籍に入らずして生女眞といへり。宋の仁宗の頃、按出虎水阿勒楚喀河附近の生女眞の完顔部長烏古廼、遼の生女眞節度使となる、阿骨打は其孫にして

金の勃興

遼の滅亡

遂に生女眞を以て遼に叛き、混同江附近の諸部を定めて西紀千百十五年帝位に登る金の太祖是なり。次で遼の天祚帝、混同江に戦ひて之を破り、熟女眞を降し、遼の東京府遼陽を陥れ進んで上京府臨潢に逼れり。時に宋の蔡京は邊功を立て、徽宗の信任を厚くせんと欲し、連に外征の師を出し、童貫は吐蕃を撃ちし勢に乗じ、遼の亡臣馬植の言に聽き、金に遼を夾撃するの議を建てしかば、徽宗之に聽き、使節を金に遣はして好を通じ、宋は南より遼の南京府幽都を取り、金は北より遼の中京府大定を陥れて其地を分ち、從來遼に贈りし歳幣を金に與へんことを約す。金の太祖乃約に従ひ兵を進めて遼の上京及び中京を取り、天祚帝を逐うて遂に西京大同府を陥れたり。時に宋の童貫、蔡攸等大軍を率ゐて北進せ

遼金の興廢

しも、屢、遼軍に破られて南京を下す能はず、密に援を金に請ひしかば、太祖之に應じ直に居庸關直隸省順天府より入りて南京を陥れしが、宋の出師の期を失ひ、且、南京を下す能はざりしを以て前約を渝へんことを求む、宋已むを得ずして其意に従ひ、既定の歳幣の外に錢百萬緡、糧廿萬を増すを約し、僅に南京及其附近の六州を得たり。次で金の太祖没して弟太宗立ち、陰山以南の地を割き西夏に與へて遼の天祚帝を納る、勿らしめ、連、に之を逐うて其黨項に奔らんとするを捕ふ、遼は建國より此に至るまで二百十年にして亡ぶ、時に西紀千百二十五年なり。

高麗と金との關係

是より先き高麗は徳宗、仁宗を経て皆竊に宋に通ず、雖も表面常に遼の封冊を受けて國運を保持せしが、此に至り

て金に事ふ。然るに後武臣亂をなして其王を弑し、明宗を擁立して金に告げしに、金之を許せしより、高麗は權臣廢立のこゝ屢起りて國勢漸く衰へたり。

第十一章 宋金の交渉

金宋を侵す

遼滅びて後金は宋を輕んじ、頻に南下の策を講じ、宋が金の叛將、遼の遺臣を納れ、且、所約の糧を輸せざるを名とし、金の宗族粘沒喝、幹離不は宋を伐ちて汴京に逼る。宋の徽宗急に位を避けて勤王の師を徵し、欽宗位を承けて都を南に遷し、金人を避けんこせしに、李綱之を諫め、汴京を死守し、主戰説を唱へしも、滿朝皆媾和の利をいひしかば、欽宗遂に三鎮の地を割き、犒師料を輸せんことを約して、金兵を退け、李

宋室の南渡

綱等の言を用るずして勤王の師を寵む。然るに三鎮の地、金に入らざりしかば、金の太宗大に怒りて復、南征の師を遣り、遂に汴京を陥れ、欽宗及徽宗を執へて北に歸る。實に西紀千百二十七年なり。是に於て欽宗の弟高宗位に即き、金人の鋒を避けて、都を揚州江蘇省揚州府に遷す。故に之より後を南宋といふ。時に金の太宗は河東、河北、河南、關中、江淮の地を得て、宋の降臣劉豫を立て、齊帝となし、是によりて漢人の心を懷け、諸將を遣はし、長驅して、揚州に逼りしかば、高宗、難を杭州浙江省杭州府に避け、次で温州浙江省温州府に奔る。時に岳飛、韓世忠等よく金人を防ぎ、且、太宗の疾篤きを以て、金兵引き還りしかば、高宗、都を杭州に奠む。實に西紀千百三十四年なり。既にして金の太宗没し、從孫熙宗嗣立して、宗族蒲魯虎、撻懶等

秦檜

金宋の和

粘沒喝に代りて事を用ゆ。時に宋相秦檜は撻懶と善きを以て、南北媾和の利を唱へしに、金の熙宗は蒲魯虎、撻懶が宋に通ずるを疑ひて之を誅し、兀朮をして南伐せしめしが、宋將岳飛の破る所となれり。是に於て岳飛、勝に乗じて河北の地を定めんとせしも、秦檜、和議を固持し、東、淮水より西、大散關陝西省鳳翔府寶雞縣を以て兩國の界となし、宋は金の封冊を受け、歳貢を納むるを條件として、和を媾じ、亦力めて反對黨を抑壓し、文字の獄を起して、學者の議を塞ぎ、頻りに諸將を誣貶して、其兵權を奪へり。

時に金の宗室廸古乃、熙宗を弑して位を篡ひ、都を燕京に移して五京を置き、親、六十萬の大軍を帥ゐて南下せんことをし、其下の殺す所となり、從弟烏祿位に即きて南伐の兵を

金の極盛

罷め、次で使を宋に遣はして和を求む、之を金の世宗となす。此間宋は孝宗位に在りて銳意恢復を圖り、北伐の師を出せしも其利なきを見て金の請に應じ、宋の歳貢の額を減じて君臣の禮を叔姪の禮に代へ、前約の境界によりて和を媾せり。此時に當り金は東、高麗を威服し、西、西夏を懷け、南、漢、淮、二水より北、臚胸河シケルに及べる大版圖を掩有して東亞の最大強國となり、世宗は女眞の國風を保守して奢侈文弱に流るゝを制し、金室の盛其極に達せり。

然るに金の世宗と宋の孝宗とは年を同くして没し、金には章宗嗣立して國勢漸く衰へ、宋には光宗位に即きて國人服せず、韓侂胄は光宗の子寧宗を擁立して大儒朱熹を逐ひ、亦宰相趙汝愚を竄して内政を專にせしが、金の國政紊れた

韓侂胄の北伐

るに乗じ遂に前約に背きて北伐せしに、金の章宗邀へ撃ちて之を破り勝に乗じて南に下りしかば、寧宗大に懼れ西紀千二百八年韓侂胄の首を金に送り、歳幣の額を増し犒師料を贈り、叔姪の禮を改めて伯姪の禮となして宋、金第五回の和を媾せり。

第十二章 宋代の儒學文藝

儒學は漢唐の代を通じて各經皆博士の職ありて成説を傳承し新論を排斥せしかば、其發達は遂に訓詁註疏の外に出づること能はざりしに、宋に至りて其風一變して理學起れり。是蓋佛教遍く天下に行はれて士大夫の之を研鑽する者多きより、不知不識の間に、幽遠なる哲理を儒學の上に

宋の理學

求むるに、よれるなり。理學の鼻祖は周敦頤にして、濂溪先生と號し、深く易理を窮め、大極圖說、通書等を著し、大に哲理を述べ、二程即、程顥、程頤は實に其門下より出で、前者は明道先生と號して定性書を著し、後者は伊川先生と號して易春秋の傳を著はせり。之と前後して河南の邵雍は易學數理に通曉し、康節先生といひ、關中の張載は横渠先生と稱し、二程と名を等うせり。南宋の高宗の時、閩中の朱熹、此等諸儒の所説を集輯、參酌して宋學を大成し、後の儒學をいふ者皆範を此に取り、朱子學は進士登庸にも用ゐらるゝに至れり、其著書には易本義、詩集傳、四書集註、小學、近思錄、通鑑綱目等あり。宋末に至りて眞德秀出で再び朱熹の學説を唱道せしが、當時又陸九淵出で象山と號し、德行を重んじ、朱熹

朱熹と陸象山

の博學を先こなせるに對峙、頤頤して相下らず、遂に一家の學をなせり。此他司馬光は資治通鑑を撰して治亂興亡の跡をえめし、馬端臨は文献通考を著して制度典章の沿革を記し、共に宋代有名の史家と稱せらる。

唐の詩人は歷代に冠絶し、五代に至りては徐鉉、杜荀鶴の徒あるも文藝亦唐に比す可くもあらざりしが、宋に至りて詩は到底及ばざるも、文章は殆ど唐に凌駕せんとするの盛況を呈せり。蓋し其初め柳開、穆脩等が古文は未見るに足らざりしも、歐陽修出で文は韓柳の壘を磨し、宋代の文章に一生意面を開きぬ。之に次ぎて蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石等の諸大家出で、就中蘇軾は東坡と號し、文章を以て歐陽修と並べ稱せられ、後世唐宋の文を論ずるもの皆韓、柳、歐、蘇を推重

文章

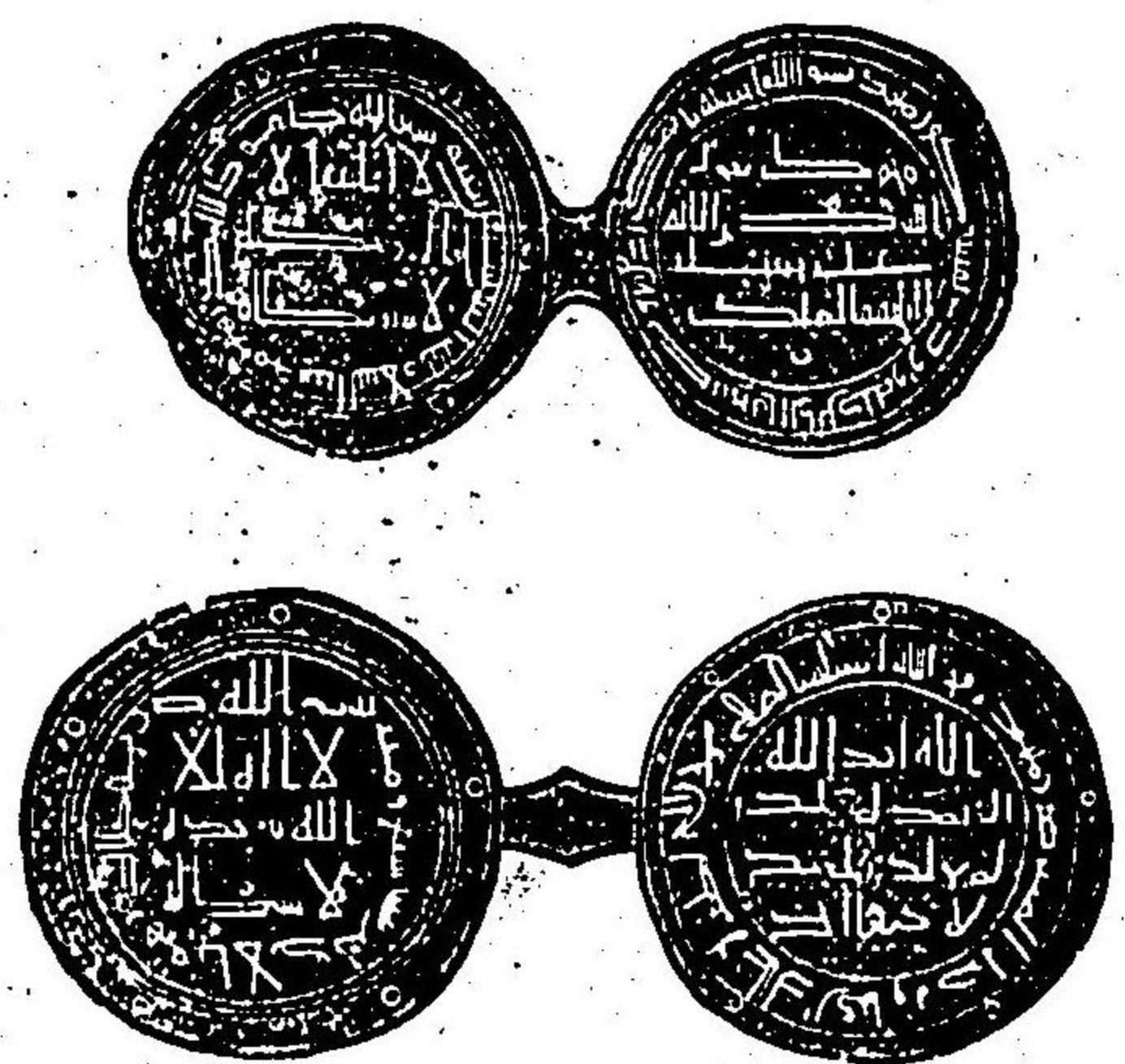
せり。東坡亦非凡の詩才を具へて梅聖俞、黃魯直、王安石等
と宋詩の大家たり。宋室南渡の後は理性の學盛に起りて
詩賦文章漸く衰へたれども、尙文章に李綱、王十朋、葉適、陳亮、
呂祖謙等、詩に楊萬里、范成大、陸游等の名家尠からず、殉國の
名士文天祥の如きも亦詩文を善くしたりき。

第十三章 大食國の分裂 印度に於ける回教國 西遼の建國

唐の中世大食の哈利發アルマンソル始めて都をバグダード
に奠め次でハラウン、アル、ラシッド及其後嗣者頻に學術を奨
勵して文化頗開けしが、其弊文弱に流れ所在の豪族兵政の
權を私し自、櫻里丹と號して獨立の勢を爲せり。時に波斯

大食國の
盛衰

の豪族サマンの曾孫イスマイル、哈利發の爲めに叛徒を征
し、其信任を得て不花刺に治し此にサマン家を興して其版



大食國の貨幣

圖、北は天山の西麓より南は
波斯灣及印度の北境に及べ
り。是より先き回紇即、畏吾
兒は吐蕃に破られ黠戛斯に
逐はれて一部は河西に奔り
西夏に投ぜしが、一部は高昌
吐蕃に奔り、次で吹河上の別

喇薩軍に移り哈刺魯部を率ゐて中央亞細亞を侵せり。適
不花刺の主イスマイル没せしかば、畏吾兒のイレク汗は其
機に乗じてサマン家を滅ぼし、天山の東端よりアム河に互

哥疾寧家

印度の形勢

る大領土を掩有しぬ。而してサマン家の臣突厥種のセブク、ナギンは哥疾寧の南に據り、其子マームードは遂にサマン家に代りて櫻里丹を

亞比拉亞 文 字
لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ أَحَدٌ اللَّهُ الْعَزِيزُ الْحَيُّ بِذَلِّ ابْنِهِ
الرَّجِدِ لِكِي لَا يَهْلِكُ كُلٌّ مِنْ بَرِيٍّ بِبَلِّ
تَكُونُ لَهُ الْحَيَوَةُ الْأَبَدِيَّةُ.

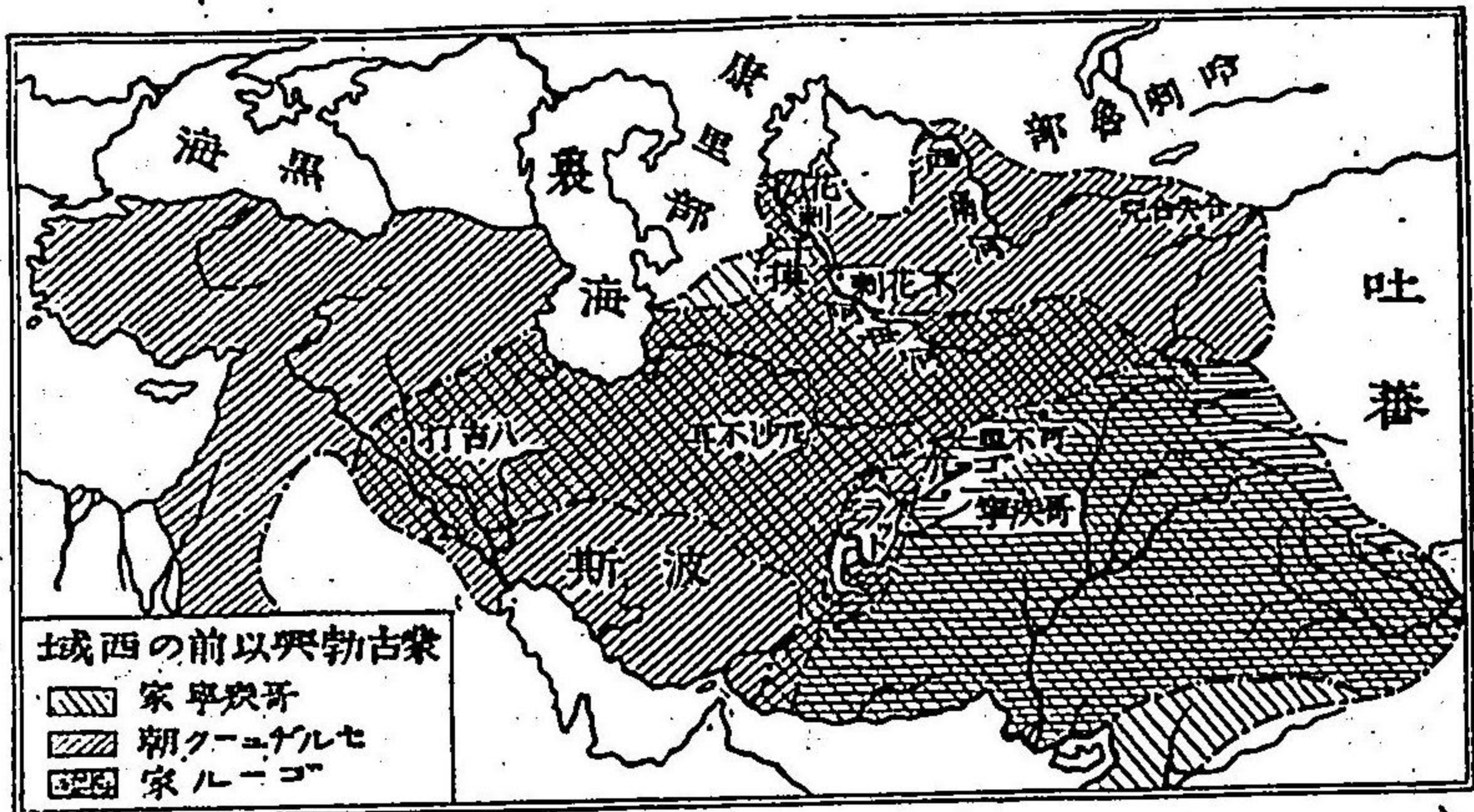
波斯 斯 文 字
زیرا که خدا آفرید جهان را دوست داشت
که فرزند یکبار خور را از زانی فرمود تا که
هر کس که بر او ایمان آورد هلاک نشود

ば西紀千一年哥疾寧のマームードは哈利發の名を借りて兵を印度に用る諸侯分争の弊に乗ぜり。是に於てラホー

マン家に代りて櫻里丹を稱し、アム河以南波斯灣に至る地を統領し、次で兵を印度に出せり。

時に印度はラシアプト種族、西北中三印度を占領して幾多の小主國に分れて統一する所なかりしか

セルヂューク朝



ルのサイバル王ラシアプトのピシライ王等諸侯を糾合して之に當りしも、マームードは前後二十五年間に印度に侵入するに十七回、到る處伽藍を壞り佛像を毀ち、南はグゼラートに抵り、東はカノーヂを極めて信度、恒河の流域を擧げて悉く其領土をなせり。然るに西紀千三百年マームードの没するや、哥疾寧家の勢威頓に衰へ、其領土の大半は當時不花刺に興れるセルヂューク家の奪ふ所とせられり。

是より先き突厥種族の不花刺附近に移住せる者の中にセルジュークといへる者あり、當時畏吾兒、哈刺魯二部が中央亞細亞を擾すに乘じ漸く領土を擴めて部落日に強盛に赴き、其孫トグルルに至り遂に哥疾寧家の衰弊に乗じて之を破り、呼羅珊の地を得て都を尼沙不耳に奠め、次で哈利發より回教保護者の號を得たり、時に西紀千三十七年なり。西紀千六十年其從子アルプ、アルスラン立ちて東羅馬の兵を破り亦アルメニアを征して地を西に擴め、其子メリク、シアーは尋思罕カサマドを取り合失合兒を併せ、亞拉比亞、シリア、埃及を侵し、東は合失合兒より西は亞拉比亞に及べる大版圖を掩有して國運隆盛を極めたりしが、其歿するに臨んで諸子諸臣に其地を分割せしまり國勢漸く衰微し、次で中央

西遼の建國

亞細亞に西遼の興るに會しセルジューク家の勢力全く衰へたり。

遼の亡ぶるや宗室耶律大石、餘衆二千を率ゐて西走し、哈刺魯を伐ち畏吾兒を併せ中央亞細亞に侵入して尋思罕を降し、自、黑契丹の濶兒汗と稱す、所謂西遼の德宗是なり。セルジューク朝のメリク、シアーの子サンヂール來り伐ちしかば、德宗之をアム河に擊破し、次で花刺子模を降し、西はアラ海より東は西夏に及べる大版圖を領して中央亞細亞の最強國となれり。然るに西紀千百三十六年德宗没し子仁宗を歴て孫直魯克に至り、乃滿の屈出律及花刺子模のムハメットの分割する所となりぬ。

蠻の太陽罕の子屈出律、蔑里吉の部長脱脱と合して蒙古を伐ちしが、成吉思汗之を撃破して脱脱を殺し、屈出律を走らして更に西夏に迫れり。

蒙古西夏を降す

西夏は李元昊以來常に宋と争ひしが、李元昊の曾孫李仁孝、金の世宗の助を借り内亂を鎮めて金に服し、次で李仁孝の子李純祐に至り従弟李安全の弑する所となり、國內大に亂れたるに乗じて成吉思汗屢西夏を侵せしかば、西夏の主李安全遂に其女を納れて降を請ひ、次で畏吾兒、哈刺魯二部も亦風を望んで蒙古に降る、是に於て成吉思汗、全力を擧げて金に向へり。

金の衰運

此時金主章宗は已に没し、其叔父允濟位に在れども柔弱にして士心を失ひ、國勢大に衰へしかば、成吉思汗之に乗じ

て三道より兵を進め、西京府大同を陥れ、河東、河北、遼西の州縣を抜き、燕京に逼りしに、金の大臣等允濟を弑し、章宗の庶兄宣宗を立て、公主、金帛を納れて和を求めしかば、成吉思汗引き還へりぬ。然るに金は燕京の蒙古に近きを憂ひ、都を汴京に遷せしに、成吉思汗は其疑心あるを怒り復南下して燕京を陥れ、更に西より汴京附近を剽略して還れり。是に至りて金は僅に北、眞定を保ち、東、黄河を阻て西、潼關を扼して自衛り、蒙古は殆ど黄河以北の地を裁定せり。

西遼の滅

是より先き、乃蠻の屈出律は西遼に奔りて之に頼り、次で花刺子模王ムハメッドと内外相應じて西遼を滅ぼし、シール河を境として其地を分ちしが、今や蒙古が金と攻戦せる虚に乗じて之を襲はんとせしかば、成吉思汗其將哲別チエベを遣り

伐つて之を殺さしめ、悉く西遼の故地を收め、遂に花刺子模
 の境を接するに至れり。時にゴールの東南にシハブ、ウヂ
 シ興起して哥疾寧家に代り、阿富汗斯坦、北印度を併せ、進ん
 で中印度を略せんとして恒河に至りて没せしかば、花刺子
 模王ムハメド此機に乗じて直に其阿富汗斯坦を奪ひ、亦哈
 利發がシハブ、ウヂシと通じて己を夾撃せんことを謀れるを怒
 り、更に西に進みて哈利發を廢立せんことを功なくして還り
 兵氣大に沮喪し、加ふるに母后ツルカン可敦權を專にして
 國勢頗る傾けり。適蒙古の隊商百餘人花刺子模の訛打刺
 城に於て殺されたるを機とし、成吉思汗、四子朮赤、察合臺、阿
 窩臺、拖雷と共に西征して阿力麻里の附近城を經、忽章河、
 河を渡り、花刺子模の國都尋思罕を陥れしかば、ムハメド呼

成吉思汗
の西征

羅珊に遁れしも、蒙古の將速不臺哲別に追躡せられ窮蹙し
 て裏海の一孤島に竄死す、時に西紀千二百二十年なり。ム
 ハメドの長子札蘭丁兵を哥疾寧に募り恢復を圖りしが、成
 吉思汗の急に來り伐つに及び、印度河を超えてデリーに遁
 れ、其王アルタムシに頼りぬ。此間速不臺哲別の二將はム
 ハメドを追ひて裏海の西岸に至り、欽察部が曾て蔑里吉の
 餘衆を納れしを怒り、太和嶺高加を踰えて之を伐ちしに、南
 阿羅思亞露西の諸侯幾富の太公密赤思老等、欽察部に應援し
 て蒙古軍を阿里加河畔附近海に邀へしかば、蒙古の二將大に
 之を破り、其地を掠奪して西紀千二百二十二年東に歸れり。
 成吉思汗、西征の間に宋、金、西夏は遂に相和するに至りしが、
 連年の攻戰に國力頗る疲弊せしかば、成吉思汗、西より歸るや

西夏の滅亡

先づ西夏を伐ちて其主李峴を降せり、西夏は李元昊より凡九十年にして亡ぶ、時に千二百二十七年なり。是に於て成吉思汗、更に金を侵さんとし、西紀千二百二十七年宋理宗慶三年、後堀川天皇安貞元年六盤山甘肅省鞏昌府附近に至りて病没す、時に年七十三、之を元の太祖となす。

元の太宗及憲宗の南征 拔都及旭烈兀の西征

一七二

第二章 元の太宗及憲宗の南征

拔都及旭烈兀の西征

太祖領土を四子に分つ

元の太祖没するに臨みて其大領土を諸子に分ち、長子朮赤は既に没したれば其遺族に阿羅思の南より今の吉利吉思荒原に至る一帯の地を與へ、次子察合台には畏吾兒より阿姆河に至る西遼の故地、三子窩濶台には乃蠻の故地、末子

太宗の南征

蒙古宋に迫る

拖雷には蒙古本土を譲り、窩濶台を大汗とし、拖雷をして輔けしむ。窩濶台は即ち太宗にして都を喀喇和林杭愛山下に奠め、太祖の遺志を継ぎ弟拖雷をして漢水を下らしめ、自潼關を破り腹背夾撃して汴京を陥れて金の哀宗を蔡州河南省汝寧府に奔らし、更に使を宋に遣はし約するに河南の地を以てし、宋將孟珙と合して西紀千二百三十四年宋理宗端平元年、四條天皇文暦元年蔡州を陥る、金帝を稱するここ九世百二十年にして亡ぶ。時に宋は金に勝つるの勢に乗じて中原の恢復を企て、急に起りて蒙古の守兵を逐ひ、汴京、洛陽を奪ひしかば、元の太宗の子瀾端軍を率ゐて直に江淮に逼り、四川に入り、連に宋の州郡を陥れ、宋將孟珙等克く戦ふと雖も其勢日に蹙れり。

大遼高麗の降服

曩に蒙古の金を伐つや遼の遺族等金に畔きて遼東に據

元の太宗及憲宗の南征 拔都及旭烈兀の西征

一七三

り國を大遼と號す。時に高麗は高宗位にあり、權臣崔螞事を
用ゐて政紊るゝに乘じ、大遼の兵入寇して北邊を侵略せ
しが、適、蒙古の部將哈眞、遼東に出て大遼を討滅し併せて高
麗を威服せり。已にして高麗、蒙古の使者を害せしかば、蒙
古の將撒里塔、京城を陥れ高宗、難を江華嶋に避けしも、西紀
千二百四十一年遂に降り表を上りて臣と稱しぬ。

拔都の西征

かく太宗が東南二方の經略を爲せる間に、曩に成吉思汗
の逐ふ所となりて印度に遁れたる札蘭丁は、德里より出
て兵を集めて故地を恢復し、西方復擾る。太宗乃、伐ちて之
を破り更に五十萬の大軍を起し、朮赤の子拔都を總督とな
し其兄幹耳朶、己の子貴由、孫海都、拖雷の子蒙哥等を將とし、
速不台を先鋒として西征せしむ。速不台進んで、亦的勒河

ガチルを渡り不耳阿耳を征し、蒙哥は欽察を攻め、拔都は北に
向ひて烈野贊を屠りモスカウ、ノブゴロッドを陥れ、更に南に
轉じて幾富を焼き阿羅思の各地を蹂躪し、拔都是一軍を率
ゐて先づワラキアを蹂躪し、馬札兒利の大軍をサヨ河に
撃破し、ブタ、ペストを陥れて國王を奔らし、禿納河、ダブ河を
氷渡してグランを屠る。海都は別軍を率ゐてクラカウを
取りシレンシアに入り、歐北諸侯王の連合軍をワルスタットに
破り、東南に轉じてモラギアを侵し、オルミツを陥る。是に
於て歐洲全土震撼し、捏迷思、以下諸邦の民皆荷擔して遁
る。適、太宗没したるを以て、拔都は諸將に凱旋の命を下し
て東に歸らしめ、自、南阿羅思に留りて東は吉利吉思荒原よ
り西はカルパチア山に至る禿納河の下流及太和嶺北の地

欽察汗國

元の太宗及憲宗の南征 拔都及旭烈兀の西征
を領し、亦的勒河畔の薩來に都して金黨國即欽察汗國を建
つ、實に西紀千二百三十六年より全四十三年に至る間なり。
西紀千二百四十一年元の太宗没し、長子貴由大汗の位に即
きて定宗となりしが、在位三年にして没し、蒙哥位に即く、之
を憲宗となす。

大理國の降服

初め唐の玄宗の時雲南の南方、蒙舍詔即南詔の酋長皮邏
閣、唐の封冊を受けて雲南王となり、次で屢吐蕃を破りて大
に領土を開き、後皮邏閣六世の孫酋龍、國を大理と號して皇
帝と稱し、交趾より東印度の間を掩有せしが、其死後國勢漸
く衰ふ。宋は西北の防禦に忙しくして大理と通ぜざりし
が、憲宗、蒙古の大汗となるに及んで、其弟忽必烈、漠南の軍事
を總べ、四川より雲南に入り、大理王段知興を降せり。吐蕃、

吐蕃と和す

は始祖棄宗弄贊以來深く佛教を信ぜしが、唐の玄宗の天寶
年間に北印度の僧巴特瑪撒巴々來りて喇嘛教を創め、年々
共に其勢を加へ、西紀千二百五十年の頃に至りて喇嘛拏底
達の威令全吐蕃に遍ねし。忽必烈、大理を降して、吐蕃に入
り拏底達と和し、次で速不台の子兀良哈台をして交趾を伐
たしむ。交趾は五代の時丁部領瞿越國を建て、宋の太祖の
封冊を受けて交趾郡王となり、後黎氏を経て李氏に至り、國
を大越と號し、次で安南と改め、宋の理宗の時に及び、陳煚、李
氏に代りて國勢大に興隆せしが、蒙古の入寇に遭ひ防戦し
て利あらず、遂に降を請へり。

交趾降る

憲宗の南征

蒙古の憲宗已に西南の三國を降せしかば、皇弟阿里不哥
を留めて喀喇和林を守らしめ、自、大軍を率ゐて南下し、宋の

元の世祖
位に即く
旭烈兀の
西征

四川の諸城を取り合州四川省重慶府を圍み、弟忽必烈をして江を渡りて鄂州湖北省武昌府を圍ましめ、兀良哈台は交趾より北上して潭州湖南省長沙府を侵す。かく宋は三方に敵を受けしを以て理宗は賈似道に命じて蒙古に當らしめしに、賈似道鄂州に至り密に使を忽必烈に送り、幣を納め臣と稱して和せんことを請ふ。適憲宗没し、阿里不哥喀喇和林にありて憲宗の諸子、定宗、察合台の子孫等を従へ大汗たらしめんとせるを以て、忽必烈は江北の地と歳幣とを約して賈似道の請を聽るし、北歸して開平内蒙古多倫諾爾の北に至り大汗と號し、進んで阿里不哥を降し、都を燕京に奠め國號を立て元といふ、之を世祖となす。實に西紀千二百七十一年宋度宗咸淳七年、龜山天皇文永八年なり。是より先き西域地方は札蘭丁已に敗死せしも、回教徒屢

サラセン
帝國の滅
亡

伊兒汗國

亂を爲して尙鎮靜せざりしかば、憲宗の弟旭烈兀西征して天山の北麓よりアム河畔の柯提ケチに至り、裏海の南に木乃奚ムノヒを服し、更にクホスタンを圍みてイスマイル派の教主ロックン、ウヂンを降し、西紀千二百五十八年宋理宗寶祐六年、後深草天皇正嘉二年八吉打を陥れ、哈利發モスタシムを擒殺してサラセン帝國を滅ぼし、モスタシムの一族を密昔兒ミフキ及埃及に奔らし、郭侃等をして印度に向はしめ、自、大軍を率ゐて西に進みシリアを襲ひ、アッポを略し、ダマスカスを陥れ、天方ティラを取り、將に密昔兒の回教徒を殲さんとする。適憲宗の訃音至りしかば、師を旋して國に歸り、帝位を繼がんとせしも、密昔兒の兵シリアを侵すに會し、其意を果さず、悉く小亞細亞地方を略定して、タブリスに都を奠め、アム河以西に伊兒汗國を建設せり。

第三章 元の世祖の一統及東侵

世祖宋を伐つ

曩に蒙古の軍北に退くや、賈似道は臣と稱し幣を納むるの約を慝し軍功を貢うて理宗の寵任を得、頻に威福を弄びて國難を顧みず。既にして元使至りて前約を迫りしに賈

似道囚へて還さざりしかば、



元元の世祖大に怒り、先づ襄陽のを圍みて呂文煥を降し、伯顔世をして呂文煥と共に東の方祖臨安を衝がしむ。宋の恭帝位に即きて賈似道を貶竄し、

勤王の師を四方に徴しければ、文天祥、張世傑等所在勤王の

臨安陥る

兵を起せしも、臨安既に圍を受けて陳宜中、和を唱へ表を草

して元に降り、元兵は孝恭帝及理宗、度宗の后を執へて國に

送る。是に於て宋の諸王、群臣逃れて海に浮び恭帝の兄端

宗を福州に立てしも、元兵來り迫まるを以て張世傑等帝を

奉じて廣州に奔りしに帝没せしかば、陸秀夫等更に皇弟衛

厓山の敗

王昺を奉じて厓山廣東省廣州府新會縣の南に遷る。然るに元兵水陸

より並び迫り、文天祥は生擒せられ、陸秀夫は帝と共に海に

投じて死し、張世傑は安南に遁れんとして溺る。宋は太祖

宋の滅亡

より十八世三百二十年にして亡ぶ、實に西紀千二百七十九

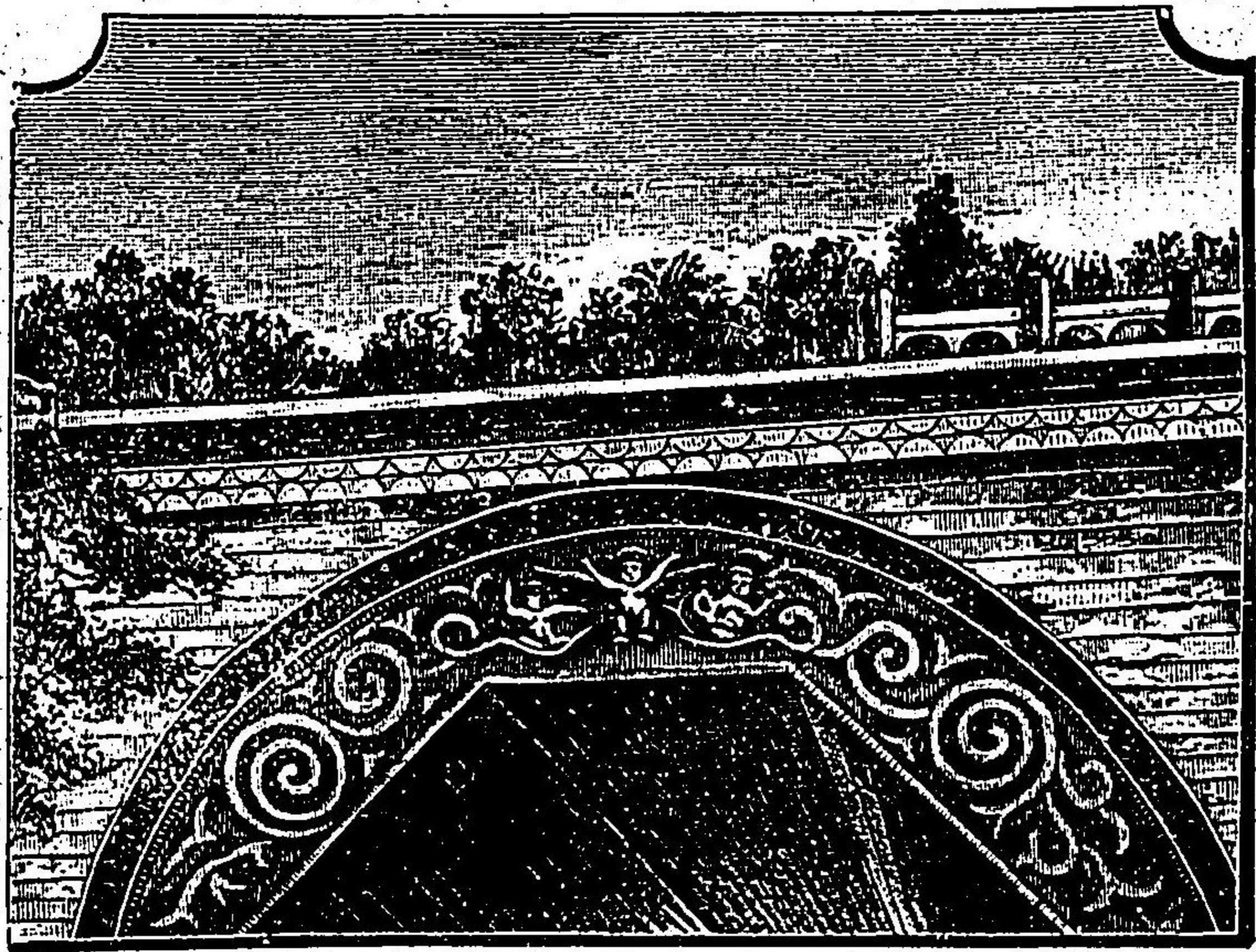
年元世祖至元十六年、後宇多天皇弘安二年なり。

時に高麗の明宗没して元宗嗣立せしが權臣の爲に廢せ

元と高麗

られしを以て、元の世祖爲に問罪の師を起し、慈悲嶺以西の

地を収めて元宗の位を復し、女を以て元宗の子忠烈王に尙し之を介して日本を招致す。我邦は唐末に、使聘を斷ちし、以來五代を経て宋に及び、僧侶、商賈等の私航する者ありしも、國際上の交通は全く絶えたりしが、此時鎌倉の執權北條時宗は元の國書禮なきを以て其使を斬りしに、世祖大に怒りて忻都を遣はし我壹岐對馬に入寇せしめしも功なく、再び阿刺罕、范文虎に戰艦四千五百艘を授けて我鎮西に入寇せしむ。我兵颶風に乗じて之を撃ち悉く元師を剿す、實に我後宇多天皇の弘安四年にして西紀千二百八十一年なり。世祖已に志を我邦に失ひ、鋒を轉じて南に向ふ。當時大理國の西南に緬國緬甸ありて、阿羅漢白古を併せ暹國暹羅の一部を略して南方に雄視し、元の招諭に應じて朝貢せざりしかば、



世祖は納速丁ナシラツツヂンを遣りて之れを伐たしめしも功なく更に相

吾答兒ウダニを遣る。相吾答兒進んで緬の都蒲甘カガを陥れて其主を降し、遂に暹、金齒以下の諸國を威服せり。時に占城は交趾の南に國して亦元の招諭に應ぜざりしかば、世祖は皇子脱歡トクカンをして之を伐たしめ途を交趾に借らんさせしに、交趾の主陳吟、元兵を拒み且、之を撃破せしが、幾ならず

南海諸國
入貢す

元と四汗
國

元の世祖の一統及東征

一八四

して陳旴罪を謝して入貢せしかば占城も亦來降せり。是に於て馬八兒南印度の東岸來々暹羅の瓜哇蘇門答刺等相次で朝貢し、元の威令遂に南海に遍ねし。

此に於て蒙古の大帝國は亞細亞、歐羅巴の二大洲に跨り、アム河の西に伊兒汗國、其北に欽察汗國、シール河外天山附近に察合台汗國、アルタイ山附近に阿窩台汗國あり、支那本部を中心となし、遼東、内外蒙古、青海、圖伯特、中央及東南亞細亞を統領せる元室あり、元の世祖は蒙古の大汗を以て此大帝國に臨み、アム河、嶺北、遼陽の三行省、阿力麻里、別失八里の兩元帥府を置き、此大版圖を管理す。此に至りて蒙古の勢威は其最頂點に達せりと謂つ可し。

第四章 海都の興亡 元代の治亂

欽察察合台伊兒汗三國の盛衰

海都の興
亡

初め太宗の諸子孫皆憲宗の大汗たるを悦ばざりしを以て、憲宗の没後、阿里不哥を助けて世祖と争ひしが、此に至りて世祖の東南を經營せる間に、太宗の孫海都トクトク也迷里トクに據りて世祖に畔く。世祖よりて察合台の曾孫八刺ハサクを察合台汗となし、拔都の孫蒙哥帖木兒を欽察汗となして海都に備へしに、八刺、蒙哥帖木兒ともに皆海都と連和して欽察、察合台、阿窩台の三汗國は海都を仰ぎて大汗となせり。獨り伊兒汗阿八哈は世祖の弟旭烈兀の子なるを以て海都に抗せしも、其没するや繼承の争起り國內亂れて復、海都を拮制する

能はざりしかば、海都は八刺の没後其子都哇を察合台汗に任じ兵を併せて東の方元を侵し、滿州吉林地方に在る太祖の子孫を誘ひて世祖を夾撃す。然るに世祖は伯顔をして海都を喀喇和林に扼せしめ、自滿州を平定せしかば海都西に去りしが、西紀千二百九十四年世祖没して成宗位に即くや海都また屢入寇し、遂に大舉して元に逼りしに成宗の従子海山、哈喇和林を守り逆撃して大に之を破れり。次で海都没し其子察八兒は都哇と共に元に降りしが、成宗を経て武宗^海の時に至り察八兒叛きて敗れ阿窩台汗國遂に亡ぶ、實に世祖の没後十四年にして西紀千三百八年なり。

武宗の後弟愛育黎拔力八達繼ぎて仁宗となりしに、鐵木迭兒帝の信任を得て權を弄し、次で其義子鐵失は仁宗の子

阿窩台汗國亡ぶ

元室の衰運

英宗を弑して泰定帝を立てしが、帝位に即きて鐵失及其黨與を誅戮せり。泰定帝の没後天順帝は燕帖木兒の逐ふ所となり次で武宗の子明宗立ちて弑せられ、其弟文宗及明宗の二子寧宗順帝相次で位に登る。抑元室は繼承法なきを以て篡奪の禍相踵ぎ、擁立の權臣國政を紊りて帝威を損ぜり。加ふるに喇嘛一たび世祖の信任を得てより其徒跋扈し、農民は之に假托して租を輸せず、姦凶は此に附隨して刑を免れ、歲入足らずして賞罰濫れ、且征伐屢起りて府庫匱乏し、交鈔を濫發して物價暴騰し、賦課重くして民力を消耗し、人心遂に元室を離る。是に於て漢族敵愾の氣を鼓して四方より起り天下復亂れぬ。

時に伊兒汗國は阿八哈の孫合贊之に君臨し、憲政を振肅